

# 博 士 論 文

論文題目    施 蛰 存 文 学 研 究

——1920、30 年代の創作・翻訳活動を中心に

氏    名            徐   曉   紅

目次：	
序論	3
第一章 施蛰存的鴛鴦蝴蝶派文壇におけるデビューをめぐって	v-11
第一節 施蛰存の生い立ち及び作家志向の形成	12
第二節 鴛鴦蝴蝶派試論	14
一、鴛鴦蝴蝶派社団・サロンの社会史的意義	
二、未分化だった鴛鴦蝴蝶派と新文学派の境界線	
第三節 施蛰存の「新旧ともに異議なし」をめぐって	23
一、「青萍談吐」論	
二、「新旧我無成見」論	
第二章 施蛰存の初期小説創作	27
第一節 第一期創作ピーク期の到来——1923年頃の創作活動をめぐって	28
一、白昼夢・無意識を紡ぎ出す短篇小説——「廉価的麴包」	
二、夢による臆病の克服——「恢復名誉之夢」	
三、自らの芸術を守り続ける人——「老画師」	
四、男女友情の賛歌——「玉碎記」	
第二節 第一小説集『江干集』の誕生	33
第三節 家出の「感傷」者の系譜——施蛰存の恋愛小説について	37
一、死に急ぐ女性への「不忍」——「執紼記」	
二、「棄家」の行方——「綵勝紀」	
三、愛の復活——「冷淡的心」	
四、自由恋愛の不幸——「梵村歌侶」	
第三章 施蛰存の社団活動——蘭社から水沫社まで	42
第一節 「郷関」杭州での文学活動——蘭社時期（1923）	42
第二節 上海進出後の新結社活動（1923～1924）	46
一、青鳳社——上海大学時代の文学結社	
二、瓔珞社——外国文学翻訳才能の開花	
第三節 水沫社時期——本格的出版事業のスタート（1927～1931）	48
第四章 翻訳活動から再評価する施蛰存文学	51
第一節 中国におけるハムスン文学の受容	52
一、民国文壇のハムスン文学の紹介	
二、ハムスン文学の翻訳について	
第二節 『恋愛三昧』について——翻訳・創作の同時進行	55
第三節 未亡人像の系譜——施蛰存とハムスン、シュニッツラーとの比較の試み	59
一、未亡人の「生」の苦悶への同情——ハムスン「生の声」と施蛰存「周夫人」	
二、未亡人の愛の幻滅——施蛰存「春陽」とシュニッツラー『ベルタ・ガルラン夫人』	
三、「生の叫び」の文学的系譜	
第五章 結論	66
参考文献	89
付録資料	92

## 序論

施蛰存 (Shi Zhecun, シー・ツェツン, しちつそん, 1905～2003) は中華民国期に作家・ジャーナリストとして活躍し、人民共和国期には華東師範大学教授として古典文学研究で大きな業績を挙げている。近代中国文学の形成、発展のプロセスを生身で体験した、心理分析小説の泰斗である。中学在学中に文壇でデビューし、江南地方の文学サークル・サロンでリーダーシップを発揮し、創作・編集・翻訳活動を率先して行い、1930年代に上海でモダニズムの文芸誌『現代』の編集長となり、敏腕ジャーナリストとして、また作家としての才能を開花させた。40年代に入ると、小説の創作は休止したが、外国文学の翻訳及び古典文学の研究に携わり、雲南大学、厦門大学、華東師範大学などで教鞭を執った。

1949年の人民共和国建国後、施蛰存は次第に忘却されていったが、海外の中国文学研究者は施蛰存らの現代派文学を高く評価した。70、80年代に入り、中国における文化・文学環境の開放的变化にともない、施蛰存文学の再評価が始まった。施蛰存自身も1983年には研究誌『中国比較文学』の副主編を務め、『新文学史料』、『出版史料』などで20、30年代の文学を回顧するエッセーなどを発表している。「上海文学芸術傑出貢献賞」(1993)、「重慶華文作家文芸基金会敬慰賞」(1995)を相次いで受賞すると、イギリス、日本、アメリカの中国文学研究者が続々と施蛰存を訪ねて指導を仰ぎ、施の語った自らの体験、観点などを大いに参照したうえで、現代派の文学的な位置付けを定めた。現在の現代派研究も、施蛰存本人の回想談を抜きにしては成立しないといっても過言ではなかろう。以下、施蛰存前半生の文学活動を概観してみよう。

施蛰存は幼少期に私塾に通い、父親の影響で古典文学に関心を抱き、自習により次第に古典の素養を深めていった。その一方で、当時流行していた林琴南の翻訳小説をはじめ、『新潮』、『新青年』などの新興白話文芸誌や、魯迅、葉聖陶、冰心らの作品を愛読していた。1921年に、「施太邱」、「施青萍」などの筆名を用いて『民国日報』副刊「覚悟」、鴛鴦蝴蝶派(以下、「鴛派」と略す)刊行物『礼拝六』などに投稿し、新進気鋭の若手作家として注目を集め始めた。杭州にあるミッション系の之江大学の英文系に在学中に、戴望舒(Dai Wangshu, タイ・ワンシュ, たいぼうじょ, 1905～1950)が発起した蘭社に加入し、同人旬刊誌『蘭友』の編集活動に携わり、1923年に、短篇小説集『江干集』を自費出版したほか、鴛派刊行物に盛んに投稿した。こうして施蛰存は最初の創作ピーク期を迎えたのである。ほぼ同じ頃、維娜絲(ヴィーナス)文学会を発足させ、「新旧ともに異議なし」(「新旧我無成見」)という文学観を打ち出し、同世代の作家や後述の卡党らの間で多くの賛同を得た。しかし「非宗教大同盟」の運動に参加したため、このミッション系大学を自主退学し、1923年秋、上海大学に転学した。その後も戴望舒らと青鳳文学会を発起し、文芸誌『青鳳』や同人作品集の出版も計画したが、これは頓挫している。

翌年、上海大学も退学し、英語やフランス文学を習得するために、大同大学の英文系、震旦大学のフランス語専修コースを転々とし、様々な外国文学を耽読した。当時の施蛰存は社会、政治活動にも関心を抱き、1925年、大同大学で「五・三〇」事件に参加し、後に友人の紹介で共産主義共青团(C.Y.)と国民党左派に加入した。1926年春には文学運動を再開し、戴望舒、杜衡と同人誌『瓔珞』を発刊、短篇小説「春灯」(後に「上元灯」と改題)、「周夫人」を発表した。1927年、四・一二事変によって、施蛰存は震旦大学を退学し、松江の実家での蟄居生活を始めた。このように施蛰存は杭州、上海で四カ所の大学を転々としたがどの大学も正式に卒業できないまま、学生生活に終止符を打った。1927年秋、松江聯合中学校の国語教員となり、後に戴望舒の紹介で馮雪峰と知り合い、共に松江の実家で暮らしながら創作・翻訳活動に没頭した。当時流行の新興革命文学に賛同し、創作・翻訳作品を綴った隔週刊の同人誌『文学工場』を二期まで

編集したが、「急進的過ぎる」という理由で出版には至らなかった。

1928年に田山花袋の『蒲団』に倣った「娟子」を『小説月報』に発表したのを契機に、新文学派に仲間入りしたと見なされる。同年、劉呐鷗の出資により設立された第一線書店（後に水沫書店と改名）が発行する文芸誌『無軌列車』、『新文芸』の編集活動に携わり、精力的な創作活動を始めた。この時に施蛰存は「阿秀」、「花」などのプロレタリア風の小説を試作したが、自分の文学的資質と合わないことを自覚し断念する一方、歴史故事や古典に対して心理分析的手法を用いた「鳩摩羅什」、「石秀」などを発表し、「新路径」を歩むことを宣言している。1929年頃、「上元灯」、「周夫人」などを収録した小説集『上元灯及其它』、『娟子姑娘』、『追』を上梓し、これと並行してシュニッツラー、ハムスンらの作品を翻訳してもいる。また、都市に生きる男性の奇怪な性心理を描出した「巴黎大戲院」、「夜叉」などを発表したが、楼適夷、錢杏邨らの左翼作家は施に対し「新感覺派」という批判的レッテルを貼り、施蛰存の新しい文学的な試みには難色を示した。

1930年代初頭、施蛰存は『將軍底頭』（1932）、『梅雨之夕』（1933）、『善女人行品』（1933）などの作品集を続々と上梓し、第二の創作ピーク期を迎えた。1932年には上海の大型文芸誌『現代』の編集人に抜擢され、優れたジャーナリストとしての才能を見せた結果、同誌は再版を重ねて出版界で一世を風靡するに至る。しかし1932年、『大晩報』で青年に勧める図書のアンケートに『莊子』、『文選』を挙げたことで魯迅の手厳しい批判を浴び、また杜衡と魯迅の「第三種人」の論争に巻き込まれたため、『現代』の「アメリカ文学専号」を出した後、編集人の仕事を辞職した。後に、著名な大学教授や学者の投稿を主とする上海のもう一つ大型雑誌『文学』に対抗し、康嗣群らと手を組んで『文芸風景』（1934）、『文飯小品』（1935）を創刊したが、様々な事情によって長続きはしなかった。

後に、「文芸大衆化」が叫ばれるなか、施蛰存は再び中国の古典的なスタイルを評価し、欧化文脈を排除する「純粹な中国式の白話文」（純中国式的白話文）を生み出そうと提唱し、自ら「獵虎記」、「黃心大師」などの講談・説話風の小説を発表し、好評を博した。最後の小説集『小珍集』（1936）では社会現実的な題材を用いたことで正統的なリアリズム創作に復帰したと見なされている。また、上海雑誌公司の要請に応じて阿英と共に「中国文学珍本叢書」の編集に取りかかり、小品文ブームに乗って『晚明二十家小品』（1935）を編集し、『活時代』（1946）、『大晩報』副刊「毎週文学」（1946）、「剪影」（1947）の編集人をも担当した。愛読書『宋史』に倣い、都市杭州の変遷を題材とする長篇歴史小説『銷金鍋』と、抗日戦争を描く長篇小説『浮漚』の執筆計画を立てたが、完成には至らなかった。「在酒店里」、「超自然主義者」、「二俑」<sup>1)</sup>は、施蛰存の最後の小説創作と見なされている。

施蛰存は小説のほか、雑文、エッセー、旧体詩、映画批評「梅影軒偶憶録」、「斬龍遇仙記」（『時報』に掲載）なども多数発表した。ドイツ、北欧、東欧諸国などの文学を翻訳し、80年代には『外国独幕劇選』、『中国近代文学大系・翻訳文学集』をも編集した。そのほか、古典文学、金石、墓碑研究などの領域において多数の業績をあげ、『唐詩百話』、『金石叢話』、『北山談芸録』などを出版し、『詞学』の編集にも携わっていた。

## 一、施蛰存文学の評価及び研究状況

### 1. 同時代評

1921年9月13日、「廉価的麪包」を発表してから、「春鐙」、「周夫人」を発表した1926年までに、施蛰存は約70篇余りの作品<sup>2)</sup>を残した。その大半は「施青萍」の筆名を用いて鴛派刊行物『申報・自由談』、『時報・余興』、『半月』などに掲載されたものである。これらの鴛派刊

行物は施蟄存に文学的才能を開花させる舞台を提供したとも言えよう。『礼拝六』に掲載された「老画師」（1922）は編集人王鈍根を感動させ、その賛辞を得た。1923年には杭州の蘭社を拠点として盛んに文学活動を行い、江南地方の文学社团・サークルの中で高い文名を得て、「描写に優れており」、「文学知識や古典的な素養の点では、人を凌ぐところがある」<sup>3</sup>と評価されている。『蘭友』に掲載された「紅禅記」は「表現は凄艶、筆致は古雅で、きわめて優れている」<sup>4</sup>と評された。

1922年発表のエッセー「青萍談吐」は、「小説創作についての観点には極めて説得力があり、小説を作る人にとって助けになる」<sup>5</sup>と評され、鴛派作家から多くの共感を寄せられていた。1923年、短篇小説集『江干集』は松江の開明派郷紳楊了公や鴛派の著名作家陳蝶仙、姚鵬雛らから題字や序文を寄せられ、有望な新人と見なされた。「新文学と旧文学のどちらについても理解と造詣がある」<sup>6</sup>と評された施蟄存の一冊目の小説集『江干集』は、多くの称賛を得ており、「畏廬の繊細かつ微妙な要訣を身につけた」と讃えられたこともある<sup>7</sup>。

さらに、文言文で書かれた筆記「紅禅室漫行」は『半月』に発表され、「優れた作品」<sup>8</sup>と評価され、『広州民国日報』にも同作の抜粋が転載されていた<sup>9</sup>。1924年1月、小説創作の作法をまとめた『小説学講義』（董巽観編、大新書局、未見）に、施蟄存が執筆した序文も収録されている。鴛派の作品集『社会鏡』（全三冊、大東書局、1924）、『家庭小説集』（全二冊、大東書局、1926）にもそれぞれ施作「寂寞的街」、「棄家記」が収録され、施蟄存は鴛派の大御所包天笑、陳蝶仙らと共に名を連ねており、同書も若き施蟄存文学が評価された証左と言えよう。

次に、施蟄存が本名で書いた作品への反響や批評を見てみよう。「新婦女之敵」は杭州の有名な婦人雑誌『婦女旬刊』<sup>10</sup>第90期（1922年11月26日）に掲載された。管見の限りでは、これは彼が初めて「施蟄存」と署名した記念すべき文章であると思われる。彼は新思潮の名目で卑劣な欲望を満たすため、自由恋愛の名目で売春をするなどの現象が新女性の中に潜んでいることを指摘した。当時、婦人の解放運動を提唱する風潮のなか、確かに「自由」、「解放」を皮相的に捉えて単に男性を弄ぶことや金銭目当ての物欲のみを追求するような「新女性」も見られた。『婦女旬刊』の編集者は施の観点に「言ってみれば、とても透徹している」と賛同し、「小説や文章の技巧は円熟に達した」<sup>11</sup>と施蟄存の文学的才能を賞賛している。

上海大学中国文学科に学んだ頃、俞平伯の指導に従い、『詩経』の批評文「蘋華室詩見——周南・卷耳」を『時事新報』副刊「学灯」（1923年12月10日）に新文学派作家と名を連ねて発表し、後に曹聚仁編『卷耳討論集』（梁溪出版社、1925）にも再録された。宗白華の詩集『流雲』について率直な意見を綴った書評「『流雲』之我見」を執筆し、宗白華が編集人を務める『時事新報』副刊「学灯」（1924年5月23日）に発表し、ハイネの詩作に啓発を受けた新体詩「明灯照地」、「古翁仲対話」を『現代評論』発表してもいる<sup>12</sup>。このように若き「施蟄存」は新文学派作家たちにも認められようになっていった。

更に施蟄存が『小説月報』に「娟子」（1928）を発表し、翌年に小説集『上元灯』を上梓したことによって、その文名は新文学派作家たちのなかにも浸透しつつあった。彼の新鮮で脱俗的な筆致は文壇の第一線で活躍している朱湘<sup>13</sup>、葉聖陶<sup>14</sup>、沈從文<sup>15</sup>らやA B<sup>16</sup>の好評を得ている。施蟄存が心理分析的手法を試みた作品「鳩摩羅什」（1929）は郁達夫、叔明、沈子成、沈善堅、蘇雪林、張平らが高く評価したが、人間の内的葛藤・性衝動を描いた「魔道」、「在巴黎大劇院」などは楼適夷によって「新感覚派」のレッテルを貼られ、「ブルジョアジー向けの頹廢的な文学」と見なされた<sup>17</sup>。また、王哲甫は『中国新文学運動史』（1933）で『上元灯』を評価し、その独特な作風を称賛する一方、施を「プチ・ブルジョアジー作家」と位置付けており、後の施蟄存評価に一定のバイアスを生じさせたと言えよう。

続けて1933年9月29日、『大晩報』副刊「火炬」の「読書季節」アンケートのコラムに、青年たちへの推薦図書として『莊子』と『文選』を挙げたことで魯迅に批判されてしまう。長く続いた激しい論争の中で施が魯迅より「洋場悪少」と罵られたことは、後の施蟄存及びその文学の評価に大きな影を落とした。施蟄存が1931年に発表した「孔雀胆」（後に「阿檻公主」と改題）と郭沫若が1942年に発表した「孔雀胆」（劇作）は同じ歴史題材を取っており、しかも多くの類似点が含まれているため、施蟄存は郭の盗作を疑っていた<sup>18</sup>。そのことによる感情的なもつれから、郭は40年代に施蟄存を冷笑するような発言を残した<sup>19</sup>。

1935年2月15日に、施蟄存は伝統的な講談・説話の手法と心理分析的な手法を融合し、「獵虎記」と、宋代の平話に近い文体を用いた「黃心大師」を発表したが、「古い道を新しい道と見なすという新しい道」<sup>20</sup>と指摘され、鴛派への復帰と非難された。一方、『新小説』の編集人である朱光潜や、鄭伯奇、王任叔、郁達夫らは施蟄存のこの新しい試みを称賛し、文芸の大衆化、文学の通俗化を実現した成功作と評価している。また、国立西南聯合大学師範学院で浦江清が発刊した『国文月刊』創刊号に、フロイト理論を用いた潜在意識的性愛論によって解釈した「学生文芸解説之一：魯迅的『明天』」を発表したところ、魯迅文学を曲解した奇文と決めつけられたほか、重慶の論壇で激しく批判された<sup>21</sup>。その一方で40年代、海派文学作家系の雑誌『紅緑』に掲載された評論「新文学者也是従旧文学堆里钻出来——施蟄存之文言小説」は、新文学派作家のなかで旧文学の素養が高い作家として施蟄存を取り上げ、「山中瑣記」を引用してその簡潔かつ高雅な文言文作品を称賛した<sup>22</sup>。

## 2. 人民共和国建国後及び文革後（新時期）の施蟄存文学の評価、研究状況

1949年建国後、施蟄存が急速に忘れられたのは、「現代中国の聖人」魯迅との「文選、莊子」をめぐる論争が第一の原因と考えられる。また、心理分析的な手法を用いたことが、毛沢東の「延安文芸講話」の方針に反するものと見なされたこともそれに拍車を掛けた。1957年の反右派闘争では「右派反動分子」、1967年の文化大革命では「ブルジョア學術權威」と批判され、人身攻撃も含めて過酷な非難に晒されることになる。この頃に出版された中国文学史関係の書物では、施蟄存の名前に言及されることはないのみならず、彼の心理分析的な小説はまったく無視されている。

しかしポスト文革期に入ると、中国文学史の見直しの気運が高まるなか、施蟄存文学の再評価が始まった<sup>23</sup>。それは海外の中国文学研究者が率先して施蟄存の文学に言及し、評価したことが火種となったと言えよう。こうして1978年、施蟄存は華東師範大学中文系で比較文学研究の公開講座を開き、比較文学研究に関して建設的な意見を述べて学術界での復活を果たしたのである。その後は中国比較文学研究を盛んに行いつつ、『中国比較文学』の副主編をも兼ね、「閑輿比較文学的一些意見」を発表した。

その頃、新聞、雑誌などのマスメディアに施蟄存の名前が頻繁に現れ、古今東西の文学を熟知している施蟄存がますます注目され、現代文学史を生身で体験した重要な作家の一人と見なされた。また、1980年に出版された『中国現代短篇小説選 1918—1949（二）』<sup>24</sup>は施蟄存の「上元灯」を収録した。これは建国後初めて施蟄存の作品が初めて小説集に収録された画期的な出来事である。1981年、上海の『文匯報』記者張自強が、「本報專訪」欄で初めて施蟄存を取上げ、古典文学の研究に全力を尽くしている施蟄存の姿を描いている<sup>25</sup>。後に、上海社会科学院の応国靖が施蟄存へのインタビューを行い、「関于『現代派』一席談」と題して『文匯報』（1983年10月18日）に発表した。その中で、施蟄存は創作活動初期の投稿歴や1930年代の文学状況、80年代の文学現状などを語っている。これらのインタビュー資料は重要視され、今日に至るま

で頻繁に引用されている。

先述の通り、海外の中国文学者たちは、中国大陆より一足先に施蛰存文学の再評価を始めていた。夏志清が『中国現代小説史』（英語原版は1961年に出版された。中国語繁体字訳は、1979年に香港友聯出版社、1991年台北伝記出版社から出版された）で施蛰存の小説を評価したことは、海外での施蛰存の再評価の火付け役になったと言えよう。80年代末、直接施蛰存にインタビューを行いながら研究を進めた国内外の研究者に楊迎平、李欧梵、史書美、そして後述の前田利昭らがいる。彼らは後に中国現代派・心理分析派研究の方向、位置付けを定める後押し役を果たした。

李欧梵は施蛰存の心理分析小説を高く評価し、1987年、台湾で率先して施蛰存文学に対する批評を行い、作品集を編集してもいる<sup>26</sup>。1988年、三聯書店（香港）と人民出版社の共同出版によって、作品集『施蛰存』が「中国現代作家選集」シリーズの一冊として上梓された。その後、海外及び台湾香港での施蛰存評価<sup>27</sup>が中国大陆に逆輸入されて、中国の文学研究の第一線に影響を与え、施蛰存の小説集の復刻版や雑誌『現代』の復刻版をはじめ、施蛰存の小説を中心とする「新感覚派小説」・「心理分析小説」などのアンソロジーも次々と出版された。このように、中国で80年代後半に引き起こされた流派研究、海派研究のブームは国外研究動向の「逆輸入」とは無関係ではないと言えよう。

次に80年代以降の中国現代文学研究における施蛰存文学の位置付けを見てみよう。最初に施蛰存文学の研究論文を書いたのは呉福輝であり、彼は1982年「中国心理小説向現実主義的帰依——兼評『春陽』」を著名な文芸誌『十月』（第6期）に発表し、施蛰存の「春陽」を「リアリズム小説への回帰」という切り口で高く評価している。その約半年後に、『華東師範大学学报』（第1期）に「論施蛰存的小説」を発表した応国靖は、この論文で施蛰存の小説を「習作期」、「成長期」、「探索期」、「円熟期」の四期に分け、それぞれの段階における作品の特徴を論じている。また彼は、「施蛰存伝略」、「施蛰存年表」、「施蛰存的小説検閲」を『文教資料簡報』<sup>28</sup>に発表した。これらの研究は施蛰存文学の研究の次の段階への展開に確固たる基礎を築いたと言えるだろう。

そのほか、王瑤が『中国新文学史稿（上冊）』（上海文芸出版社、1982）において、施蛰存を『現代』雑誌のメンバーや、戴望舒らの「現代詩派」と関連させて捉える「現代派」という流派研究の考え方を提唱した。後に、嚴家炎も流派研究の視点から施蛰存、劉呐鷗、穆時英らを新感覚派作家と括って新たな評価を与えた。人民出版社から出版された嚴家炎の「論三十年代的新感覚派小説」（1983）、『新感覚派小説選』（1985）、『中国現代小説流派史』（1989）は、系統的な新感覚派研究の著書である。これらの著書は、施蛰存の写実的な手法を用いた小説を高く評価している一方、心理分析小説を「頹廢的なブルジョアジー文学」とであるという否定的な見解を述べており、このことから、なおも当時の政治的イデオロギーに大きく左右されてもいた様子が見受けられる。そのほか、施建偉、趙凌河らが同じく流派研究の視点で施蛰存を中心とする研究を行った著作を出したほかに、この時期に見られた数多くの研究の中で、特に注目すべきものは、施蛰存自身も賛同した呉福輝の研究である<sup>29</sup>。

楊義が1988年に出版した『中国現代文学史』は、第十章『京派』作家群和上海現代派 / 第五節 施蛰存：現代心理小説的探索者と題した一節を設け、中国現代小説史における施蛰存の重要な地位を認めた<sup>30</sup>。同書は同時期に出版された文学史関係の書物の中で、施蛰存について細かく論じている点でも傑出している。また、楊のほかに『現代』雑誌研究、歴史小説、外国文学の受容、女性像の変遷などを切り口とした研究も挙げられる。施蛰存の短篇小説「薄暮的舞女」に啓発された香港の上海人映画監督王家衛が「手」<sup>31</sup>を製作したこともあるが、それに関す

る研究はまだ見られない。

2007年に楊迎平が上梓した史上初の施蛰存研究の専著『永遠的现代——施蛰存論』<sup>32</sup>では、施蛰存と伝統及び現代文学の関係、出版事業への関わり、翻訳文学などが論じられ、ジャーナリストとしての施蛰存が文壇で占めた地位は再現されているものの、彼の初期文学活動は完全に除外されている。また、施蛰存文学の研究で博士号をとった研究者には、華東師範大学の李金鳳(1999)、復旦大学の張芙鳴(2000)、華東師範大学の劉軍(2009)及び王宇平(2010)らが挙げられる。

### 3. 日本における施蛰存文学研究

「在福建遊山玩水」などの散文は(株)公文教育研究会が出版した中国語学習者用の教科書に収録されており、施蛰存が晩年に編集した『詞学』に関する研究書『詞学名詞釈義』は宋词研究会により編訳されている(汲古書院、2010)。現在まで、魯迅、張愛玲などの民国時期作家の作品が多数翻訳され単行本として刊行されているなか、施蛰存の作品集は一冊も翻訳出版されておらず、僅かに短篇小説「蓴羹」<sup>33</sup>、「ミス・ド・リュックス」(原題「呂特姑娘」)<sup>34</sup>、「梅雨之夕」<sup>35</sup>三篇の邦訳があるに過ぎない。

日本の中国現代文学研究において施蛰存は当初「第三種人」論争論の中で初めて言及されてきた。魯迅研究者丸山昇が、第三種人論や施蛰存と魯迅との間の論争に関して、「魯迅の『第三種人』観：『第三種人』論争再評価をめぐって」(『東洋文化研究紀要』97冊、1985年3月)、「施蛰存と魯迅の『論争』をめぐって——晩年の魯迅についてのノート(1)」(『桜美林大学中国文学論叢』20、1995)などの論文を発表したほか、谷行博の「『第三種人』論争の問題点——穆時英を中心に」(『野草』第29号、魯迅特集〈8〉1982年5月1日)、前田利昭の「『第三種人』論争に関する谷氏の論述に触発されて」(『野草』第32号、1930年代文学特集、1983年12月1日)などの論文がある。このような日本の第三種人の研究をめぐって、施蛰存が『文学研究動態』(北京文学研究所)第4期に転載された谷行博の論文の部分訳に高い関心を示し、その議論の深さを讃えたこともある<sup>36</sup>。

前田利昭は1980年代後半に、施蛰存を訪問し、第三種人論をめぐって数回のインタビューを行い、「施蛰存訪問記」と題し、『日中友好新聞』(日本中国友好協会発行)に連載した<sup>37</sup>。これは日本のメディアで初の施蛰存その人を中心としたまとまった紹介である。こうして1980年代後半には施蛰存文学の本格的な研究が展開していく。青野繁治は1984年頃に施蛰存の歴史小説の研究を開始し、文献史料の丁寧な読み込みを踏まえうえて、現地調査なども交えて、数多くの歴史小説の研究論文を発表した<sup>38</sup>。1998年には施蛰存の『沙上の脚跡』を翻訳し、『砂の上の足跡—或る中国モダニズム作家の回想』と題して「大阪外国語大学学術研究双書22」として出版した。青野宛ての施蛰存の書簡によると、彼はその訳著を楽しんでいたようである。

斎藤敏康も静岡大学に勤務した1986年頃より、施蛰存文学関係の論文を多数執筆している。1991年8月、前田利昭と共に施蛰存にインタビューしたことがあり、「施蛰存文学研究の課題——中国における研究の現状に即して」<sup>39</sup>では、中国における施蛰存研究の現状について、研究の偏りと文学史的評価の混迷という問題を提起した。ここで特に注目すべきなのは、斎藤が施蛰存文学の「リアリズム→モダニズム→リアリズム」の回帰説について異議を述べたことである。「もともと施蛰存らはリアリズムの枠内で論じうる作家ではなく、＜非現実主義＞の創造的達成によって文学史に位置を占めるべき存在であったはずである」と指摘し、施蛰存の「回帰」への語りに対する独自の解釈を提示した。また別稿「雑誌『半月』における施蛰存」<sup>40</sup>においても鴛派刊行物に掲載された施蛰存の初期作品を重要視して詳しく紹介・分析し、施蛰存文学の一貫したモチーフ、あるいは施蛰存文学の祖型などに言及した点で画期的である。



以上は日本における施蛰存文学研究の第一世代の状況であり、主に 1940、50 年代生まれの中国文学研究者が担っている。丹念なテキスト分析、中国文学発展史に則した全体的な解釈などが日本での施蛰存研究の特徴と言えよう。第二世代は西野有紀子（「梅雨之夕」の訳者）、張静萱、中山文、大東和重、李征らであり、都市文学やメディア研究、女性文学などの一つのとば口として施蛰存文学を論じた。

近年の新進研究者による研究状況も紹介しておこう。金晶は比較文学の視点で施蛰存と谷崎潤一郎のテキスト分析を行っている。高峽の「上海で人力車夫であること―施蛰存「四喜子底生意」について」（2011 年 10 月、日本現代中国学会第 61 回大会での研究発表）、福嶋亮大の「歴史小説における不可能性―1930 年前後における魯迅と施蛰存の作品を中心に」（2011 年 3 月、日本中国学会若手シンポジウムでの研究発表）など、施蛰存を切り口とした研究もある。

筆者自身は、一橋大学大学院修士課程に在籍中の 2006 年に、施蛰存文学に関心を抱き、「梅雨之夕」を再読したところ、十年前に上海の専門学校に在学中に、「梅雨之夕」を読んだ印象が鮮明に浮かび上がり、再び感動を覚えたという体験を持っている。やがて施蛰存文学研究を決意し、まず施蛰存文学の先行研究を収集し始めた。施蛰存の 20 年代初頭の文学活動に関しては体系的な研究は少なく、多くの研究者が彼の「施青萍」時代を省略し、小説集『上元灯』（1929）を彼の最初期の創作と見なしていることを知った。しかも、それらの先行研究は、彼の心理分析小説を論じるときにも『上元灯』に収録される「周夫人」を「心理分析手法の濫觴」<sup>41</sup>と位置付けている。また、応国靖、黄徳志、斎藤敏康らの先行研究においても、施蛰存の初期小説創作に関しては未解明の部分が少なくないことに気づき、施が最初期に一体どのように文学活動を行っていたかという素朴な疑問を抱いたのである。

2007 年 3 月、施蛰存の散文集、翻訳作品集などの編集に携わっていた華東師範大学中文系教授の陳子善を訪ねたところ、施蛰存初期文学研究の欠如を改めて指摘され、その初期文学研究の意義などをご教示頂いた。後に、陳教授から『江干集』の復刻版をご恵与頂き、上海図書館での施蛰存の初期作品の発掘作業を開始した。2007 年 9 月、上海図書館歴史史料室の張偉氏の協力を得て、『蘭友』の原本を閲覧する許可を得、また張氏著の蘭社に関する文章「著名作家、出版家報刊題跋録」（『出版史料』第 3/4 期、1989）を手掛かりに、幸いにも『最小』に掲載された施蛰存の「新旧我無成見」などの一連の作品を発見するに至った。続けて上海図書館近代文献室に所蔵される 1920 年代初期の鴛派刊行物から、施蛰存の作品や、作家評、卡党などの重要な資料を発見した。ちょうど民国貴重期刊誌のマイクロフィルム製作（デジタル化）の開始直前に当る時期で、筆者は幸運にして『半月』、『紫羅蘭』などの原本を閲覧することができたのである。現在はほぼすべてマイクロフィルム化／デジタル化されたので、オリジナルのカラー版を閲覧することは不可能となっている。さらに、安徽大学教授の戴望舒研究者王文彬を訪ね、『瓔珞』の復刻版を入手した。2010 年 3 月、上海図書館近代文献閲覧室民国貴重期刊新聞室の職員甘振虎氏のご協力を得て、伝存していないと見なされていた鴛派社団青社の同人誌『長青』をはじめ、従来あまり言及されていない『筆鐸』、『紅霞』、杭州緑社同人誌『緑玉』、『緑痕』などの旬刊誌も閲覧した。数年間にわたり蒐集してきたこれらの一次資料をもとに、初期施蛰存像を探る糸口が見えてきたのである。

また、施蛰存の筆名に関する考証をはじめ、これまでの施蛰存初期作品のデータ上の誤謬を正すなど、施蛰存初期文学の基本的資料の精度を高めたと言えよう。2011 年に出版された『施蛰存全集』は、筆者がこれまで収集してきた施の初期作品の一部である全 37 篇の作品を収録している。無論、資料は膨大であり、いかに丁寧にも閲覧したとしても粗漏は免れないだろうが、今後もし引き続き体系的調査を心掛け、補訂して行きたい。以下は、筆者が発表した施蛰存初期文学に

関する論文リストである。

- ①「施蟄存の第一小説集『江干集』について」、『中国文芸研究会報』第334期、2009年7月
- ②「新発見資料から再評価する施蟄存初期文学」、『東京大学中国語中国文学研究室紀要』、第12期、2009年10月
- ③「施蟄存早期作品鈎沈」、『新文学史料』第4期に掲載、132～135頁、2009年12月
- ④「施青萍時期的施蟄存——以『最小報』為中心」、『現代中文学刊』第3期「施蟄存專輯」に掲載、117～119頁、2009年12月
- ⑤「文壇デビュー期の施蟄存——『新旧我無成見』を中心に」、『野草』第85期、34～64頁、2010年2月
- ⑥「『広州民国日報』に新発見する施蟄存の作品について」、『中国文芸研究会会報』第351号、2011年1月
- ⑦「施蟄存の初期恋愛小説について」、『東方学』第122号、83～99頁、2011年7月
- ⑧「施蟄存早期文学活動初探」、『中国現代文学研究叢刊』第7期、90～102頁、2011年7月
- ⑨「青社與『長青』」、『新文学史料』第4期、163～167頁、2011年12月
- ⑩「施蟄存の社団活動について——蘭社から水沫社まで」、『日本中国学会第一回若手シンポジウム論文集』、233～247頁、2012年2月
- ⑪「日本・中国におけるハムスン受容——施蟄存の受容を中心に」、『現代中国』第86号、107～120頁、2012年9月

## 二、本稿の問題意識及び研究方法

### 1、問題意識

筆者の施蟄存研究開始以前には、施蟄存が1926年までに発表した70篇余りの作品や、『蘭友』及び蘭社の社団活動などはほとんど研究されてこなかった。先行研究において『江干集』（1923）は「リアリズム小説」と総括されてしまい、「恢復名誉之夢」（1922）などの鴛派刊行物に発表した作品に対しても概説的な紹介に止まることが多かった<sup>42</sup>。そのためであろうか、施蟄存と長年の付き合いがある沈建中は、その著書で「施蟄存研究に携わっている研究者、批評家が、『江干集』を忘れないように望んでいる」<sup>43</sup>と記している。

従来は施蟄存が施青萍の筆名を用いて鴛派刊行物に投稿した作品は、往々にして詳細な検討を省略した政治的批判の対象となっていたために、資料に基づいた厳密な意味での施蟄存初期文学研究は成り立ちにくかったのである。これに加えて施自身が1928年から37年までに行った創作活動に関し、5種の小説集を以て「創作十年」と総括し、28年以前の作品はあくまでも習作・模倣作であると主張していたこと<sup>44</sup>、文学史的な記述の中で施は新文学派作家として位置づけられ、後期の文学活動への評価が初期の「施青萍」時期への評価をはるかに上回っていたために、初期作品は目録さえ整理されていなかった。

しかし、「創作十年」期に先行する時期に、施蟄存は「廉価的麴包」（1921）ですでに人間の内面に注目し、主人公の乞食の白昼夢をめぐる複雑な心理的葛藤の描写を試みていた。実は施は20年代初頭にすでに精力的に多様な創作を試みており、筆者はこの時期こそが施蟄存文学活動の最初のピークであったと考えるのである。1921年から28年までの約8年間の創作活動は施蟄存文学の源流として重要であり、その詳細な検討なくしていわゆる「創作十年」期の研究がより大きく発展することは望めないのではあるまいか。また、若き施は最初期の段階で人間の心理や性格を掘り下げることに興味を覚え、独自の文学観を模索しており、これがその後の文学活動の基礎となったと考えられる。「創作十年」期の施蟄存文学の萌芽的作風は初期創作のなかに現れ

ており、この時期の文学活動を抜きにしては施蛰存文学の全貌を捉え難いと思われる。

本稿は、施蛰存の文壇デビュー期の初期創作活動に注目し、当時の文学的・社会的バックグラウンドにも留意しつつ、彼の小説創作、同人社団の活動、外国文学の翻訳などに焦点を当て、施蛰存初期文学の全貌を明らかにする。また、新文学、外国文学の影響を受け、創作活動をしていくなかで、旧文学の素養からどのような葛藤や矛盾を生じていたか、また旧文学のどのような要素が後期の作品群に生かされているかを解明する。施蛰存を手掛かりとして近代中国の新・旧混交による単純な新・旧裁断の虚構性を指摘し、施の後期における目ざましい文学活動を可能にした要因を「新旧ともに異議なし」というその独自の文学観に求めたい。

このように施蛰存の初期作品群を整理し、具体的にテキスト分析を行うことで、彼の文学全体の流れにおける一貫した特質を探究したい。また施蛰存初期文学活動の研究を通じて、20年代初頭の鴛・新文学両派文学運動の実態を解明し、中国伝統文学と近代西洋文学との調和、融合過程を検証したい。

具体的には、以下の四章にわたって論を進める。第一章では、施蛰存の鴛派文壇デビューの経緯を検討することにより、鴛派を再評価し、鴛派と新文学派の間に明確な境界線を引くことの危うさを指摘する。

第二章では初期施蛰存の鴛派刊行物投稿作品や、『江干集』収録の恋愛・婚姻題材の小説を取り上げて分析し、家出の「感傷者」物語の系譜を検討し、1923年頃の第一のピークを経て施蛰存の作風に大きな変化の前兆が現れ始めることを指摘し、施蛰存の初期文学においては旧文学と新文学の要素が調和、融合していることを明らかにする。

第三章では施蛰存の社団活動を中心に検討する。最初の維娜絲文学会から、蘭社、青鳳社、瓔珞社、水沫社までの社団活動のプロセスを辿り、特に施蛰存が新旧両派の対立に拘らず広い人脈を持っていたことを指摘し、社会史的視点から施蛰存らの社団活動を再評価する。

第四章では、施蛰存文学においては創作と翻訳とが並行関係にあることを論じ、民国文壇におけるハムスン文学の紹介・翻訳状況を踏まえ、施蛰存がハムスン翻訳からどのような示唆を得たかを検討する。また施蛰存の「周夫人」、「春陽」をハムスンやシュニツラーが未亡人の「生の叫び」をえぐりだしている小説と比較し、施が心理分析的な手法を用いて未亡人の内面的な葛藤を描くことで世界文学との共時的な側面を考察する。

第五章では、初期施蛰存作品に見られる人間の内面心理への注目は施蛰存文学全体に通底しており、彼は翻訳文学を通じての外国文学への共鳴によって自らの文学を豊かにしたことを明らかにする。また広汎な伝統文学と外国文学を吸収することによって施蛰存独特の文学が生まれたという蘇雪林、呉福輝らの観点に賛同しつつ、初期施蛰存文学における鴛派との共通性や、外国文学の手法の意識な取り入れなどを整理したい。

## 第一章 施蛰存の鴛鴦蝴蝶派刊行物における文壇デビューをめぐる

施蛰存は1905年12月3日に、杭州水亭子に生まれた。字は徳普、名は蛰存。父の施亦政<sup>45</sup>は清末の秀才であり、母の喻調梅は蘇州の人である。4歳のとき、施一家は蘇州に転居したが、1911年、父施亦政の仕事の関係で再び松江に転居した。父は松江の「履和袜廠」<sup>46</sup>の雇われ工場長を務めることで、施蛰存には整った教育を受けさせる豊かな家庭環境を確保できた<sup>47</sup>。施亦政は古典文学の素養が高く、唯一の息子施蛰存に高い期待を寄せ、深い愛情を注いで彼を育てた。施蛰存の読書趣味、古典文学の素養、そして後に形成された人格と晩年における古典文学研究への没頭は、父の深い影響によるものと言えよう。松江の楊了公、上海の陳蝶仙らが施家と親交があった

ため、子供の頃の施はこれらの作家たちに親しみ、次第に文学への関心を高めた。一人息子の施蟄存は幼少時代に母、妹、女中という女性ばかりに囲まれた環境で育ち、夕暮れに巢に戻る鳥を眺めながら、「孤独を感じ、人生の無常」<sup>48</sup>という感慨にふけることがあった。本章では、施蟄存の幼少期から青年期にかけての生活環境と教育環境を考察し、また民国時期の鴛派文学の結社や、新文学派との論争などを視野に入れ、施蟄存の文壇デビューの経緯を考察する。

### 第一節 施蟄存の生い立ち及び作家志向の形成

1910年陰暦1月16日に、5歳の施蟄存は私塾に通い、『千字文』、『三字経』などを勉強し始めた。施蟄存が小学校に上がると、父親の指導の下『古文觀止』、『昭明文選』、『詩経』、『論語』、『楚辞』、『史記』などを勉強した<sup>49</sup>。特に、詞への興味が強く、『白香詞譜』、『草堂詩餘』などを読み、詞を試作してもいる。国語教師の影響を受け、『散原精舍詩』、『海楼詩』を手始めに、『豫章詩』、『東坡集』、『劍南集』を読んで詩に関心を持ち、七言詩を作ったが、「江西にそっくり」と褒められた<sup>50</sup>。『李義山』、『温飛卿集』、『杜甫集』、『李長吉集』を愛読し、特に、李長吉(李賀)の奇抜な詩句に心を惹かれた<sup>51</sup>。後に李長吉の詩風を模倣した「安楽宮舞場詩」を試作し、艶麗な言葉を用いて宮女の魅力や情感を巧みに表現した。

さらに『蕉帕記』、『北詞広正譜』などの戯曲関係の書籍も読み、戯曲への関心も持つようになった。小学校の同級生から曹操、劉備、武松の兄嫁殺しなどの話を聞いて初めて小説というものがあることを知り、自ら貯めた小遣いで金聖嘆批評70回本の『水滸伝』を購入した<sup>52</sup>。その後、父親の12箱の蔵書のなかにあった小説や『三俠五義』などを読みあさり、古典小説への関心が次第に高まった。少年蟄存は読書に夢中になり、両親が寝た後もこっそり蒲団の中で勉強した。旧正月の朝にも、大きな声で古文を朗読していたところ、隣人の松江県立第一高等小学校の校長錢薈簷に聞かれ、小学校の式典で生徒を励ます好例として紹介されたという逸話もある<sup>53</sup>。施蟄存は後に書齋を「無相庵」と命名し、さらに勤勉な勉強によって確かな古典文学の素養を身に付けていく。

施蟄存は1915年に松江県立第三初等小学校を卒業し、同年8月に松江県立第一高等小学校<sup>54</sup>に進学した。国語教科書の「父母在り、遠くへ遊ばず」、「夜明けとともに起き、庭を掃く」<sup>55</sup>といった身を修め人格を磨くための言葉が彼を啓発した。また、「晩春の三月、江南には草が生え、木の花が咲き始め、鶯が飛び交う」<sup>56</sup>などの句に大変興味を覚え、「綺麗な言葉と美しい表現は必ず隣り合わせてある」という杜甫の句を読んで、彼は文章を書くときは美しい表現を揃えるべきであると確信するに至った<sup>57</sup>。

施蟄存は1918年7月に江蘇省立第三中学に進学した。国語教師の徐信が唐代伝奇『南柯太守伝』、『紅線伝』などをサブテキストとして用いたのを契機に、施蟄存は伝奇小説に関心を持ち始め、『龍威秘書』などを通読した<sup>58</sup>。やはり国語教師の秦卓夫が唐詩宋詞の講読を担当した。当時、施蟄存と同級生たちは勉強の意欲が強く、蔣韻笙<sup>59</sup>は施蟄存らに週二時間の古典文学の補講として、『文選』や李白杜甫の詩や唐宋詞などを教えたこともある。これらの国語教員の影響によって、施蟄存の文学に対する関心はますます高まった。

1919年に教育部は国語統一準備会を設立して国語統一の動きを本格化させ、さらに1920年には、全国の国民学校に対し、一、二年生の国文の一部を語体文(白話文)に改め、教科名を国文から国語に改めるように命じた。しかし、学校教育現場においては国語教育はまだ普及・定着しておらず、施蟄存が通っていた江蘇地方の省立三中は相変わらず詩、唐伝奇、戯曲などをテキストとしての国文教育を実施していた<sup>60</sup>。

当時、三中では『納氏英文法講義』(*Nesfield's English Grammar Series*、全4巻、イ

ギリス人ノースフィールド著、陳善訳注、求益書局発行）を英語教科書として使っており、施蛰存はこれによって英語の文法構造を会得し、英語の基礎をしっかりと築いた。1920年、三年に進級すると、数学、物理、化学、西洋史などの科目はすべて英語のテキストを使用した。英語の授業では *Tales from Shakespeare*、ナサニエル・ホーソーン の *Tanglewood Tales*、ワシントン・アーヴィングの『スケッチ・ブック』など学期毎にそのまま一冊の外国文学作品を丸々テキストとして使っており、彼の西洋文学への視野を広げた。四年生になると、上海セント・ジョーンズ大学（St. John's University）を卒業した英語専任教員汪小頌がスコットの『アイバンホー』の講義をし、施蛰存は本格的な英語文学読解の訓練を積むことができた。

林琴南の翻訳小説の中で施蛰存がもっとも愛読したのはワシントン・アーヴィング『大食故宮餘載』（『アルハンブラ物語』 *Tales of the Alhambra*）である<sup>61</sup>。同級生の浦江清と江淹の「恨」、「別」に倣って賦を試作した際には、若き施蛰存は「嫠婦の夜泣き」、「孟姜女慟哭、万里の長城も崩れ」などの典故を用いて感傷的な雰囲気醸し出していた<sup>62</sup>。古典文学の好みから、淡い感傷を帯びた試作まで、彼のナイーブな傾向が露わになっていたと言えよう。

施蛰存が通った江蘇省立第三中学は悠久の歴史を持った松江の有名校である。その前身は1753年に設立された雲間書院であり、1904年に松江府中学堂と改名し、後に1912年9月に松江中学校と改名し、省立学校となった。11月に江蘇省立第三中学と改名した。侯紹裘<sup>63</sup>が在学中に『江蘇省立第三中学校校友雑誌』を創刊し、「旅行上海記」、「旅行佘山記」を発表した。1919年の五四運動に際しては、同校学生は率先して日本製品「不買運動」の宣伝活動に身を投じ、校内で学生工芸社を立ち上げ、ブルーブラックのインクを製造、日刊誌『恥海』、『民鐸』などを創刊したことがある。『民国日報』、『申報』の「松江学校消息合誌」コラムには、江蘇省立第三中学関係の報道が頻繁に掲載されており<sup>64</sup>、その記事の一つ「蘇三中小風潮旋息」では、学生が英語教師の誤訳を指弾して教師を教室から追い出したことも報道されている<sup>65</sup>。このような積極的な雰囲気溢れた環境の中で、施蛰存も発言する勇気を与えられた。

やがて施蛰存が中学校を卒業した1922年には、文言文を中心とする「国文」教科書が全廃され、「新学制」の実施に伴い、語体文（白話）作品も収録した新「国語」教科書などが刊行されている。そして雑誌・書籍では五四新文学派作家の作品が増え、より多くの読者を獲得しつつあった。同年夏、郭沫若の『女神』が出版されると、施蛰存は入院中にもかかわらず直ちにその詩集を購入し、これが彼が新体詩の形式について考える契機になった<sup>66</sup>。

ポスト科挙世代の施蛰存は、文学において上の世代の人たちよりも多様な選択が可能となった。雅／俗の価値関係の逆転に成功した五四新文学革命<sup>67</sup>の中で、施らのポスト科挙世代の多くは、幼少期に私塾に通った経験があるために中国古典文学の素養もあり、鴛派作家たちの文学的品位もよく理解できる素地があった。また、施蛰存らは新文化運動の風潮のなか、『新青年』、『新潮』などを読んで反帝国主義、反封建主義などの言葉に親しみ、これらの新時代の波にも乗る余裕があった。そのような複合的な文学的素養を持つ施蛰存と同世代<sup>68</sup>の人たちには、作家志向を抱き、中学校の低学年から小説の試作を始めた例が少なくない。このような伝統的文学素養により、施蛰存の世代は穆時英（Mu Shiying, ムー・シーイン, ぼくじえい, 1912～1940）ら一つ下の世代の作家たちとは異なっており、また一つ上の世代の作家たちよりも積極的に新興文学を吸収している。

中学生の頃、施蛰存は将来作家になると決意し<sup>69</sup>、様々な筆名を用いて『小説月報』、『民国日報』副刊「覚悟」などに投稿し始めた。彼は小説を執筆する前に、「施俊」、「施瘦花」、「施太邱」、「夢秋」、「寄萍」、「青萍」、「蝸居」などの筆名、書齋名、室名を考案し

でもいる<sup>70</sup>。後に用いることとなった筆名「青萍」は「長行于薛下之門」<sup>71</sup>に由来するという。書齋名「葱蘆」も名剣の呼称である。また、施蟄存のエッセー「我的名字和別署」によれば、「いくつかの英語の人名を知ったが、施高德を選んだのは中国名に音が近かったからである。しかしあまりに道学臭いと思い、施太邱と改めた」<sup>72</sup>とのことである。この「施高德」は施が愛読作家の一人、イギリスの小説家ウォルター・スコット（1771～1832）にちなむものであろう。さらに、「托爾施泰室」、「荷馬寶」、「狄更司寶」などの外国作家名を用いた室名も考案している。古典的な余韻に富んだ「紅禪室」、「梅影軒」<sup>73</sup>などの室名も用いた。次節では施蟄存が作品を発表する経緯を見てみよう。

## 第二節 鴛鴦蝴蝶派試論

施蟄存が少年期を送った1910年代は近代メディアの形成期であり、江南の出版事業が空前の繁栄を迎えていた<sup>74</sup>。都市の小市民階級が徐々に出現し、娯楽のため読み物への需要が増え、読書市場が次第に形成されてきた。大型新聞『申報』は恋愛、武俠、探偵などの長篇小説の連載を始め、多くの読者から好評を得ていた。更に外国文学の翻訳や、西洋文学的観念を取り入れた短篇小説、多彩な画報などの読み物で読者の閲読のニーズに応じ<sup>75</sup>、職業作家が生まれていた。統計資料によると、1909年から1919年の間に、上海刊行の鴛派の刊行物は160種を超えた。1911年から30年代初期までに鴛派<sup>76</sup>と称される作家が編集した雑誌は130種余り、新聞の副刊は50種余りある<sup>77</sup>。鴛派は一見伝統的な文人のイメージが強いが、実際は彼らの多くは外国の新興文化に関心を持ち、教養高く、審美眼があり、決して保守頑迷な文人ではない。『礼拝六』はアメリカのBenjamin Franklinが編集した『礼拝六晩郵報』（*Saturday Evening Post*）を参考にし、『最小』はイギリスの*Tatler*からヒントを得たのである<sup>78</sup>。このように鴛派作家のなかには、外国文学の素養を持ち、外国文学通の者もいるので、時代遅れの保守派と見なすのは大きな間違いであろう。

鴛派の主な刊行物は『礼拝六』、『星期』、『半月』、『小説世界』らの雑誌や、上海の三大新聞『申報』、『時報』、『新聞報』各紙の副刊「自由談」、「余興」、「快活林」などもある。鴛派雑誌、作品集の出版を担ったのは中華図書館、世界書局、大東書局の三大書局である。当時の上海の読書市場が鴛派文人たちに動かされていたことは想像に難くない。

1915年、『新青年』などの刊行物が発行され、1918年の魯迅「狂人日記」の同誌掲載を皮切りに、新文学派が登場し、その主力は次第に読者層の拡大に力を入れ、趣味性・娯楽性を重んじる鴛派文学を時代遅れと罵倒するようになった。西洋文学理論を手本とし、西洋文学の紹介・翻訳を軸に「人生の為の文学」あるいは「芸術のための芸術」を提唱して新しい文学の形成を目差していた新文学派作家は、次第に知識人、教員、学生など新興知識階級の支持を得ていく。『小説月報』は1921年に鴛派系文学から新文学へと編集方針を転換して新興知識階級の支持を得た。新文学派作家は市民層読者がなおも鴛派文学を好んで読んでいた状況において、より多くの読者を獲得し、文壇での権威的地位を確固ものにするために、あらゆる非新文学派の文学を十把一絡げとして「鴛鴦蝴蝶派」という蔑称を与えたのである<sup>79</sup>。しかしながら、新文学派は急進的かつ極端な文学観を打ち出したものの、鴛派に対して相変わらず劣勢にあった<sup>80</sup>。以下、鴛派の結社活動と新文学派とが未分化であった実情などを検討したい。

### 一、鴛鴦蝴蝶派社団・文芸サロンの社会史的意義

1920年頃までは鴛派作家たちは主に蘇州を中心に活動していたが、上海の出版メディアの成熟とともに、彼らも次第に活動の拠点を上海に移した。多くの鴛派作家は文筆を通じて知り合



い、食事会を開き、交友関係を築いていった。例えば『快活林』の常連執筆者嚴独鶴、趙苕狂らは上海の有名料理屋で「快活集餐会」を定期的に行い、互いに交流を深めた。最もよく知られている鴛派の社团は、1922年七夕に蘇州で結成された星社と、ほぼ同時期に上海で結成された青社である。彼らは民国初期の南社の「雅集」<sup>81</sup>に倣い、文芸を討論するほか、食事会や、遊園、クイズショー、唱酬、映画鑑賞などを通じて交流を深めていった。

主な青社メンバーは以下の通りである。

王西神、王鈍根、包天笑、江紅蕉、周瘦鵑、範煙橋、徐卓呆、畢倚虹、程小青、張枕緑、趙苕狂、何海鳴、嚴芙孫。

また主な星社メンバーは以下の通りである。

王西神、包天笑、江紅蕉、沈家驥、周瘦鵑、範菊高、範煙橋、徐卓呆、徐碧波、姚民哀、姚賡慶、袁寒雲、黃軫陶、程小青、張枕緑、張舍我、趙眠雲、鄭逸梅。

青社、星社の「雅集」に関する情報は、鴛派刊行物に頻繁に掲載されていた。例えば、『最小』第3号（1922年12月5日）に発表された孟剛「青社歛宴記」は、その様子を次のように記している。「12月3日午後7時、青社が東亜酒樓の西洋料理部に座席を予約。（中略）開会中に同社の規模拡充をめぐる議論があった。嚴肅な話題と冗談が入り混じり、卓呆が口を開くたびに皆がドッと笑った。瘦鵑が彼に『名前菜』の名を贈った。8時過ぎに、宴会がお開きとなった。料金は14元あまり」<sup>82</sup>。1922年9月16日、『申報』副刊「自由談」には、范煙橋がメンバーたちの留園で詩を吟味し、クイズショーを行い、茶を賞味し雑談し風景を満喫したという記事「留園星聚記（上）、（下）」が掲載されている。その末尾は「ここには園林の美しさが多く残され、あちらには美人の影が残っていた。これはほかのと違うところである。遊園の日について述べると、それは牽牛、織女の二星が川を渡る前日であった。そのゆえ星聚と称し、牽牛織女のお祝いを兼ねたのである」<sup>83</sup>と結ばれ、風流文人の雅致の一側面を伝えており、その料金は青社歛宴と同等、あるいは更に高価であっただろう。黄軫陶も『世界小報』<sup>84</sup>第162号（1923年7月28日）掲載の「第三次星社雅集記」で、皆で銘菓「馬玉山」を味わいその絶妙な味を称賛したと記している。このような「雅集」に関する記事が頻繁に掲載されたため、その情趣あふれる活発な雰囲気憧れて参加する者の数も増え、雅集はより大きな影響力を獲得していったものと考えられる。青社、星社には特に規則はなく、経歴、年齢、職業の差を超えて自由な交流を行う社交クラブ、文芸サロンのような場であったとも考えられよう。



（『世界小報』に掲載）

次に、青社の同人週刊誌『長青』<sup>81</sup>を見てみよう。『長青』は青社のメンバーたちが食事会の

最中に発行計画を相談し、22年9月3日に創刊したものである。発刊所は、メンバー包天笑の上海の住所、愛爾近路慶祥里一百五十九號半である。『長青』創刊号は盧父の「告青社社員」を掲げて、「『長青』は我らメンバー全員の心血の花である」<sup>86</sup>と称し、読者の要望に応じ「難解な欧化文法を使用しない」こと、新文学派の糾弾に対し「屁理屈の非難をしない」ことを表明しており、青社同人は鴛派週刊誌『礼拝六』の趣旨に賛同しながら、『長青』を読者の良きパートナーたらしめんことを目指していた様子である。

『長青』に掲載された煙橋「小説的効率」、寄塵「給鄭振鐸的信」、碧梧「評海上現有之小説雜誌」などには鴛派の文学観が端的に現れており、新文学派の批判に対し寛容な姿勢を示しながら、共に中国文学の発展に尽くしたいという願望を述べている。20年代の同人文芸誌のあり方、娯楽性・趣味性と文学批評を融合しているスタイルなどは、『長青』を通じてよく理解できるだろう。1922年11月には、『長青』の後継誌『良晨』、『最小』が刊行されており、特に『最小』は1925年まで発行されて、鴛派作家及び彼らと提携した若手作者たち、楼建南（楼適夷）、鄭君平（鄭伯奇）ら後に新文学派作家に転進した作家の創作、文芸批評などをも多数掲載した。

1920年代前半には、文学社团、小型の文学刊行物が「ナイル川の氾濫」<sup>87</sup>のように登場している。霞光社と名乗る社团の刊行する『霞光』と名付けられた旬刊誌は少なくとも4種以上が数えられ、それぞれ蘇州、杭州、常州、上海などで発行されている。筆者の調査によると、1923年前後に上海、蘇州、杭州で結成された文芸社团の数は少なくとも百社以上にのぼる。これらの社团、同人誌に関しては先行研究が少なく、鴛派と混同されて来た。従来の社团研究では、原則的に鴛派のレッテルを貼るだけで青社らを正式な文学社团とは見なさず、それぞれの個性・差異に注目することもなく、鴛派雅集の階級性についてもほとんど言及していない<sup>88</sup>。この雅集に参加する多くの鴛派メンバーは実業家、地方郷紳、ジャーナリストなど上層中産階級であり、新文学派作家たちは往々にして彼らのブルジョアの階級性に対し、批判的であったと考えられる<sup>89</sup>。

## 二、未分化だった鴛鴦蝴蝶派と新文学派の境界線

1922年8月、『小説月報』（第13巻第8期）巻末「通信」欄掲載の王桂榮による投書は、以下のように記している。

私は今回通（南通）、寧（南京）、錫（無錫）、蘇（蘇州）などの地方に教育実況を考察しに行き、各地で『礼拝六』、『快活』、『半月』などの悪魔が一般の若者たち特に学校の学生たちを迷わせていた。この悪魔の勢力は実に強力なのである<sup>90</sup>。

この投書からは新文学派の作品が実際には若者たちの中に浸透せず、若者たちは『礼拝六』、『半月』などを愛読していたことがうかがわれる。1922～3年には、新文学派の影響力が次第に新興知識階級の間で強まっていたが、依然として『礼拝六』、『半月』などが圧倒的な人気を得ていた<sup>91</sup>。次世代の鴛派の担い手と見なされる「少壯派」（鄭逸梅の命名による）の作家たちは、鴛派刊行物を愛読し、同派への投稿をきっかけとして読者から作者に轉身し、文壇へのデビューを果たした。

新文学派は自派の力を統合した「聯合戦線」<sup>92</sup>の形成を目指し、純化史観・歴史的進化論<sup>93</sup>の観点に基づいて、あらゆる非新文学派のものを敵と見なす傾向があった。実は、新文学派登場以前においては、南社の後期メンバーや新聞出版界のジャーナリスト、作家らの文学創作には、雅俗未分化の状態が見られる<sup>94</sup>。『玉梨魂』のような駢文体小



説もあれば、『人間地獄』のような白話文の社会小説もあった。また、世代の違い、地域の別、人脈の關係などを詳しく考察すると、鴛派のなかの複雑な分岐の存在が判明する。例えば前期鴛派の「五虎将」、「十八羅漢」（魏紹昌の命名による）のメンバー相互の作風は異なっており、後期鴛派は「礼拝六」派後進作者、「少壮派」及び青社、星社、施蛰存らの1905年前後生まれの世代を中心とする卡党などの社団に分類することも可能である。新文学派がこれらに対し一律に「鴛鴦蝴蝶派」というレッテルを貼り付け、糾弾したことで、現在では鴛派の重層的構造や、独自の創作規範に即した文壇デビュー制度などが看過されてしまうという問題が生じたのである<sup>95</sup>。

また、鴛派刊行物に投稿していたポスト科举世代の若手作者たちには、新と旧の境界をはっきり区別する意識がなく、彼らの投稿歴は当時の文学規範に従っているに過ぎず、その作品は完全に新文学と異質であるとは言いがたい。現在の一般的な文学史に従えば、鴛派と新文学派はそれぞれ油と水のようにはっきり分かれていたとされるが、掲載誌への固定観念を排除し、具体的に作品分析を行うと、実際にはその両者の間に明確な境界線を画することは難しいことがわかる<sup>96</sup>。他方、新文学派の刊行物に投稿する知名度の低い作者の作品も、必ずしも新文学派の文学観に合致するわけではなく、鴛派的な要素がまったくないとも言えない。

実際、「五四期に出版された小説に『新派』、『旧派』の分類をし、統計をとることは、容易ではない。新旧両派の境界はおおむねはっきりしているが、なお色彩が明らかではない二流三流の作家がおり、個別の作品は新旧の弁別が困難である」<sup>97</sup>と指摘する研究者もいる。新文学派陣営が社会的功利性を狙い、新文学の正統性を守るイデオロギーのもとで旧文化、旧文学を全否定（「妖魔化」）してしまうことは、文学作品への史的評価を単純化してしまうことになる、という指摘もなされている<sup>98</sup>。このような状況のなかで、一体新旧文学とはそれぞれどのようなものを指しているのだろうか。どのような基準が新と旧を分けているのか。もし、新と旧を分ける物差しが存在するならば、なぜ個々の作品が新と旧のどちらにも属しかねるという事態が生じるのか。もう一步進んで考えれば、新と旧は絶対的に区別できる状態にあるのではなく、むしろその中間地帯に両者の要素を兼ね、新と旧とが未分化な部分、所謂新と旧の融合の臨界点<sup>99</sup>に属さない部分があるからこそ、作品の新旧弁別の困難が生じていると言えるのだろう。仮にこの推論が成立するとして、そのうえでこれまで見過ごされてきた当時の文学規範のなかでの新旧それぞれの文学主張を掬いあげて考察するならば、新たにどのようなことが見えてくるだろうか。そこで具体的に「横並びの視点」<sup>100</sup>で鴛派と新文学派の共生共存の側面を考察したい。

#### 1. 鴛鴦蝴蝶派とは何か

まず、先行研究における鴛派の文学史的な位置づけを振り返ってみよう。1962年に范煙橋が『民国旧派小説史略』で鴛派の「正統的な文学史的地位」を提唱している<sup>101</sup>。50、60年代には、台湾、香港では鴛派文学の一分派である言情・武俠小説が盛況であったが、大陸での文学史の中では鴛派は「逆流」と見なされ、鴛派作品は事実上発禁となっていた。ようやく1962年10月に、上海文芸出版社が『鴛鴦蝴蝶派研究資料』の「史料部分」を内部発行の形で出版した<sup>102</sup>。80年代に入り、文学環境が緩和されるなか、上海で鴛派文学を再評価する声が現れ始め、1984年、ともに魏紹昌編集の「中国現代文学史資料叢書（甲種）」『鴛鴦蝴蝶派研究資料』（史料部分と作品部分の上下二冊）と『鴛鴦蝴蝶派小説選』が出版された。魏はその著書『我看鴛鴦蝴蝶派』（台湾商務印書館、1992）で鴛派を「美麗的帽子」と喩え、鴛派と新文学派を「井戸の水」と「河の水」と見な

し、それぞれの文学史的評価の見直しを図った。

范伯群は80年代後半に通俗小説を再評価するべきだとの論を展開し、鴛派と新文学派について「継承改良派」と「借鑑革新派」という括り方を提唱し、中国現代文学史の中に鴛派文学も取り込むようにという「兩個翅膀論」を打ち出した<sup>103</sup>。また、袁進、湯哲声、徐德明、曠新年らの研究者もほかの切り口から鴛派の文学史的な意義を論じた。全国で広く採用され標準的な文学史と見なされた大学教科書『中国現代文学三十年（修訂本）』（北京大学出版社、1998）は、通俗小説を中国現代文学の一部と位置づけて他の潮流と同等に扱った。これによって通俗小説の中国現代文学史への回収は一段落したと言って良い。さらに、2000年に范伯群主編の『中国近現代通俗文学史』（江蘇教育出版社）が出て、この間の議論と研究が集大成された。その後は、両者の対立という側面よりは共通点のほうに研究者の関心が向かっている。特に、戴嘉樹「市声中の缺失與存在—鴛派小説生存境遇剖析」（『文学評論』第4期、2010）、黄霖「民国初年『旧派』小説家の声音」（『文学評論』第5期、2010）などの論文が、それまであまり注目されていなかった鴛派作家の文学創作の理論、主張を再評価したことは先駆的試みと言えよう。しかし、両氏の論はいずれも具体的な作品に触れることがなく、また新文学派の批判・賛同の側面や、鴛派及び後期鴛派の作家たちの翻訳文学における貢献を見落としている。

朱自清、何満子及び史鉄生、阿城らの現代作家たちが「雅俗文学」、「世俗文学」、「通俗文学」の視点で鴛派の正統性を評価し、中国文学史の重要な一環として位置付けしたことは興味深い<sup>104</sup>。90年代には通俗文学の台頭に伴い、鴛派をはじめとする通俗文学の研究が中国で盛んに行われ始めた。鴛派作家の小説集、散文集、評論集、及び南北鴛派の研究書などが出版されると同時に、中国各地で『大衆小説』、『今古伝奇』などの通俗文学期刊誌や、通俗文学の単行本などの発行ブームが生じた。

さて、鴛派とは何か。まず、呼称の面から見てみよう。「鴛鴦蝴蝶派」は本来男女間の愛をテーマとする作品群を指す呼び方である。一方、「礼拝六」派という呼称は、当時上海で出版された雑誌『礼拝六』を中心に作品を発表していた作家グループを指している<sup>105</sup>。鴛派刊行物に作品を発表した作家は、大きく分類すれば三種類がある。第一は、本来南社のメンバーであり、後に新聞、雑誌を編集して鴛派の中樞を担った作家。第二は、鴛派刊行物でデビューし、後に新文学派の一員となった作家（葉聖陶、劉半農等）。第三は、鴛派の少壮派、予備軍であった若手作者（姚蘇鳳、黄軫陶等）、主に蘭社、緑社、卡党などの社団のメンバー、及び『礼拝六』などの鴛派刊行物に寄稿していたあまり知られていないアマチュア作者たち。第二類の中で胡寄塵、施蛰存、朱維基、黄厚生らは新文学派、鴛派双方の刊行物に投稿し、どちらとも交遊関係があった。彼らは新文学にアンビバレントな感情を持ち、それぞれ異なる文学の道を歩んでいった。

鴛派作家たちは、自分の意思、趣向を尊重し、自由に創作することを何よりも重視していた。彼らは西洋的な新事物に興味を示し、日常的な題材を用いて文学の娯楽性、趣味性を尊重した創作を行った。彼らの中には、周瘦鵬のように貧困の家庭に生まれ、やむを得ず学校を中退して執筆活動によって生計を立てた者もいれば、衣食に困らない中産階級の子弟や、小中学校の教員、軍人、地方役所の職員などの職業に従事した者もいる。特に、袁世凱の次男袁寒雲、政府要員何海鳴らが鴛派と親交があることから、一口に鴛派と言っても各作家の身分は決して一様ではないことがうかがえよう。さらに、彼らは声高な改革の言説や、道德教化、社会批判などのテーマを掲げることなく、社会性の強いスケールの大きな叙述から距離を置いていたのである。読者啓蒙・社会改造のような遠大な理想を持たず、読者と同じ位置に立つ友人のような

小説は人の暇をつぶすためのものである。……且つ趣味に富む文字の中の寓話はとても意味深い。こういうことが消閑に近いと言えよう。（原文：小説供他人消閑。…且有趣味の文字之中。寓言很好的意味。這樣。便近于消閑了）	胡寄塵「消遣？」、『最小』第3期（1922年12月5日）
小説は確かに文芸的であり、消閑的なものではない。（原文：小説的確是文芸的。確不是消閑的。）	張含我「小説小話」、『良晨』第4期（1922年5月24日）
我が国の人は小説を「消閑物」と見なしているが、それは大きな誤りである。（原文：我國人謂讀小説為看閑書。此實大謬）	瞿寒影「小説叢談」、『礼拝六』第157期（1922年4月15日）
読者は小説を茶のみ話の消閑物と見なしてはならない。（原文：読者不可当作茶餘酒後的消閑品。）	葉秋原「小説話」、『蘭友』第8期（1923年3月21日）
小説を「消閑物」や「遊戯物」と見なすのは……それはすべて小説の真の価値が分かっていない。（原文：都把小説作為一種「消閑品」和「遊戯物」。……這都是不知小説真價值的。）	蔣吟秋「小説雜談」、『星期』第28期（1922年9月17日）

存在である。このような低姿勢での語りかけは読者に馴染みやすく、娯楽性の強い作品が多い<sup>106</sup>。

鴛派の作家には外国語に堪能の者が多く、周瘦鵬、包天笑、胡寄塵らが積極的に外国文学の翻訳を行い、新文学派作家に賞賛されたこともある<sup>107</sup>。彼らが外国文学の紹介・翻訳をする際に、最も重視したのは趣味性である。その次は、平易な文体・表現で極力直訳で原文の匂いを多く残すように工夫している。しかも、新文学派のように外国文学を用いて中国文学を変革しようという目的意識を持たず、むしろ外国文学と中国文学との同時代性や共通性を見出し、中国文学を世界文学の一部として再評価しようという意気込みが見られる<sup>108</sup>。

鴛派の刊行物には、一般の読者の投稿作品と鴛派作家のものとが混在しており、その中には悪趣味なものや幼稚なものも混じってしまうことは免れ得ず、新文学派からの攻撃はまさにそのようなものを標的にしていたと言えよう。鴛派作家たちの多くは文学刊行物の編集者であり、時代の風潮に敏感で鋭いジャーナリスティックな感覚を持っていたため、読書市場の需要に応えることに特に意匠を凝らした。1921年頃からは、鴛派でも「語体文」いわゆる白話文体を主に用いた小説が増えている。社会的題材を扱う作品も増え、「婚姻問題」、「親子問題」、「労使問題」などの「問題」小説も流行っていた。新文学派と鴛派の両者が互いに接近し、境界線が曖昧になるような世態人情を描く写実的な作品では、両派の完成度はほぼ同水準であり、ランク付けは難しいと言えよう<sup>109</sup>。各誌紙がこぞって同一作者の同一傾向の作品を採用したことは、各誌紙間の編集傾向と採用基準における共通性を示すものと言えよう。こうした点を考えると、新文学派、鴛派両者の間に明確な境界線を引くことは容易ではあるまい。

## 2. 鴛鴦蝴蝶派の創作論

鄭振鐸編『近代文学大系・理論編』は「鴛鴦蝴蝶派の理論的な文章は手元がないので、引用できない」<sup>110</sup>と断っているため、鴛派を論じる際には、『鴛鴦蝴蝶派研究資料』などに収録された『最小』の作者の観点のみが頻繁に引用されている。しかし実際には、膨大な鴛派文学の中には、より示唆に富んだ観点が多数見られる。以下、鴛派刊行物の中から、主に若手鴛派たちの文学観が表れている文章を抽出して考察したい。

### （１）「暇つぶし」の創作観：

鴛派の創作態度は不真面目であり、俗悪で低級なことしか書かない、と新文学派は批判している。しかし、実は彼らの中には、娯楽性・消閑性を重視する一方で、悪趣味・過剰な娯楽性・低俗性については猛烈に批判するという姿勢を示している作家が大勢いる。以下にそうした主張の一部を掲げる。

彼らは新文学派のように読者の鑑賞力を過大に評価せず、また過剰に読者の鑑賞力の低さを責めず、読者の水準・期待に合わせて作品を創作する姿勢を持っていた。常に読者の要望に応じて作品を生み出す商業的・ジャーナリスティックな姿勢を持っていたと言えよう。

ここに頻繁に現れている「消閑」という言葉には、様々な意味合いが含まれていると思われる。教化一辺倒になるのではなく、趣味性に富む蘊蓄を含んだ文学が彼らの理想とする「消閑」文学と言えよう。一方、新文学派の中には文学の消閑性に対して否定的な姿勢を貫徹している者が多いが、肯定的に見ている者もいる。栞梅健が指摘している通り、「文学と読者との関係の問題においては、五四新文学の作者たちも明らかに俗に媚びる傾向を帯びている」<sup>111</sup>。例えば、『小説月報』の通信欄には小説を「消閑物」と喩えている読者がしばしば見られる。読者孫一影の投書に、「革新後の『小説月報』は……我々文学を研究するものにとって、まるで良き師、良きパートナーのようだ。益を得ることが少なくない。現在の私は恋人のように考えていると言ってよい。よほどのことあるいは必ずせねばならぬことがない限り、わずかの間も彼女と離れたくない」<sup>112</sup>と述べている。ここの『小説月報』イコール恋人の喩えは、『礼拝六』の有名な広告フレーズ「妾をもらわなくても『礼拝六』を読まないと済まない」<sup>113</sup>を想起させる。しかし、両者の「恋人」の意味合いはやや異なっており、『小説月報』のほうは精神的啓蒙、教化の役割を持つ同格の恋人であるが、『礼拝六』のほうは格下の妾なのである。

### （２）描写と「記帳式」

沈雁冰は、「自然主義與中国現代小説」（『小説月報』、1922年）において、鴛派が描写の手法を使わず、だらだらありのままに叙述することを、「記帳式」として批判している。実は鴛派作家自身も描写手法をめぐって批判し合っており、無味乾燥な叙述が多すぎて深く掘り下げる描写手法が欠如しているなどの問題を指摘していた<sup>114</sup>。例えば、悲しさを表現するなら「涙を流す」、喜ばしさを表現するなら「呵呵大笑する」と千篇一律に描くのは洞察力が欠けていると指摘し、また「小説の登場人物の周りの様子への描写は、なるべく簡潔かつ適切であるほうがよい。（中略）この前読んだある小説では、部屋の中にいる未婚女性のことを描くのに、部屋の陳列物をだらだら並べていたが、まるで嫁入り道具屋の商品リストのようだ」<sup>115</sup>という批判的意見を述べている。なるべく平板な叙述にならないように気をつける必要があると主張し、そうでなければ、「記帳式」と皮肉を言われてもしょうがないという「小説痴」という署名記事もある<sup>116</sup>。

ここに鴛派作家の描写について繰り広げられた議論の一端がうかがえる。彼らは自ら創作に関する問題を互いに議論し、また新文学派の「記帳式」であるとの批判を素直に受け入れる姿勢を示しているのである。伝統文学と外国文学を融合し、描写の手法を用いた完成度の高い作品の産出を迎えるには、あと10年は待たなければならなか

った。また、このような「記帳式」の問題をめぐって行われた議論には、リアリズムに対する異なる見方も現れている。新文学派は文学に哲学や思想を求めており、何よりも社会的教化、啓蒙を最重要視し、社会的使命を担うことを求めている。一方、鴛派文学は様々な描写の技巧を身に付けていたにもかかわらず、社会的使命や審美的関心の探求は、やや不足しており、社会啓蒙、救国救民、改革意識などイデオロギー性はやや弱いと言えよう<sup>117</sup>。

### （３）創作方法をめぐって

鴛派作家の中には錢唐邨（生年不明）のように、社会の動静を観察することは小説創作において最も重要であると鴛派の若手作家たちが主張しているが、革新性をまったく持たない作品は決して傑作とは言えないと述べた者もいる<sup>118</sup>。その一方で朱鴛雛は「近感録」の中で、文言文は白話文と比べて簡潔で高い表現力があると述べている。作品は社会現実に目を向け、人生を正しく導くような役割があると主張した者や<sup>119</sup>、金銭、利益のため、ひたすら他人の作品を模倣することを批判した者も大勢いる<sup>120</sup>。

新文学派の作品が欧化文法を過剰に用いることは、一般の読者に敬遠される一因であった。このような指摘は新文学派及び鴛派の刊行物に頻繁に現れているが<sup>121</sup>、新文学派の作家たちは読者への配慮が足らず、むしろ西洋文学理論を直輸入し、読者社会の徹底的改造を優先しようと考えていた。30年代になって文芸大衆化を打ち出したとき、新文学派はようやくかつての性急な文学理論の展開の過ちを認識できた<sup>122</sup>。他方、鴛派作家たちは批判的に欧化文法を用いており、その程度の適切さが読者の好評を博した。新式の標点符号や女性三人称を表す「她」<sup>123</sup>などを使用することで、読者の理解を助けるように工夫した柔軟な態度が見られる。

## 3. 曖昧だった鴛鴦蝴蝶派と新文学派

20年代初頭、短篇小説の創作法をめぐって、鴛派と新文学派の両者は盛んに参考書を出版していた。例えば『小説学講義』（梁鼎臣編、大新書局、1924）、『小説法程』（C. Hamilton 作、華林一訳、商務印書館、1924）、『小説学』（陳景新、泰東書局、1925）などがあり、両者の内容は一致している部分が少なくない。その意味では、鴛派と新文学派の両者の間に明確な境界線は見出せない、或いは両者の主張には互いに重なり合う部分が多くあると言えよう。

鴛派の中には、新文学派の批判を承けて自分の創作に反省的な態度を示している作家もいる。蘭社のメンバー李伊涼は新旧双方とも良いところと悪いところを持ち合わせていると指摘し、「双方は感情的にならず、各自相手の良いところと自分のよくないところを認めるべきである」<sup>124</sup>と提案している。同じく蘭社のメンバー施蟄存、錢唐邨は「新旧ともに異議なし」という観点を持ち出して、旧文学、新文学を共に隆盛させるべきであると述べている。

一方、新文学派は鴛派を糾弾し、「徹底的に打ちのめす」<sup>125</sup>姿勢を示している。鴛派の作品をきちんと読もうとせず、誰もが口を揃えて感情的な攻撃態勢を取っており、新文学派の刊行物に属さないものはすべて非と見なし、「礼拝六」派のレッテルを貼るだけであり、真剣に個別の作品を批評する姿勢はほとんど見られない。求幸福斎主人（何海鳴）が、新文学派たちは「『小説月報』以外には、『星期』、『礼拝六』などをひどく見下し、しかも見ようともせず、口を開けるとこれ物を悪いものだと言断言するのだ」<sup>126</sup>と述べたのも

もつとも言えよう。

新文学派の中の個別の作家の中には新旧調和の観点を提唱したものもいたが、あまり良い反響は得られなかった。例えば、『東方雑誌』第17巻第8期（1929）の「読者論壇」欄に掲載された蔣善国という読者の「我的新旧文学観」は、古き学術や教訓を現代的な視点で見直し、場合によっては欧米の新しい学説を活かしながら補っていくことが必要であると、新旧両派の併存の必然性を述べている。黄厚生という読者も新旧文学の調和について、旧文人の作品をもっぱら攻撃するのではなく、彼らに新文学の知識を教え込み、積極的に暗示をかけて指導することが必要である。そうすれば、次第に新文学化が達成される、と述べている<sup>127</sup>。しかし、鄭振鐸らは、このような新旧調和論を完全に否定し、古いものと一切関わらない人たちにのみ新しい知識や思想を注入することが可能であると主張したのである<sup>128</sup>。それはむしろ新文学派が趣味的、娯楽的、伝統的な文学を好む読者を改造する機会を放棄したとみなせるだろう。

実は新文学派は自分たちの陣営に属している刊行物の作品には、柔軟かつ寛容な姿勢を見せている。例えば、『文学旬刊』で許秀湖は「読『心潮』里底五篇小説」<sup>129</sup>の中で、『心潮』（民智書局刊行、玫瑰社編集）の小説を取上げ、「幼稚」であると指摘し、題材や登場人物、プロットの展開などに見られる破綻を客観的に批評し、最後に作者に対し「真実な精神を持ち、芸術の道を歩もう」と鞭撻の言葉を送っている。また、『文学旬刊』の「通信」欄では、編集者が読者宋雲彬の投書への返信に、読者の創作意欲をかきたてることを最も優先的に考慮すると述べている。『文学旬刊』の小説の掲載基準について、やや未熟なものであっても「一、二の取り柄さえあれば発表させる」<sup>130</sup>とも述べ、いわゆる自らの陣営の未熟な作品に対しては、批判する姿勢を取らず、根気よく指導していく態度を取っているのだ。しかし、鴛派に対しては、「激しく罵るしかない」<sup>131</sup>という強気の態度に終始していた。

新文学派の中にも、彼らが鴛派に見出した問題と同じものが潜んでいた。仮に作者や刊行物の名を伏せて、作品の中身についてのみ分析を試みたならば、様式を除けば本質的には両者の間にあまり差が見られない場合もある<sup>132</sup>。例えば、『文学旬刊』の素我の「機会」<sup>133</sup>、『小説月報』の陳鈞の「離婚的好機会」<sup>134</sup>、『新潮』の某君投稿の「怪我不是」<sup>135</sup>が挙げられる。

最後に、鴛派が行った議論の中で、新文学派と共通する部分を取り上げてみよう。

『文学旬刊』第64期（1923年2月11日）の「紹介新刊」欄には、「これらの文人の心血を、微笑しているバラに染み込ませて、枯れはてた人生を慰めたいと願っている」<sup>136</sup>という鴛派に類似した『心潮』の発刊語が記されている。この『心潮』第2期（1923年8月）に掲載された「玫瑰社宣言」が取り上げている同社の三つの任務の一つとは、「人を笑わせたり、泣かせたりする作品を掲載し、煩悶し悲しんでいる人たちに尽きせぬ慰めを与えられるよう望んでいる」<sup>137</sup>であった。ここで用いている「心血」、「花」の喩えは、鴛派の青社同人誌『長青』の創刊号（1922年9月3日）に表れている「結晶」、「心血の花」<sup>138</sup>の喩えや、『紅雑誌』の創刊語に見える「文人の心血の結晶」<sup>139</sup>の喩えと似ていると言えよう。また「玫瑰社宣言」の中で文学作品による慰めが重視されていることは、新文学派による鴛派の「消閑性」、「娯楽性」への攻撃と矛盾している。

同様に『文学旬刊』第59期（1922年11月21日）の「雑談」欄では、許秀湖が友人宛の手紙で、小説を書くことはあくまでも「一時的な趣味」に過ぎないと述べている。許秀湖のこの告白は当時の大勢の文学青年の心境をある

程度表していると言えよう。以上は新文学派と鴛派を画然と区別することのできない「灰色地帯」の例である。

また、美人画・集錦小説への異議をめぐって、美人の挿絵、表紙を使用することは低俗であり、読者にとって悪い影響しか与えられないと新文学派が主張しているが、鴛派作家も同じく読者に媚びた美人画を大量に挿入することに不満を覚えている。例えば、上海好友良晨社が発行した『良晨』は美人画の表紙を使用しないことを明確に断っている。その理由としては刊行物が「見た目の美」よりも「実質の素朴な美」を追求するためである。ここで『良晨』が示す表紙絵デザインの方針は、ほかの流行の刊行物と一線を画すためであるという<sup>140</sup>。

当時、短篇小説の題材に関して、特に恋愛、婚姻ものが氾濫していることに対し、沈雁冰らはその「千篇一律」の現象を批判していた<sup>141</sup>。鴛派も同じスタンスに立ち、恋愛小説の氾濫に対して同様の問題意識を示しており<sup>142</sup>、才子佳人小説に対する批判の声は、鴛派の中にもあった<sup>143</sup>。

ここで新文学派が指摘している恋愛小説氾濫などの現象は、決して偶然に現れたものではない。個性解放、自由恋愛を求める若き知識人たちは、生活の中で現実のくびきと衝突して葛藤を生じ、後に妥協せざるをえず、自己の限界を意識する。その限界は、当時の複雑な時代環境、歴史的条件、個人の認識と無関係ではなく、それらが小説創作に反映していたのである<sup>144</sup>。

### 第三節 施蛰存の「新旧ともに異議なし」をめぐって

この節では、筆者が『最小』、『虎林』などの鴛派刊行物から発掘した一次資料を手掛かりとして、当時鴛派の新鋭若手作家であった施蛰存の文学論に注目し、彼が発表したエッセー「新旧我無成見」の当時の文壇における位置付けについて考察したい。まず、「青萍談吐」から見てみよう。

#### 1. 「青萍談吐」論

このエッセーは『虎林』第5期（1923年5月26日）に発表された。内容は次の通りである。

「私は目下の著述界に、多くの意見を抱いている。心の奥に溜めていたが、とうとう我慢できなくなったので、随意にいくつか取り上げ、『虎林』の一角を借りて、同士諸君と互いに研究したい。それはまさに胡適の詩に言う自由にものを言わないときっと不快を感じるというものだ。

小説家になりたいと願いながら小説を書くべきではなく、作家は自ら人格を高めることを願うべきである。投稿する際には雑誌や新聞の価値を慎重に考慮し、妄りに投稿しないように慎むべきである。どんな種類の文章であっても、総じてある程度の文学的意義を備えるべきである。下品な駄作を書くくらいならむしろ何も書かないほうがましである。

お金のためにわざと作品を引き延ばしてはいけぬ。精彩を欠いてはならない。

本を読んだ後に文章を書くべきではない。その本の筋がまだ頭の中に残っているので、知らず知らずのうちに、自分の作品に組み入れてしまい、剽窃になりがちであるからだ。小説は苦心して考えたからといって簡単にできるわけではない。

新旧文学家は どうしてお互いに攻撃する必要があるのか。私から見れば、今日の中国文学はまだ新と旧に分けることはできないのだ。新文学の作品は、標点を除けばたちまち『半月』、『星期』の小説になってしまう。残念ながら、最近私たちの中には

西洋文学者を紹介する人がいない。しかも、小説月報と同じような性格の雑誌も持っていない。それで比較するとすこし劣っているように見えてしまうわけだ。新文学作家が言うようなことではない。『半月』、『星期』の中のものはすべて小説とは言えないというのが私は信じがたい。

新文学側は我々同人を黒幕派、礼拝六派と呼んでいる。しかし、もし私たちが小説月報の作家たちを「〇〇派」「〇〇派」と呼んだとしたら、新文学作家は受け入れるのだろうか。（「〇〇派」「〇〇派」には新文学派の中で最も出来の悪い部類の作品が入る。）

もし著作家になりたいのであれば、直ちに読書をし、直ちに社会のあらゆる問題を研究していただきたい。いたずらに剽窃するだけでは、一日だけの名声でさえ得られないのだ」<sup>145</sup>。

『虎林』の編集者黄軫陶はこのエッセーについて「小説創作についての観点は極めて説得力があり、小説作者にとって助けになる」<sup>146</sup>と評している。新旧文学の角逐のなかで、施蛰存は新旧はお互いに攻撃すべきではない、お互いに文学の振興に努力すべきであると述べ、自らの姿勢を示した。実際、新文学派の作品と『半月』、『星期』らの作品には、題材、テーマ、手法などの面で共通の要素を持っており、「人生のための文学」という目標は新文学派だけのものではなかったと言えよう。施蛰存がここで述べているように、旧文学派が新文学派に敵わないところは、確かに西洋文学の紹介、翻訳であろう。新文学派が文壇での正統な文学の地位を占め、機関誌に翻訳文学の紹介、宣伝を行い、読者の支持を得ているのに対し、鴛派作家たちにも翻訳に携わる意気込みはあったが、出版、発行においてそれほどの成果をあげてはいなかった。

施蛰存がここで「標点」符号について述べたことは、鴛派作家と大差がない。例えば、『最小』で張舎我も「私は一般の青年たちに対して、あなたたちは自らの認識や思弁、理解によって、それらの新式句点符号を使わない小説を批判するように切実に望む」<sup>147</sup>という類似の観点を述べている。

施蛰存はエッセー「談莫泊桑的小説」<sup>148</sup>でモーパッサンの小説に描き出されたフランス社会の暗黒ぶりが中国の「黒幕小説」とそっくりであると述べている。また、モーパッサンの「きわめて耐えがたい事実でも、美的な芸術を加えさえすれば、素敵な文章にならないはずがない」<sup>149</sup>という言葉を引いて、美しい字句を使うことで、読者に醜いものに美的な感動を与えると述べている。さらに、その独自の観点からモーパッサンの作品を取り上げ、鴛派の有名作家である張舎我に対して異議を唱えてもいた。張舎我は、胡寄塵と周瘦鵑の小説がモーパッサンの作風に似ていると指摘しているが<sup>150</sup>、施は張枕緑の「其妻之死」と何海鳴の「老琴師」がモーパッサンの作品と似ていると主張した。ここからは、施蛰存の外国文学への強烈な関心と非凡な鑑賞能力がうかがえるだろう。今後意欲的に外国文学を翻訳、紹介していくという抱負もここで語っている。

施蛰存の投稿歴を見ると、ここで述べた創作の心得を彼自身が必ずしも実行し得ていたわけではない。恐らく理想の形として、同じ心得を持つ作家のことを念頭におきながら、この心得を発表したと思われる。「青萍談吐」で施蛰存は新文学派に批判されていた「黒幕派」、「礼拝六派」のことを「吾儕」（我々）と称しており、明らかに鴛派の陣営の中に自分を位置づけていたものとうかがえる。かといって、施蛰存はあくまでも新旧の偏見を持たずに両者の境界を破ろうという姿勢を示したのであって、決して新文学派に対して対立的な姿勢を取ったわけ



ではない。ただ、新文学が鴛派に一方的に「黒幕派」、「礼拝六派」のようなレッテルを貼り付けることに對し、施蟄存は新文学のことを悪名により「〇〇派」と名付けたらどう思うかと述べ、新文学派の道理が通らないところに反発を示していたのだ。

## 2. 「新旧我無成見」論

施蟄存は1923年8月に小説集『江干集』を出版し、その一カ月後、『最小』第92号（1923年9月7日）「關於小説之文」欄に「新旧我無成見」と題するエッセーを発表した。そこでは新旧文学に對し、より一層明確な認識と見解を示している。

「私が近來考えていることは、小説は芸術性を追求しなければならないということである。従つて『小説月報』、『創造週刊』を私も読みたいと思ふし、また冰心と葉紹鈞の作品を私も理解したいと思つてゐる。しかし、詩の方面に關しては、白話詩の格調は彈詞より明らかに低いと思つてゐる。しかも現在の詩のレベルはますます低くなつてゐて、意味も解らなくなつてゐる。だから詩の問題について、私は律詩は排除してもよいが、その他は必ずや排除すべきではないと考える。私はこのような主張を抱きつつ、多くの同人と連合して、詩を復興し、そして小説も創作しようと思つてゐた。そこで維娜絲文学會を發起し、幾人かの會員を募集しようとしたのである。そんなとき偶然詩作の得意な友人と會つて、彼にこの文学會に加入するよう勧めた。しかし小説は『創造季刊』、『小説月報』のように創作すべきだと知ると、彼は私を新文化の人物と決めつけ、入會しないと云つた。またある時、私は小説を研究する友人と會つて、彼にも入會するよう勧めたが、私が白話を使わないと分かつと、私のことをセンスが『古すぎる』と言ひ、またしても入會を断られてしまつた。そういうわけで、この可哀そうな文学會には、今までにわずか10数人しか集まつてゐないのである」<sup>151</sup>。

施蟄存はここで文学の芸術的要素を重視し、新旧文学に對して偏見を持たずに評価しようとしている。新文学派の小説の高い芸術性を認める一方、白話詩（新詩）に對しては、興味は示していたが、旧體詩をどう評価するかが新旧文学の大きな分岐点であると考えていた<sup>152</sup>。彼は律詩を改革し、新詩代わりになる旧體詩の復興を狙いつつ、新文学派的な小説も創作しようと思つてゐた。芸術性という基準のもとで旧體詩と新文学との共存を念頭に入れ、維娜絲文学會にも小説の組のほか、詩、詞、戯曲の組も設けてゐた。彼にとって、文学の眞の發展を促すために、旧文学を完全に否定する必要はなく、適切に改善しながら、新文学と共に發展させていくことが大事であると考えてゐた。

施蟄存が最初の私家版小説『江干集』<sup>153</sup>の「卷首語」で七律を作つたり、王西神や高君定らの題詩と題詞の挿絵を入れたり、短篇小説「紅禪記」<sup>154</sup>に龔自珍の旧體詩を引用し、「不忍詞」を試作したことなどから見れば、旧體詩は彼にとってような身近な存在であることがうかがえる。新詩に不満を持つことは、施蟄存らの同世代の作家たちに珍しい現象ではなかつた。例えば、張天翼の短篇小説「新詩」は、新女性である妻「斯萊」と旧式な夫「黃遵妻」とが交わした會話を通じて、「斯萊」作の新體詩「北風」<sup>155</sup>をめぐる「ああ、新體詩はきわめて妙なものだ」と皮肉めいた言葉を残してゐる。

また、施蟄存が新體詩はまだ旧體詩の枠から完全に脱しておらず、思考と形式などは旧體詩と切つても切れない關係があると述べてゐる。「此亦直訳乎」<sup>156</sup>に朱自清の「毀滅」（『小説月報』第14卷3号、1923年3月に掲載）を取り上げ、朱が枚乗の「七發」の形式を借りてい

ると指摘した。俞平伯は「毀滅」に対し、施に賛同したことを記している<sup>157</sup>。ここで新文学作家が「七発」のことさえ知らないことに落胆を示したことも、施蟄存が新文学派作家に敬遠された一因とも考えられるだろう。

鴛派作家胡寄塵は「文学の未来のためには、作品に進歩があるなら、作者が誰であるかにかかわらず、推奨すべきである。新と旧の境を気にしなくてもよい」<sup>158</sup>と述べていた。張舎我は「小説には元々新と旧の区別もなく、主義なども存在していない」<sup>159</sup>と断言していた。錢塘邨が「新旧小説家の論争はまったく無意味なことである。（中略）だから、小説は新と旧に分けなくてもよい。作品の出来具合がよければ、新であれ旧であれ、みな優れたものである」<sup>160</sup>と述べている。

また、茅盾は1920年頃の『小説月報』の編集者の交替時、このように述べている。「彼（王蘊章——引用者注）は私に告白したことがある。彼は新旧文学に異議を持たず、時代の潮流に応じるべきであると考えている。（中略）新と旧を一色くたにすることは、却って両者からの反感を買うことになる。当時、新旧思想をめぐる激しい論争は、両立・調和派の存在を許さなかった」<sup>161</sup>。ここから、当時、新旧調和の立場に立つことや、新旧共に共存させることは相当困難であったことが想像できる。施蟄存の議論もこの流れに位置づけられるだろう。

また、何海鳴は張枕緑の文学を「新と旧を融合し、自分の風格をうちたてながら、神秘に流れない」<sup>162</sup>と評価し、趙苕狂が嚴独鶴を「西洋小説を多岐にわたって読んでいたので、その創作も新と旧を融合して自己のスタイルを確立できている」<sup>163</sup>と評価している。鴛派のこのような新旧の対立を打破しようとの理想と、今後の努力の方向を示した前向きな姿勢は、今でも積極的に評価すべき意義があるだろう。

しかし多くの文人たちは新旧の狭間に生きる「苦痛」を述べている。例えば鉏農は「許指嚴」（『小説日報』掲載号数不明）の中で次のように言う。

「しかしながら、現在ちょうど新旧の交替期であり、新と旧を共に行うべきである。特に既成の古い基準を以て新しいものを揶揄するべきではないし、新しいものを以て古いものを壊すべきではない。私の近作もこのような過渡的な主張を持ちながら、写実派であれ、旧ロマン派であれ、新ロマン派であれ、すべて書いて行く心構えがある。これまで私は長篇のものをずっと試みてはいないが、短編には新旧のいろいろなスタイルのすべて著作ものがある。しかし、新しい文体を使うと、旧派の人たちが時代の潮流への追従と見なして批判する。もし旧派のようなものを書くと、新人物もきっと古い方法にこだわっていると攻撃してくる」<sup>164</sup>。

ここでは鉏農は施蟄存とまったく同じ苦悩を語っているが、実はその解決案については、単に「過渡的な主張」を述べ、新であれ、旧であれ、ともに発展していくべきと主張している。一方、鉏農と違って、施蟄存は前述のように、新文学と旧文学のそれぞれを評価しつつ、不足点も取り上げ、さりとてお互いの非を攻撃すべきではないとして、芸術性を重視した上で、共に発展していくことを望んでいた。これは施蟄存が提示した独自の観点であろう。

このように、当時の施蟄存の文学観の形成、及びその時代背景の影響などがある程度うかがえるだろう。彼が主張する「新旧我無成見」は、より自由開放的な創作環境を求め、新旧の枠を打破し、文学への柔軟かつ寛容な態度を唱えたものでもある。しかし、これはあくまでも彼が抱いた理想に過ぎず、実際には新旧のジレンマの狭間に陥り、あがいていた。30年代に度々鴛派作家と非難されたが、この状況のなか、施蟄存が自ら鴛派文学を有効に取り入れて成功し

た作品を書きあげる（「獵虎記」、「黄心大師」）までには、更に10年の歳月を待たなければならなかった。

## 第二章 施蛰存の初期小説創作

1921年の夏休みに、施蛰存は郭沫若の『女神』の出版予告を見た後、直ちにこれを購入し興味深く読んでいた。しかし、読み終えた後には、新体詩への失望が強まった。詩の形式の斬新さには感銘を受けたが、思想や内容の未熟さに不満を感じ、黄公度（こうど）の旧体詩にさえも及ばないという印象すら持っていた。また、魯迅（ろしん）の『呐喊（なげき）』、周作人（しゅうさくじん）の『自己的園地（じこてきえんち）』、冰心（ひやうしん）の『繁星（はんせい）』、『春水（しゅんすい）』などを読み、大きな影響を受けた<sup>165</sup>。後に新体詩を試作して『民国日報（めいこくニョウポ）』副刊「覚悟（かくご）」などに投稿し<sup>166</sup>、さらに『小説月報（せうせつげつポ）』、『新潮（しんしやう）』、『新青年（しんせいねん）』などの新文学刊行物との触れ合いが増していくなか、彼は小説を試作し、文学活動の幕を開けたのである<sup>167</sup>。

1922年秋、省立三中を卒業後、南京の東南大学中文系を志望したが、合格できなかった。また北京大学中文系を受験しようと思ったが、親の反対によって断念せざるを得ず、杭州のミッション系の之江大学英文系に入学した<sup>168</sup>。之江には文学関係の授業が少なく、彼はもっぱら選り好みせず文学書を読みあさった。特に外国文学への関心が高く、タゴール（tagore）の『園丁（えんてい）』、バイロン（byron）の詩集、イギリスの文学史、散文、詩なども読んでいた。之江大学の図書館（以下の写真を参照）で『英国詩選（えいこくしせん）』を書き写したこともある<sup>169</sup>。同時に、中国古典文学の吸収も怠らず、袁昶（えんてい）の『西村人詩集（さいじんししゅう）』や、黄庭堅（わうていけん）の『黄山谷詩集（わんざんこくししゅう）』などを愛読していた<sup>170</sup>。之江近くの銭塘江（せんとくかう）、六和塔（ろくわだ）、雲棲寺（うんせいじ）などの名勝を遊覧し、また梵村（ぼんそん）、徐村（しよそん）などの郷土的な風景を満喫しており、後にこれらの風景や世態人情を下敷きに短篇小説を執筆している。

本章では三節にわたって、これまで資料的な不備からほとんど研究がなされていなかった施蛰存の初期文学に焦点をあてる。新文学、外国文学を受け入れながら文壇デビューしていく過程で、それまでの旧文学についての素養が施蛰存にどのような葛藤（こつとん）や矛盾（むじやく）をもたらしたか、また旧文学のどのような要素（ようそ）が後期の作品群（さくひんぐん）に生かされているかを解明（かいめい）したい。施蛰存（しせきぞん）は鴛派（うんぱい）、新文学派（しんれいがい）の刊行物（かんこうぶつ）に発表した作品（さくひん）や、『江干集（かうかんしゅう）』に収録（しゆ録）した作品（さくひん）で、多様な文体（ぶんたい）を試み（しるみ）、西洋文学（せいようれいがく）的な手法（しゅぽう）を取入れており、外国文学（こくごれいがく）の紹介（けいかい）・翻訳（へん訳）に力（ちから）を入れ、「新旧ともに異議（いぎ）なし」を趣旨（しゆし）として創作活動（さくしやくかつどう）を行っていた。その活躍（かつやく）ぶりは同世代（どうせだい）の作家（さくしや）をはじめ、鴛派（うんぱい）作家（さくしや）及び新文学派（しんれいがい）作家（さくしや）から好評（こうぽう）を得て、順調（じゆんてう）に作家（さくしや）としての最初の修業段階（しゆぎやうたんだい）を終えていくのである。



之江大学（現在の浙江大学之江学院、2008年7月4日筆者撮影）

### 第一節 第一の創作ピーク期の到来——1923 年頃の創作活動をめぐって

1921 年から 1926 年にわたって、施蛰存は小説、散文、筆記、旧体詩、新詩、批評など 70 点余りの作品を発表した。これらの作品は従来研究者に見落とされ、作品集に収録されていなかった。2011 年に刊行された『施蛰存全集』（劉凌編、華東師範大学出版社）は初めてこの初期作品の一部分を収録したが、それに基づく新しい研究成果はまだ生まれていない。本節では、施蛰存が文壇デビューの最初期に、どのような文学論あるいは文学的立場を標榜していたのか、当時のメディア、出版制度の中で、どのような作品をどのように発表していたのかを検討したい。

1923 年、施蛰存は之江大学に在籍し、皮兒巷（以下の地図を参照）に在住していた戴望舒と親しい交遊関係を結んでいた。蘭社での文学活動に携わりながら、一つ上の学年の林漢達とともに非宗教大同盟の宣伝活動にも参加し、6 月に自主的に大学を退学した。8 月に『江干集』を出版し、維娜絲文学会の発足を計画した。1923 年秋、施蛰存は活動の舞台を上海に移し、上海大学で沈雁冰、俞平伯、田漢、陳望道らの指導を受け、青鳳文学会を発足し、精力的に文学活動を計画した。1923 年には、小説創作を励行しただけではなく、松江の新松江学社の活動に参加したり、上海の共青团・国民党の宣伝活動に参加したり、蘇州の星社を訪ねて雅集にも参加していた。以下、時間軸に沿って施蛰存がこの時期に発表した小説を見てみよう。



#### 一、白昼夢・無意識の表出——「廉価的麪包」

「廉価的麪包」（1921）は『民国日報』副刊「覚悟」に掲載されている。これは恐らく施蛰存の処女作と見なしてよいだろう。ある乞食が貧しい農村から繁華な都市に出ることで飢餓の状況を改善できると望んでいたが、結局餓死寸前の状態に陥ってしまった。そのとき、新鮮な血とパンとを交換する白昼夢を見る。彼は胸を刺される恐怖感と飢餓の辛さの両方を味わい、深刻な葛藤に陥る。悩んだ末、とうとう胸を刺し、血が染み透った白布で胸の傷口を拭いて、やっとパンが手に入ると思いきや、すでに売り切れだと告げられる。その瞬間、胸の傷の痛み、飢餓の辛さ、絶望感が一斉に彼を襲い、意識も朦朧となり、「血とパンの交換とは何ごとか」、「愛らしいパン」、「醜いパン」などつぶやいて倒れてしまう。

乞食の白昼夢と無意識を描いているこの作品は、物語のプロットの構成、背景、人物の描写などが簡潔で、社会の底辺で生きる乞食を題材とし、施蛰存の社会的な関心ありかを示している。貧乏な農村でのもの乞いがうまいかず、豊かな都市でのもの乞い生活を期待していた

が、人間の無情と社会の不条理を実感し、結局は餓死の運命から逃れられなかった。彼は連日空腹で体力をほぼ全て失い、意識を失う前に考えているのは常に食物のことである。朦朧とするなか、「疲れ切った目に奇妙な幻覚が入り、同時に耳にも鋭い幻聴が聞こえた」<sup>171</sup>という一行から、乞食の白昼夢が上演される。ある人がかごを持って彼の前に現れた。彼はかごの中に入っているものが新鮮な薔薇ではなく、空腹を満たせる食べ物であることを切実に願っている。後にかごのなかに本当にパンが入っていることを知り、生き残る希望が燃え上がってくる。新鮮な血をパンと交換できるという説明を受けたとたん、ほかの乞食はみな争って胸を刺してパンを手に入れるが、彼は痛さに怯え、躊躇している間にパンはすでに売り切れてしまった。

「ナイフで胸を刺すって、一番つらいことではないか！血、血が出てくる。これも一番恐ろしいことだ。おかしいな、彼らはなぜ痛みを感じないのか？彼らはなぜ恐怖を感じないのか？本当は痛いのか？怖いのか？」<sup>172</sup>とくよくよ考えていたが、ほかの乞食の行動に刺激され、次第に決心がついた。「痛みや恐怖心、これらはすべて我慢できるものだ。ただし、飢餓は我慢できない。もし我慢すると命さえ失ってしまう。私は生きるために痛みや恐怖心に耐えるしかないのだ」<sup>173</sup>と悟る。しかし、血を出すとき「再び躊躇し始め」<sup>174</sup>、ただでパンをもらえると勝手に期待したが、結局交渉は不成立だった。そして、彼はやむなく胸を刺すことを再び決意した。しかし再び疑念を抱き、「躊躇した」<sup>175</sup>。このようなことを数回繰り返した上でようやく血を出したが、パンはすでに一個も残っていなかった。パン屋の叱責や皮肉に堪えながら、「ほんの一瞬、彼は元の自分に戻った。幽かな幻覚も幻聴もとうとう何も見えず、何も聞こえなくなった」<sup>176</sup>。この一行は前文と呼応し、白昼夢の閉幕を暗示する。

作品の題名である「廉価のパン」は新鮮な血と交換で得られるので、乞食たちにとって好都合である。しかし乞食のパンの需要は、供給できるパンの数を遥かに上回っている。パンが廉価であるからだ。しかも、その新鮮な血は特に用途があるわけではなく、ある意味で勇気を確かめる手段としての象徴的な意味合いであることは興味深い。新鮮な血がありさえすればパンと交換できるという仕組みには、一体どのような狙いがあるのだろうか。肉体を刺し、痛みを堪えるものに限ってパンを入手できるという設定には、残忍な手段に耐えることと飢餓状態の改善とのつながりというこの作品の寓意が潜んでいるだろう。また、パン屋は巧みにそのパンが「廉価」であるとアピールするが、実際には人間の命と同等の尊さを持つ高価なものである。タイミングを逃したら、廉価なパンを入手できないだけではなく、命さえ失ってしまうという点でそのパンは人間の命よりも高いものだ。

本作は乞食にまつわる外的な環境については冒頭の二、三行で触れる程度にとどまり、地の文と会話を駆使して彼の内面の葛藤を浮き彫りにしていく。乞食の不安によって創りだされた内的な空間は、後に施鰲存が命名した「Visual complex」<sup>177</sup>として読み取れるだろう。この作品の中で施鰲存はすでに人間の内面に関心を示し、自ら心理的な試みを行っていたと言えよう。人間の内面心理を探り、乞食の生理的な欲望から生み出された精神的な混乱、いわゆる「妄想」を描いている点は、施鰲存の初期小説最大の特徴と言えよう。また小説が掲載された新聞紙面には、階級差別をなくすための階級闘争を鼓舞する書籍『階級門閥』、『工団主義』などの宣伝広告が載っていた。それは単なる偶然ではなかったのだろう。恐らく編集者は「廉価的麵包」のテーマが広告の内容と合致していると判断していたのだろう。

当時の施鰲存は「紙幅は極めて短く、強烈に人生の様々な悲哀を表す」<sup>178</sup>欧州諸国の翻訳小説を耽読している。また、1920年のノーベル文学賞受賞者クヌート・ハムスン(1859～1952)の紹介が頻繁に『小説月報』、『文学旬刊』<sup>179</sup>に掲載されており、施もそれらを読んでいたことであろう。特に、ハムスンの『飢え』は「本書は徹頭徹尾、飢えている者の情緒、感触、



夢、妄想及び動作を描いている」<sup>180</sup>と紹介されており、施がハムスンに啓発され、「廉価的麴包」を以て飢えの心理を描出した可能性も大きいことだろう。1929年の『上元灯』に収録される「人間の意識の層を浸食するような瞬間の記述」<sup>181</sup>である「梅雨之夕」は、都会の既婚男性の無意識の底に眠っていた初恋の少女の記憶が雨宿りの女性に投影されるという「白昼夢」を、内面をえぐり出すように巧妙に描いている。それは「廉価的麴包」が描く「白昼夢」の深層心理の描写を一層発展させたものと言え、その後の施蟄存文学の展開をも予測させるものである。

## 二、夢による臆病の克服―「恢復名誉之夢」

「恢復名誉之夢」（『礼拝六』第155期）には、臆病者が日頃抱えているコンプレックスを夢の情景に再現し、自分の弱さと戦うという心理的葛藤が描かれている。粗筋は以下の通りである。

徐勞鋤は生まれつきの臆病者で、「徐老鼠」と揶揄されている。隣人がある西洋人<sup>182</sup>に苛められたとき、彼は外国人と衝突するのは危険だ」と思ってそれを止めようとしなかったが<sup>183</sup>、一緒にいた「長髪」は身を挺して西洋人を追い払う。そのため徐老鼠はますます嘲笑されるようになった。彼は自分の名誉を回復しようとして、夢を見た。夢の中で軍人として戦場で戦っており、戦死の恐怖に駆けられて逃げようとしたが、そのとたんに銃撃されてしまう。病院に運ばれても逃亡兵であったことを揶揄され、臆病者と嘲笑されるばかりである。やがて彼は自分の名誉を回復しようと決意し、病院を去って再び戦場に戻った。戦場での勇敢な戦いが後に表彰され、彼の抑圧されたコンプレックスはなくなった。翌日、徐老鼠はその夢に触発され、軍隊に志願し、後に中尉に昇進し、馬を乗って帰郷するところで物語は終る。主人公が普段から望んだ名誉の挽回が、夢のなかで軍人になるという形で再現されている。

作品の中でもっとも成功しているのは、やはり懸命に名誉を回復しようとする徐老鼠の丹念な心理描写であろう。この小説を「徐老鼠の勇気の再生の物語」<sup>184</sup>と解説する研究者もいるが、筆者はむしろ臆病者の内面心理、徐老鼠が臆病者と言われることにコンプレックスを感じ、自らの弱気な性格と戦いながら、それを克服する過程に焦点を当てている点に注目したい。「夢を通じて矛盾した心理が表現され、さらに無意識の問題にも触れている」<sup>185</sup>と指摘されているように、後期施蟄存の作風の前兆、いわゆる心理描写のへの関心がこの作品からもうかがえるだろう。

作中の夢の中に出現する戦場での銃に監視された兵士たちの行動は写實的であり、戦場での人間の心理の描写も的確である<sup>186</sup>。このような作風からは、『江干集』に収録されている「十三頁半」がある戦士の日記に基づいて戦場のリアルな情景を描いていることが想起させられる。

施蟄存はここで、中国伝統の章回小説のように物語の起伏や変化に重点を置くのではなく、人物の内面、感情の起伏や変化を重視している。全知の視角によって徐老鼠の夢の世界に入り込み、彼の日常のコンプレックスを戦争によって再構成している。後の作品群（「幻月」1928、「旧夢」1931、「花」1931）の中には、「夢」、「白昼夢」なども頻繁に出現し、作中人物の抱えた不安が架空の世界に反映されている。その一方で作中にいくつかの破綻した箇所が見られる。例えば最初の「話説」という言葉は伝統章回小説によく用いられるものだし、「月根国との戦争」<sup>187</sup>、「将軍」のような言葉が使用されているが、作品の背景である同時代と乖離していると思われる。一方、「少尉」、「十字勲章」のような西洋小説によく使われている言葉も散見するが、登場人物の身分や時代性から離れており、やや違和感を抱かせる。このような混乱が散見されるとはいえ、本作は施蟄存の「新旧共に異議なし」の実践作であり、プロット

の面白さに配慮しつつ、内的心理の葛藤を念入りに掘り起こしているところに施の本領を見い出せるだろう。

### 三、自らの芸術を守り続ける人―「老画師」

次に施蟄存が『礼拝六』第161期に投稿した「老畫師」（1922月5日）は、低俗な芸術の流行に走らず、自己の写実風のタッチを貫く不運の画師を描いている<sup>188</sup>。老畫師瓊塞爾（ジョン・セル）は社会的な審美志向に反し、生涯をかけて自分の芸術を追求し、当時流行していた低俗な美人画を喜ぶ人たちを軽視し、自分の芸術が認められないことに絶望していたが、最後に、鉄鉦採掘場で働いている人の息子で林頓路（リントンロード）に住む少年約翰・哈羅（ジョン・ハロルド）が救い手のようにドラマチックに登場し、老畫師の絵を絶賛し<sup>189</sup>、絶望の淵にいる画師を慰めるのである。施蟄存はこの作品で、読者に豊かな想像と幅広い思考空間を与えている。芸術家は大眾の欲望に応じるべきか、それとも自らの芸術を追求すべきなのかななどの問題を読者に投げかけている。ただしハロルドの言葉が芸術家の運命を変えるのか否かについて、施蟄存は深く追求していない。

「このような絵（美人画―筆者注）は我々にまったく役立たないのだ。我々は自分自身の状況を反映している絵がほしい」<sup>190</sup>という発言は、ハロルドの子供という人物設定とずいぶん離れた印象を与える。はたしてハロルドは老画師の絵画を理解できるのか、という点を問題として指摘したい。そもそもこのような言葉が18歳未満の中学生であった施蟄存によって発せられたこと自体が信じがたく、このような言葉は決まり文句的に用いられていた可能性もあるだろう。

作中では、老畫師の生活について、どのように困窮しているのかを詳細に書いてはおらず、美人画を好む多くの人たちを通じて彼の悲惨な状況を描出している。また、ハロルドの父親の生活状況や精神状態にも触れず、「鉄鉦作業員」の絵を媒介として、老畫師の芸術観と合体していく。客観的な外部の描写ではなく、ハロルドの称賛、老畫師の感動によって物語が成立していく。また自分の芸術を貫徹してゆくことと、大眾の写実的な芸術、通俗的な趣味に迎合することとの間のジレンマ、揺れの問題をも取り上げている。施蟄存が最も力を入れていたのはやはりこの二人の喜怒哀楽をめぐる心理的な描写なのである。また、本作は『礼拝六』の編集長王鈍根を感動させ、文末に「鈍根曰く。私はこの作品を読み、世の中の才能がありながら恵まれないもののために大泣きしたくなる」<sup>191</sup>という賞賛の辞が載せられている。

### 四、男女の友情の賛歌―「玉碎記」

次に、「文章表現は物哀しくて美しく、筆致は古雅であり、極めて貴重である」<sup>192</sup>と評された、施蟄存の「紅禪記」を見てみよう。冒頭の文言紅禪室詞の「題記」は『龔定盦佚詩代序』からの引用である。「紅禪記」は「玉碎記」、「執紼記」という二篇の単独の物語から成り立ち、ともに文言文と白話文とが相半ばする文体で、新時代に生きる女性の境遇をテーマとし、人間の心の動きや、心理の葛藤、衝突などの内的世界に注目しつつ、人生の様々な悲哀な情緒を表した。

「玉碎記」は男女間の友情を謳歌しながら病魔に襲われる女性の繊細な内面世界を描いている。作中の「余」、すなわち「佳官」は難病を患う幼馴染の佩児の世話をし、温かい言葉をかけていたため、彼女は「佳官」の友情に感動し、今際わの際に心の底からの誠意を込めて「日頃の思いを綴っていた」<sup>193</sup>冊子を「余」に渡し、「あなたは私の最大の親友である」<sup>194</sup>と告白する。彼女の死を見送った「余」は、二人の純潔な友情を永遠に心に留める。文末には「青萍

曰く、これは友情の物語であり、それゆえにここで二人の交際の経緯を記しておく」<sup>195</sup>と記され、男女の間の友情を謳っている。

本作は施蟄存の第一作目の女性をヒロインとする小説である。作中では、佩兒について「伊大忿曰」（彼女は大いに怒って言う）、「伊慘然曰」（彼女は悲しげな様子で言う）、「伊微笑梨渦乍展。目光流盼」（彼女は微笑して笑窪をチラッと見せ、流し眼を使っていた）などと、表情の変化を細く描写している。

佩兒は西洋医学の治療を拒んで自ら退院し、命が助かる可能性を捨てたことを悔いることはない。この点からも新旧過渡期の女性の強い自己主張や生き様がうかがえる。「玉碎記」の主人公の「素善傷心」（もともと感傷しやすい）な性格や、「薄暮」（夕暮れ）という時間設定<sup>196</sup>、女性の笑窪などディテールの描写は、後期の施蟄存小説の特色と通底している。例えば闘病中に、佳官の温かい友情に報いることができないと察した佩兒の内面の葛藤や、佳官が友人の招待と佩兒との約束の板挟みに苦悩する姿など、人間の心理的葛藤、衝突の描写に重点を置いているのである。

『娟子姑娘』（1929）に収録された「幻月」では、主人公薛曼仁が恋人程薇との恋愛をめぐって抱えた不安が、彼の夢の中で二人の家出という形で再現され、願望と現実の複雑な関係を示している。「二人は友人の助けで駆け落ちした」、「程薇が重体になり、残春の花のように世を去っていく」という夢には、薛曼仁の日頃の葛藤や潜在意識が現れている。「花」（1930）では、屋敷の主人に雇われ、花の栽培によって生活を営む阿玲一家の苦しい暮らしが描かれている。少年阿玲は、父が植えた花なのに、なぜ主人は自由に摘めて、自分は摘むとすぐ怒られるのか、という疑問を感じている。しかし屋敷の主人が涙を流している夢を見ることで、阿玲が主人に怯える日頃の生活で溜まったストレスが発散されるのであった。

また、「老畫師」（『礼拝六』161期、1922年5月）、「手套」（『江干集』1923に収録）、「聖誕華筵記」（『半月』第3巻第8号、1924年1月）などの作品では外国の人名・地名が頻出し、社交パーティーやクリスマスの食事会など異国情緒溢れる催しが描かれており、発表当時すでに欧化小説<sup>197</sup>の先駆と見なされていた。「伯叔之間」（『半月』第2巻第12号、1923）は、戦争によってもたれた肉親の失踪を子供の視点で語っており、施蟄存の「問題小説」<sup>198</sup>の試作とも読み取れる。「伯叔之間」は小明という子供の視点で地方の風習「叔接嫂」（兄が死んだ後、弟が義姉を妻にする風習）を描いており、家族の一員である同じ人物に対して、小明は「叔父」、小明の弟の近仁は「父」の呼称を使う。小明がその訳を「叔父」に尋ねると、もともと小明の父親は戦場で犠牲になったので、父親の弟である自分と小明の母が暮らし始め、小明の弟の近仁が生まれたということであった。ところが戦死したというのは誤伝で、数年後に小明の父親が生還し、「妻一人と夫二人」<sup>199</sup>という深刻な問題が生じるのである。この作品はモーパッサンの小説「帰来」<sup>200</sup>とテーマが共通している。当時、施はフランスの自然主義文学に興味があり、モーパッサンに憧れているとも語っている<sup>201</sup>。本作は死んだと思われていた夫が、弟と再婚して元の家で暮らしていた妻のところに帰ってくるというモーパッサン「帰来」にヒントを得たものであろう。

また、この小説は軍閥戦争にも触れており、深い問いかけには至らぬものの、同時代の作品群にはあまり見られない、戦争を題材にした小説になっている点は興味深い。施蟄存はある「問題」を取り上げる際、つねに人間の内面と結びつける傾向がある。しかし、その当時話題を集めていたテーマを取り扱う時でも、施蟄存は出来事の表面的な推移の描写に留まるのではなく、あくまでそのような結果に至るまでの人間の内面を可能な限り掘り起そうとしており、この点はほかの同時代作家の作品と大きく異なる。そのため、時には人間の心理を描出することを重



視するあまり、作品内の事実関係に矛盾が生じることさえ生じたのである<sup>202</sup>。

歴史の実話に基づいて再構成した小説「童妃紀」<sup>203</sup>は、先行の記述を精読し、自ら解釈を施したもので、彼の初期歴史小説における虚構意識の芽生えが明らかに見て取れる<sup>204</sup>。後に「石秀」、「李師師」などのような時代ものの小説を手掛けていることを踏まえると、彼は「童妃紀」を通して初めて史伝に基づく記述に取り組み、古典文献の搜集力や物語を再構成する力などを養ったと言えよう。「童妃紀」は巧みな文言文で書かれた。これは『半月』で発表したほかの文言小説と比べると、やや難解な文言である。また、施蛰存は周瘦鵬が『欧美名家短篇小说丛刻』<sup>205</sup>で用いた異なる文体の使い分けに影響された様子である<sup>206</sup>。社会性を富んだ題材にはやや硬い文言文を用いており、恋愛・婚姻の題材には分かりやすい文言文を用いているのである。恐らく施蛰存は周瘦鵬から啓発を受けて異なる文言文を使い分けていたと考えられよう<sup>207</sup>。

文言散文「山歌綴俊」<sup>208</sup>には、江南から広州にいたる地域の代表的な山歌 10 曲を紹介している。山歌とは、主に男女の恋愛や親子の愛情などをモチーフとする民謡である。そのなかで施蛰存は幼少時代に、浙江省紹興・諸暨あたり出身の女中に山歌を教わり、一緒に口ずさんだことがあると回想している<sup>209</sup>。その頃、周作人らが北京大学で「民歌研究会」を結成し、各地の民謡、山歌を収集し、「国故整理」を提唱していた。施蛰存はここで明確に「国故整理」に言及しているわけではないが、山歌が平民文学のなかに重要な位置を占めていると断わりながら、それにまつわるエピソードを書き上げたことから、民俗や民間文化への高い関心がうかがえよう。

## 第二節 第一小説集『江干集』の誕生

斎藤敏康に「幻の本」<sup>210</sup>と評された『江干集』（1923）は百冊しか印刷されず、所蔵元も長らく不明とされてきた。このような資料的制約のために、十分な解釈がなされないままに放置されており、管見の限り、『江干集』関係の論文は、黄徳志「関于施蛰存第一部小説集『江干集』及其他早期小説創作」<sup>211</sup>のみである。『江干集』の原本は上海図書館に蔵書されているのだが、貴重珍本史料として保護されているため、一般読者には開放されていない。しかし、2011 年に出版された『施蛰存全集』第一巻に、『江干集』の埋め草と後書き「創作餘墨」を除く 24 篇の短編小説が収録された。

施蛰存は鴛派刊行物に投稿し、『新潮』、『小説月報』などに掲載された葉聖陶や冰心的小説も愛読していたが<sup>212</sup>、『小説月報』、『創造週報』のレベルが余りにも高いという理由で、短篇白話小説集『江干集』を出版しようと計画したのである。当時、施蛰存の父親は松江履和靴下工場の工場長を勤めていた。同工場は当時江浙地域において杭州光華靴下工場に次ぐ規模を誇っており、その収入による裕福な家庭環境は施蛰存の文学活動を経済的に支えることができた。施蛰存は 1923 年 8 月、『江干集』<sup>213</sup>を「維娜糸文学会」叢書第一冊として出版している。

『江干集』に収録された 24 篇の小説は、「冷淡的心」、「洋油」、「上海来的客人」、「船場主」、「進城」、「父与母」、「礼拝堂内」、「手套」、「姊弟」、「梵村歌侶」、「火鐘的安放」、「郷人」、「兩日之出家」、「十三頁半」、「兩孩」、「路役」、「雪橇御人談」、「貧富与智愚」、「守節者」、「渡船」、「快樂之夜」、「屠税局長」、「猫頭鷹」、「孤独者」である。これに文言文による埋め草と後書き「創作餘墨」を付してもいる。

また、以下の 13 篇には小説末尾に執筆時期が記されている。

「上海来的客人」：8 月 11 日

「進城」：8月19日  
「父与母」：8月21日  
「郷人」：9月3日  
「両日之出家」：9月5日  
「十三頁半」：9月17日  
「両孩」：9月19日  
「路役」：10月3日  
「雪橇御人談」：10月17日  
「貧富与智愚」：11月3日  
「守節者」：11月14日  
「渡船」：12月22日  
「孤独者」：12年1月7日

『江干集』では当時の新文学作家たちが提唱していた新式の句読点を使わず、鴛派文学が慣用した「排圈」をも使わず、全編一律「。」のみを使用した<sup>214</sup>。小説の埋め草に主に林琴南訳の文言小説<sup>215</sup>の抜粋などを当てているほか、「『聊齋志異』からの抜粋もあり、説部の綺麗な表現もある」<sup>216</sup>と好評を得ていた。また、目録のページにイラストとして挿入された半裸の女性の絵は『小説月報』第14巻第5期の図版（次のページの挿絵を参照）と同一である。また、表紙絵や装丁からは鴛派的な伝統的な審美感がうかがえる一方、白話文の本文や描写の手法などは新文学派と大差が見られない。これは「新旧ともに異議なし」という当時の彼の独特な文学観の実践として見なしてもよいだろう。



『江干集』



『小説月報』第14巻第5期

施蛰存が自ら「常に心理の描写に力を入れていた」<sup>217</sup>と語っていたように、この24篇の小説では、多様な題材を用いて人間の内面心理への丹念な描写がなされている。例えば「洋油」では、外来文明の象徴とされる「洋油」が中国社会の末端であった農村に進入するときの状況を、村の農民と子供たちの反応に注目しながら、彼らが中国伝統文化の象徴とも言える「豆油」に執着し、「洋油」を拒む内面心理を描いている。一方、社会批判性の一面もある。「船場主」では小作業主が苦しい経営を維持しながら懸命に生きる様を描きながら、社会に存在

する様々な不条理を暴き出している。また、「梵村歌侶」、「救火鐘」などの作品では、社会の現実に目を向けて彼なりの問題意識を表明し、中国社会の将来像を真剣に考えている。しかし、大学一年生である作者には経験や見識など不足していたのであろう、これらの問題の本質を指摘するまでには至っていない。

施蛰存は新旧文学の隔たりを打破しようと試みており、『江干集』には読者層への配慮も読み取れる。他は白話文を使用した「手套」、「雪橇御人談」などの外国文学風の作品は新文学派の読者の好みに合わせたものであり、また埋め草に見られる林訳小説や文言文の批評などは、古い文学を好む読者を考慮したと思われる。また、後書き「創作餘墨」は、施蛰存の初期文学を考えるための格好の手掛かりとなる。以下に全文を示そう。

「私は別に小説家になろうとしてこの作品集を出版するわけではない。また、社会潮流を改変するという大きな職務を負いつつ創作しているわけでもない。単に自分の頭を冷静にし、私の一時期の考え方を一文字一文字述べるだけである。もしかしたら、読者は私の考え方にあまり理解を示さないかもしれないが、不満を言わないようにしていただきたい。このような考え方は私個人の考え方であることをどうか理解いただきたい。読者の考え方がどれも私と全く同じであることを期待しているわけではない。

読者の皆様には、この作品を、どうか深い洞察力でもって読んで下さるよう、心からお願い申し上げたい。どうか多くの点で、私が「旧を守っている」きらいがあると言わないで、さらに深いところまで読み取っていただけることを願っている。

私も旧派作家の一員にはなりたくないし、だからといって、新しい作家の一員になりたいわけでもない。当然ながら、新旧調和者にもなりたくない。ただ、自分の立場に立ち、私自身の意志に合致する筆を操り、私自身の小説を書いているだけである。」

原文：

我并不希望成為一小説家而做這一集。我也不敢擔負着移風整俗的大職務而做這些小說。我只是冷靜了我的頭腦。一字一字的發表我一時期的思想。或者讀者不以我的思想為然。也請千萬不要不滿意。請恕我這些思想都是我一己的思想。而我也并不希望讀者的思想都和我相同。

我小心翼翼地請求讀者。在看這一集時。請用一些精明的眼光。有許多地方千萬不要說我有守舊的氣味。我希望讀者更深的考察一下。

我也不願立在旧派作家中。我更不希望立在新作家中。我也不願做一個調和新旧者。我只是立在我自己的地位。操着合我自己意志的筆。做我自己的小説。

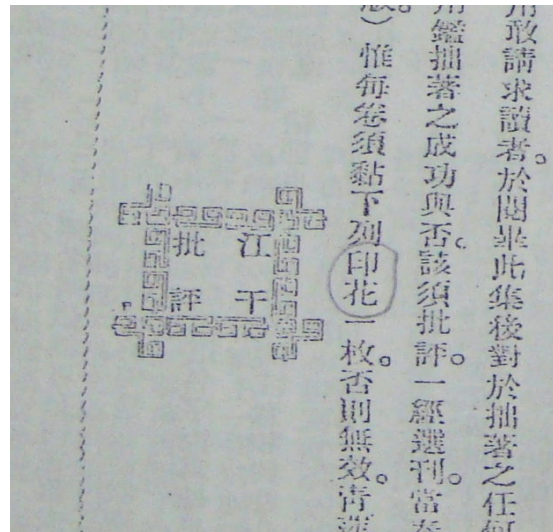
ここで記されている「私も旧派作家の一員にはなりたくないし、……」という発言は、新旧文学の間の垣根を取り払い、新旧文学を超越しようとする彼の姿勢と呼応している。この発言に対し、旬刊誌『微光』には「著作界の人たちみながこの言葉を繰り返し唱えるべきだ」<sup>218</sup>という賛同が寄せられてもいる。

『江干集』に関する評価には、各誌に掲載される宣伝広告の中の「まもなく出版され、きっと現在の文壇に大きなインパクトを与えるだろう」<sup>219</sup>、「文壇にまた実力ある作家が一人

増えるだろう」<sup>220</sup>などがあり、朱智先、徐碧波、金君珏、黄軫陶らが称賛の言葉を贈っているほか<sup>221</sup>、『世界小報』の編集者姚民哀も施蛰存の文才と人物への高い評価を語り、「畏盧（林紓一筆者注）の精微な要所をすでに捉えていることは私が最も評価する点であり、強引に新旧の境界を分けようとしただけではなく、両者に従いながら調整している」<sup>222</sup>と評している。

『江干集』の最後のページの「印花」（挿絵を参照）を切り抜き、批評文と同封して彼に送れば、二冊目の作品集『紅禪集』と交換できるという宣伝のフレーズも見られる。ここから、彼が小説集の宣伝、販促のための工夫や、自分の作品がどのように読者に受け入れられているか、改善すべき問題点は何なのかを優先的に考えようとしていたことがわかる。

施蛰存は『世界小報』の編集者の姚民哀に、自分の投稿文章を『江干集』に対する批評と交換しようとの条件を示したことがある<sup>223</sup>。それは、姚が集めてきた『江干集』批評の字数と同量の作品を送るというものである。ここからわかるのは、他の人が無条件に鴛派刊行物に作品を発表することを争って望んだのと対照的に、施蛰存は編集者に交換条件を出していたということである。ここから、施蛰存の批評への重視、ジャーナリストとしての見識、及び自作への自負がうかがえよう。



（『江干集』）

『江干集』は維娜絲文学会叢書第一種としてリストアップされている。以下、維娜絲文学会に関して紹介しよう。維娜絲は文字通りヴィーナス、美と愛の女神のことである<sup>220</sup>。『蘭友』第11期（1923年5月1日）、署名「蘭」の「文壇消息」に、維娜絲文学会の紹介や「維娜絲文学会簡章」が掲載されている。同会は、新旧の意見を打破して会員の内面的な思想と感情に応じて創作する中国新文学を確立すること、中国の旧文学を整理すること、世界文学を研究し紹介すること、という「三つの宗旨」<sup>221</sup>を打ち出した。この宗旨は『小説月報』第12巻第1号（1921年1月10日）に掲載された文学研究会の規則の第二条（「本会は世界文学を研究、紹介し、中国旧文学を整理し、新文学を創作することを趣旨とする」<sup>222</sup>）と似ており、施の起草した趣旨と重なる部分がある。しかも、宗旨の一での新文学の確立について、「新旧の意見を打破する」ことを前提として、より詳しい問題意識を取り上げている点は興味深い。「簡章」の末尾に加えられた、「青萍は新文学・旧文学ともに研究と心得がある」<sup>223</sup>という一文からは、新旧文学の共生を図りたいという施蛰存の願望が浮かび上がってくる。

施蛰存がエッセー「新旧我無成見」でも触れているように、維娜絲文学会は10数名のメンバ

一しか集められず、結局頓挫した。彼は中国文学を復興しようという壮大な志を抱いていたが、それは実らず、維娜絲文学会叢書の第二種『紅禪集』の出版も水泡に帰してしまった。同時期には魯迅の『呐喊』など新文学の作品集が続々と再版を重ねていたにも拘わらず、施蟄存の『江干集』はと言えば10数冊しか売れなかった。彼は待望する読者からの批評もあまり得られず、そして次第に新文学との距離を意識しつつあった。また、彼は自分が抱いた「我、新旧ともに異議なし」という主張が、当時の実際の読者の需要や文壇の状況からは大きくずれていたことにも気付いたと思われる。もし文壇に自らの位置を確保するなら、新か旧かその一つを選ばなければならないと施蟄存は自覚したのではあるまいか。これは、施蟄存が自ら提唱した「新旧ともに異議なし」という持論が成立しえないことを認識したことでもあるだろう。

### 第三節 家出の「感傷」者の系譜——施蟄存の恋愛小説について

本節では施蟄存の初期作品の中でも特に心理描写が多く含まれる恋愛小説を取り上げて分析する。家出のプロットや、主人公の感傷的な性格などに注目したい。

#### 一、死に急ぐ女性への「不忍」——「執紼記」

「執紼記」（『蘭友』、1923）は、「余」と自称する人物の文言体一人称の語りによる女学生の「相愛→悪玉による阻害→死亡」という物語で、女学生の悲恋を抒情的に描いている。杭州の名所紅籟山房で風景を満喫していた語り手の「余」は、康有為の題詩を目にし、思わず感傷的な気分になる。さらに「余」は葬列を目撃し、多くの女性が参列していることから死者が女性であると推測し、自ずと「若い女性＝人類の春である」、「世の若い女性＝春のときに死ぬべきではない」<sup>228</sup>と嘆き、葬列に混ざっていた友人の程藉から、死者が「余」の友人で中学時代には学生会で活躍していた新進気鋭の女学生郭瑤英であると聞かされる。「余」は程藉が語る郭の死に至るまでの出来事を描き、彼女の夭折を嘆き、情の深さはかえって人間に苦悩を与えると述べて、物語を終える。

程藉が「余」に語る出来事は以下の通りである。瑤英は中学校で姜鳳笙と恋人同士となり、上海の女子大学に進学した後も、手紙を通じて愛情を深めていた。やがて同窓同郷で姜という姓の女の子と知り合い、彼女の弟姜家麟を紹介される。家麟は瑤英に激しい恋心を抱き、執念深くあらゆる手段を尽くして、我がものにしようと画策する。やがて、家麟は姉の協力を得、瑤英の恋人姜鳳笙の情報を入手し、毘により彼女の親を騙し、瑤英との結婚にこぎつける。結婚式の夜、瑤英はようやく恋人に仮装した家麟に気づいて彼を罵倒し、すぐさま家麟の家を出、友人陸氏の家に一晩泊まる。翌日、軽率な婚約を厳しく責める手紙を親に送って学校に戻り、家麟が鳳笙の手紙を偽造したことを知る。家麟から賄賂を受けた校務員を詰問したところ、校務員から鳳笙の死亡通知書を渡され、ショックの余り意識不明に陥ったのち命を絶つ。

「友人の藉が私に述べたことは以上の通りである」<sup>229</sup>という「余」の一句の後、友人は物語から消え去り、語り手「余」は葬列の場面に戻る。瑤英の不幸な運命への同情により、耐えがたい悲哀の心情と冒頭の「若い女性＝春」への賛美とは対照的な「不忍」（忍びない）の気分が醸し出され、前半部と後半部とは著しいコントラストを構成しており、これが小説の副題「不忍詞本事」<sup>230</sup>の由来であると言えよう。

本作では棺を引く葬送場面の目撃を契機に、「余」が若い「女性」の「死」を慨嘆する言葉を連ねた後、友人の回想談により物語の時間は過去に遡るが、その友人の存在自体はやがて後景化されて、全体的には全知全能の語り手による記述になっている<sup>231</sup>。また、友人籍が三角関係の顛末を語る場面においても、「同性であれば親友になりやすい」、「本来軽薄な男である」<sup>232</sup>など、

物語のなかに「余」自身の見方が挿入されて、「余」は瑤英に同情して彼女の心理に踏み込んだ上で、友人藉からの伝聞を再加工していることもうかがえよう。瑤英が新婚の寝室から逃げ出し「直ちに真夜中に車を呼んでクラスメートの陸氏の家を訪ね、その経緯を訴え」<sup>233</sup>、その後に陸氏がこの話を藉に伝え、藉は再びその事件を「ありのまま」に「余」に語って聞かせるという三重の複雑な語りの構造は興味深い。

また、悪玉の家麟の登場によって物語は一層起伏に富むようになっている。例えば、家麟の姉が弟に瑤英には好きな人がいると告げると、姉は「蝦蟇」と揶揄するにもかかわらず、家麟は執念を燃やし姉に協力を強要する。同じ姜という姓であることを利用して、鳳笙の筆跡を真似し、校務員を買収する。鳳笙の顔写真を入手し、仲人を雇って瑤英の親に縁談を持ちかけるなどの計略は、巧みに家麟の悪玉ぶりを際立たせている。一方、「余」には「小人挑発」の役の家麟を厳しく責める様子が見られず、「余」は瑤英の悲恋の経緯を聞いた後も、「旧」婚姻制度への非難を語ることなく、「世の中に感情が無ければ、男女の間の嫉妬もなくなるだろう」<sup>234</sup>という感慨を吐露するのみで、自らの感傷の世界に閉じ込められたまま小説を締めくくっている。

この作品は新旧交替期の社会における結納や写真によるお見合い、仲人口の登場など、半媒酌結婚の様子を垣間見せている。瑤英の親は家麟に騙されて媒酌婚姻を進めてしまったとはいうものの、中学時代の瑤英と鳳笙との自由恋愛を容認し、彼女の結婚の意志を尊重するなど、自由恋愛結婚に対し比較的開明的である。また、施は文言小説の結末に現れる作者の説教や道徳的批判などといった慣用的手法を避けており、価値判断を下してはいない。語り手の「余」に瑤英の悲劇から一步距離を置かせ、自身の起伏の多い感情を情景描写に託させるなど、抒情的な風景描写で始まる前半部と、事件の全容を語り終えたのちに深い感慨に沈む後半部とに統一感を与えている。さらに、「女郎の情死」への憐れみを一層強めるため、「嗟乎」という感嘆詞を三回も使うことで、悲恋、哀愁など感傷的情緒を醸し出している。「余」自身が自らの性格を「もとより感傷的な心の持ち主」<sup>235</sup>と語っており、このような気質の男性が、後期施蟄存小説の主要人物の系譜を構成してゆくのである。

## 二、「棄家」の行方―「綵勝紀」

「綵勝紀」（『半月』第3巻第10期、1924年2月）では、語り手の「余」により友人懷玲と従妹雲玲との恋の芽生えから破滅に至るまでの経緯が描かれ、プロットは「相愛→媒酌結婚による阻害→駆け落ち→駆け落ちの失敗→恋の破滅→再び恋の誓い」と展開する。「余」はこの恋愛物語の終盤までは登場せず、傍観者の語り手として時間軸に沿って男女二人の悲恋の経緯を語るのみである。

小説の粗筋は以下の通りである。懷玲は親戚の家で従妹の雲玲と初めて出会い、ちょっとした遊びで雲玲から綵勝<sup>236</sup>を勝ち取ると、「物によって想いが湧き、想いが続いて痴情となり、執念から愛が生じ」<sup>237</sup>、雲玲に恋をする。後日、二人は再会し、満開の紅梅の下でお互いの想いを伝え合う。しかし、懷玲の父親がほかの女性との縁談を持ち出すと、彼は父親に反抗する勇気がなく、まして雲玲への恋を口にする勇気もない。やがて二人は人目を盗んでこっそり会い、お互いに心境を確かめ合ったうえで「棄家」、すなわち駆け落ちを計画するものの失敗し、雲玲一家は引越し、懷玲は親が許婚と決めた女性と結婚する羽目になる。だが懷玲は結婚式の最中に逃げ出してしまふ。ここで物語中に「余」が入り込み、懷玲はその「余」の家に住み込み、毎日涙にくれて「綵勝」を握りしめ、彼女をどうしても探し出すと誓うのであった。

本作は半文言半白話の文体で、愛のあかしとしての「綵勝」、いとお同士の恋愛などは、沈三白の「記憶」の物語『浮生六記』の「閨房記樂」冒頭の芸娘との出会いを想起させる。紅梅の木



の下での愛の告白、逆らえぬ媒酌結婚などの小道具や筋立ては古典の恋愛物語に似ている。語り手「余」は物語の枠外にあり、頻繁に意見を挿入することにより、男女の間の「愛の芽生え」を賛美し、二人の愛の不幸な結末の根本的原因を分析しているのである。懷玲と雲玲が恋心を芽生えさせ、お互いに惹かれていき、恋の楽しさと悲しみを味わうことを、「余」は自らの体験でもあるかのようにリアルに描出している。

懷玲は頑固な父親の権威に怯え、自らの孝行息子のイメージを損なうことを何よりも恐れていた。しかし、もしこのとき直ちに父親に雲玲が好きだと告白したら、二人は円満に結ばれたことであろうと「余」は分析してもいる<sup>238</sup>。懷玲は根拠もなく万が一の転機を期待し、ずるずると許婚を断るチャンスを逃しており、「余」は「一室に蟄居し、ハラハラと悲恋の涙を流し、死して雲玲に報じると誓う」<sup>239</sup>と懷玲の優柔不断な性格を浮き彫りにしている。二人の別れの原因を懷玲自身の性格上の短所に求めた点が特徴と言えよう<sup>240</sup>。結末に付された「青蘋識」は、「世の中の親たちよ、独断しないで子供の恋愛、結婚の意志を尊重」<sup>241</sup>しようと、親の世代に対し自由恋愛結婚への理解を促すというメッセージを真意を込めて語っている。このように結末部で作者の創作意図や主旨を述べるのは、鴛派小説の典型的なスタイルでもある。

### 三、愛の復活——「冷淡的心」

「冷淡的心」は『江干集』に巻頭作として収録された小説である。「自由恋愛への憧れ→妥協して媒酌結婚→妻への冷淡な対応→愛情の発生」という展開である。『世界小報』において「全篇に画家の白描の技法を使用し、人情の描写は極めてよい」<sup>242</sup>と評されている。

主人公陶雯は読書による観念的思考を好み现实生活に不満を感じる青年で、漠然と「個人」としての意識に目覚め自由恋愛による結婚を望んでいたが、父親が縁談を持ち出すと、彼は自分の意志に反し承諾してしまう。彼は自由恋愛による結婚ではないために自分は必ず不幸になるであろうと思い込み、結婚後も妻に対し冷淡な態度を取って口を開こうとしない。しかし、一年後に赤ん坊が誕生し、その無邪気に微笑む顔を見た陶雯は、冷淡な感情を捨て、父親としての愛情を抱き始め、思わず妻と抱き合うに至る。

同作は「彼は結婚する前、中学校で勉強した頃には極めて活発な青年であった」<sup>243</sup>と語り始めて、結婚後の主人公の性格の変化を暗示している。読書によって新思想に触れた陶雯は「新青年」になることを目指していたが、周囲にはお互いに支え合う仲間がおらず、自由で平等な男女交際の条件も整っていない。父親から縁談を聞かされたとき、親不孝となるのを恐れて本心を言い出せないのは、自由恋愛結婚を望んではいても、如何にその第一歩を踏み出すべきかがわからなかったからである。周囲の環境や伝統的風習など不可避免的に家父長制社会との対峙を迫られる当時の青年にとって、陶雯が直面するような「理想」と「現実」との隔たりは極めて切実なものである。

一方、陶雯の婚姻観は極めて教条的、観念的であるとも言える。彼は観念的な読書体験により、自由恋愛を経ての結婚でなければ、婚姻は必ずや不幸になると思い込んでいた<sup>244</sup>。孝行息子の彼は父親との衝突を避けるばかりで、急進的な「棄家」のような行動を取らず、次第に現実的な婚姻生活に順応し、後には妻との間にも愛情が生じたのである。ここから陶雯の持っている「現実的」、「打算的」な思考がうかがえよう。陶雯の物語を一人称の「我」によって語ると同時に、隠れた語り手が頻繁に現れ、批判的な視点から自らの意見を一方的に述べている。

「人間の勇氣は簡単には生まれない。だから我々も陶雯を責めることはできない」<sup>245</sup>。

「もしほかの少年が陶雯の立場に身を置いたならば、その過半数はきっと厭世の道を進むことだろうと私は考える。」<sup>246</sup>

「読者は旧式な女性の中にもいい人が大勢いることを知っておくべきである。彼女たちは自分のことに対しては余り希望を持たず、賢母良妻の地位に到ることしか知らないのだ。しかし、もし全部の女性たちが賢母良妻になれるのであれば、それもまた社会にとって幸福であろう。残念なのは、現在世の中の一知半解の女性が旧式な姉妹たちを全力で攻撃し、彼女たちが男性の力に屈服し、男性のおもちゃになっており、そのため学問のある夫とは釣り合いがとれないのだと言っていることだ。これはあまりに行き過ぎではないか。……だから、私は陶雯の妻は真の良妻であると言っているのだ」<sup>247</sup>。

このように一人称の「我」が現れ、語り手と合体し、陶雯の妻を良妻として評価し、直接物語の進展に関与していく。ここでの「我」と、伝統白話小説に頻出する「看官」が下す評には類似する部分が見られる。施蟄存は旧式女性であり良妻賢母でもある陶雯の妻への弁護を急ぐあまり、自らの考えを読者に伝えようとして、隠れた語り手に替わって唐突に一人称の「我」を登場させ、自説を述べさせたのであろう<sup>248</sup>。このように伝統女子への称賛と一知半解な新女性への批判を語った上で、新女性は当時の中国の国情に不相応であり、社会に対しても必ずしも良い影響を与えないだろうと「我」は述べている。作者は理想的な妻像をめぐり、新/旧二つのタイプの女性像のうち後者を評価することによって、自らの文化的選択・社会的理想を語っていると言えよう<sup>249</sup>。

また、施蟄存は「新婦女之敵」（1922）において「解放され過ぎた」女性に難色を示し、自由恋愛を口にしながら、その実態は単に放蕩な生活を送っている現象を批判した。それは彼が良妻賢母をたたえ、社会が良妻賢母を批判することに異議を唱えた由縁であろう。言い換えれば、良妻賢母は施蟄存なりの理想的な女性像とも言えよう。陳延潁がすでに指摘しているように、当時新女性をめぐっては逸楽を追求することしか知らない女子学生への批判が様々な作品に現れており、これによって新女性は金持ちで暇のある贅沢な消費者だという印象を一般読者はさらに強く持つこととなった<sup>250</sup>。

民国初期の李涵秋（1873～1923）らの鴛派の社会小説などには「新女子」への風刺や、過剰な解放を追求する女たちへの不満がよく見られることから、この世代の作家たちが、「新女子は必ず悪者だ」<sup>251</sup>という固定観念を持っていたことがうかがえる。また、施蟄存らポスト科挙世代の多くの青年たちにとって、婚姻の観念における最も大きな変化とは婚姻の自由の獲得であった。しかし、男性側は、情熱的かつ社交的な女性よりは、むしろ控え目かつ従順で家事に通じた良妻賢母型の女性のほうを相変わらず理想としていたのである<sup>252</sup>。

施蟄存はこの小説で鴛派的な価値観をある程度取り入れつつ、日々の生活の積み重ねによって感情を深めていくことを重視している<sup>253</sup>。このような良妻賢母型の女性への称賛は新文学作家たちが称揚する新女性像と一線を画しており、彼を含む当時の多くの青年たちの理想的な女性像を反映しているだろう。数年後、施は同じく既婚男性の婚姻を題材にした「宏智法師の出家」（『上元灯』に収録、1929）でも、主人公「宏智」は出家前に良妻賢母型の伝統的な女性と才女型のモダン女性との両極の間のせめぎあい苦しむが、これは「冷淡的心」のテーマを引き継いでいると言えるであろう。

#### 四、自由恋愛の不幸——「梵村歌侶」

「梵村歌侶」（『江干集』に収録、1923）では、語り手の「我」が一年前に農村の簡易茶館で出会った男女二人の身の上を物語る。まず、冒頭で梵村という杭州にある辺鄙な農村の風景を描き、次の段落から前年の二月に「我」が数人の友人と共に同村の茶館で目撃したことを語り出す。「我」たちは「真っ黒なお手拭き」、「粗末な茶具」、「粗悪な茶葉」などを一瞬不快に感じたが、「精神的にはかえって一種異様な快感を覚えた」<sup>254</sup>という。また「弁髪を結う村人」や、「数



珠をつまぐる老婦人」などの姿を目にしたとき、「我」は思わず滑稽にすら感じる。このような農村の茶館という前近代的空間の描写に続けて、民間芸人の男女二人組が登場し、客中の「色情狂」たちから冷やかな視線を浴びながら確かな芸をみせる。騒がしい茶館の中で、貧しい村人に芸を披露する二人の姿に好奇心を覚えた「我」は、男性から彼ら二人が駆け落ちし、各地を流浪する生活を送って村巡りの芸人となるまでの経緯を聞き出し、彼らが苦境から抜け出せるように援助せよと国家と社会とに呼びかけるのであった。

本作には茶館の情景描写を始め、芸人の登場、「色情狂」の客に対する非難などすべての出来事が「我」の視点から時間軸に沿って語られている。「以下に記載するのは二胡を弾く人の話である」<sup>255</sup>との語り手の言葉の後には、カギ括弧で括られた長文の男性の話が続き、男女二人が出会って恋に落ちたものの、家族の妨害に遭い駆け落ちをするまでの事情が、事細かに叙述される。

「相愛→家族による阻害→駆け落ち→同棲生活→不幸」という展開である。最後に、聞き手の「我」が再び彼に問いを投げかけ、「彼が話し終えた後、私は直ちに多くの思いが頭に湧いてきたように感じたが、私はこれらの多くの思いを細やかに摘出することができない」<sup>256</sup>と述べるうちに、二人の芸人は物語から消えてしまう。

「我」が聞き出した男性の語りによれば、この男女二人は中学生のときに友人を通じて知り合い、まもなくこっそり婚約するが、そのときの彼は頑固な父親の反対を全く予想していなかった。その後、父親から縁談を持ち出されると、彼は直ちに縁談を拒否する勇気もなく、また好きな女性とすでに婚約したことを父親に告げる勇気もない。まもなく、二人の交際はお互いの親に露見してしまい、二人は宗族の決まりに従わず愛情を守るため駆け落ちする。家庭との縁を切りさえすれば永遠に精神的崇高さを保てると思いきや、実際のところ、彼らはその後もさんざん家庭からの圧迫を受け続け、安定した住居すら確保できないまでに追いつめられる。「もしあのとき私たちが互いに単なる友達に留まっていたならば、現在に至っても精神的にすこし不満を感じるにしても、物質的享樂の面において、私たちは決して今のように窮乏することはないでしょう」<sup>257</sup>と嘆く。二人は当初中学生だったため、思考も未熟で、しっかりした価値判断基準を持たず、衝動的に駆け落ちしてしまったのであり、後に若い時の現実認識の甘さを後悔するに至った、と男性が語る場面はとてもリアルである。

「梵村歌侶」は自由恋愛により不幸になった中学生を描出し<sup>258</sup>、当時の宗族による冷酷な締め付け、未熟な雇用制度及び婚姻制度、駆け落ち男女を蔑む世間の目などの多様な社会問題に触れており、「執紼記」、「綵勝紀」のような恋愛悲劇に対する感傷的語り終始する作品と比べて、社会的視野においても広がりがある。また「我」の社会や心理への洞察は他作と同様に鋭く、施蟄存は男女二人に悲劇をもたらした原因を宗族制度に求め、二人が明るい将来を迎えられるように、国家の指導者たちに改革を呼びかけている。

この結末の呼びかけに対し、皮相的社会批判であるという不満の声が上がったが<sup>259</sup>、このような呼びかけは同時期の鴛派作家たちが描いていた悲劇一辺倒の語りとは一線を画す一方、魯迅の「傷逝」（1925）のような新文学派作家たちの描いていた「駆け落ち」とも異なっている。『新青年』1918年6月「イプセン特集」号が「人形の家」の翻訳を掲載して以来、1923年12月26日の魯迅の講演「ノラは家出してからどうなかったか」も指摘するように、五四期の中国では自由恋愛による結婚と男女平等の核家族形成が大きなテーマであった。これに対する施蟄存なりの回答が、「改革への呼び掛け」であったと言えよう。

以上で論じた四篇の小説は、「回想」的叙述様式、自由恋愛・婚姻をめぐる「父権」への屈従、「棄家」つまり駆け落ちというプロットなどを共有している。特に息子の「父権」への怯えと父への反抗としての「棄家」がこの施蟄存小説四作の重要なテーマとなっており、常に家庭からの

プレッシャーを感じつつ、自由恋愛の理想に憧れ、「理想」と「現実」の間を行き来する新旧交替期における青年男性像は興味深い。「ある作家の作品の中に頻繁にある特定なテーマが出現したり、いつもある口ぶりを使うとしたら、それは彼の個人的生活の中の何らかの原因から生じたに違いない」<sup>260</sup>と、アルバート・モーデル (Albert Mordell, 1885～1953) が述べているように、四作品で繰り返し描かれる自由恋愛結婚と父権との様々な矛盾は、施蟄存やその同時代の青年たちの深刻な問題であったのであろう。

各作の主人公が抑圧された感情を発散する方法は「相手を罵倒する」、「親を責める手紙を送る」、「こっそり涙を流す」、「表情に出さない冷たい態度」などと異なっている一方で、優柔不断、控えめな性格、親孝行と恋人の間での苦悩などの要素を主人公たちは共有している<sup>261</sup>。四作に共通して見られるのは、当時の若者にとって恋愛とはいわば父権に対する自主権獲得の行為であり、自由恋愛が一種の強迫観念となっていたことがうかがえよう。また、いずれも叙述のスタイルにおいて一人称の語りを採用しているが、「余」、「我」は傍観者、伝聞の聞き役などの役割に徹している。これは清末民初の翻訳小説で一般的だった一人称体構造を継承したためであろう<sup>262</sup>。施蟄存は「回想」と「写生」の使い分けなどによってこのような叙述スタイルを突破しようと試みて、叙述の視点のコントロールという課題に直面していたのである。

このような初期作品による試作過程を基礎にして、施蟄存は後期作品において男性主人公の内面や潜在意識をさらに綿密に分析し、人間の不確実な心理や近代都市における不安を描く独自の文学的世界の構築に至ったものと筆者は考えている。

### 第三章 施蟄存の社団活動をめぐって——蘭社から水沫社まで

1923年から施蟄存は杭州蘭社の中心メンバーとして活躍した。同社には後に施蟄存と共に30年代の上海文壇で文芸活動を行った。戴望舒、杜衡も加入しており、この三人は「文士三劍客」と称される。施蟄存は作家、編集者、翻訳家を兼ねながら社団でのリーダーシップを発揮し、「施老大」と称されたこともある。以下、五四時期の新旧文学交替期における施蟄存の位置づけを定めるために、『蘭友』の発刊・編集などの資料を発掘・整理して、彼の初期文学活動を考察する。ここでは筆者が新しく蒐集した一次資料を中心に、施蟄存が鴛派において強力なリーダーシップを発揮した後に新文学派へと「転進」し、さらに水沫社など新興社団活動へと移行していく過程を鳥瞰したい<sup>263</sup>。すなわち、この章は文芸誌の編集・出版を主な活動の基盤とした施蟄存とその仲間との社団活動の変遷を、施自身の外国文学の紹介・翻訳活動の変移なども視野に入れつつ描き出そうとするものである。

#### 第一節 「郷関」杭州での文学活動——蘭社時期 (1923)

金理が『從蘭社到「現代」——以施蟄存、戴望舒、杜衡及劉呐鷗為核心的社団研究』（東方出版中心、2008）で、「蘭社はあまり影響力がない」と記したのに対し、呉福輝は『中国現代文学發展史』（北京大学出版社、2010）で蘭社が「五四主要文学社団表」の文学地図の一角を占めていることを指摘し、蘭社の文学史的意義を重視した。本節では蘭社結成の過程を、当時の各種メディアによる報道などを参照しつつ考察したい。

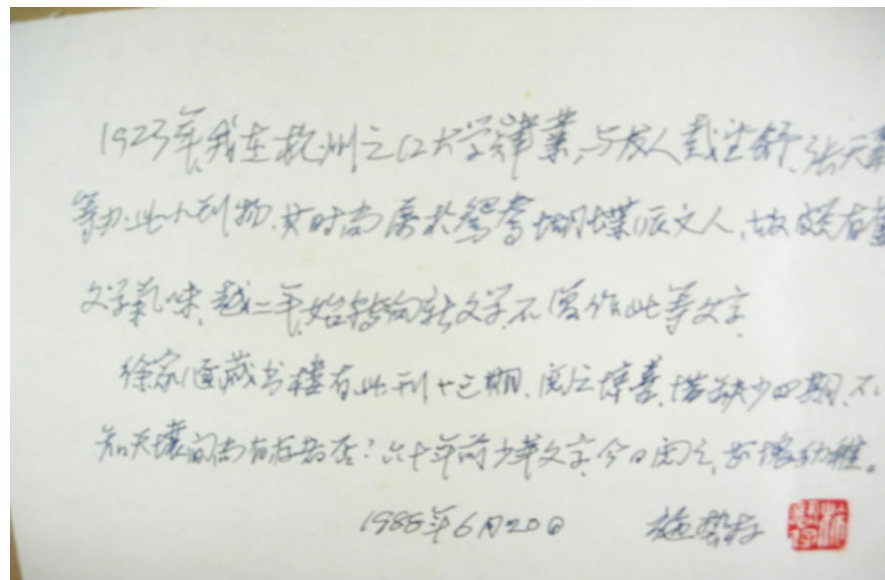
1922年頃、杭州の宗文中学で学ぶ戴望舒が蘭社を立ち上げると、周辺の学校で学ぶ李伊涼、馬秋駘（馬鵬魂）、張無諍（張天翼）、葉為耽（葉秋原）、戴滌源（杜衡）、孫昆泉（孫弋紅）らの文学愛好者が創設メンバーに加わった。間もなく同年秋に杭州の之江大学に入学した施蟄存も加入し、文学に最も造詣が深い中心メンバーとなる。第一章でも述べたように、蘭社などの江南地方の文芸社団には、鴛派の青社や星社に倣って結成したケースが多々ある。蘭社のメンバー

は『礼拝六』、『半月』などで頻繁に作品を発表し、次第に自らの文芸誌を作ろうという意欲を高めていった。

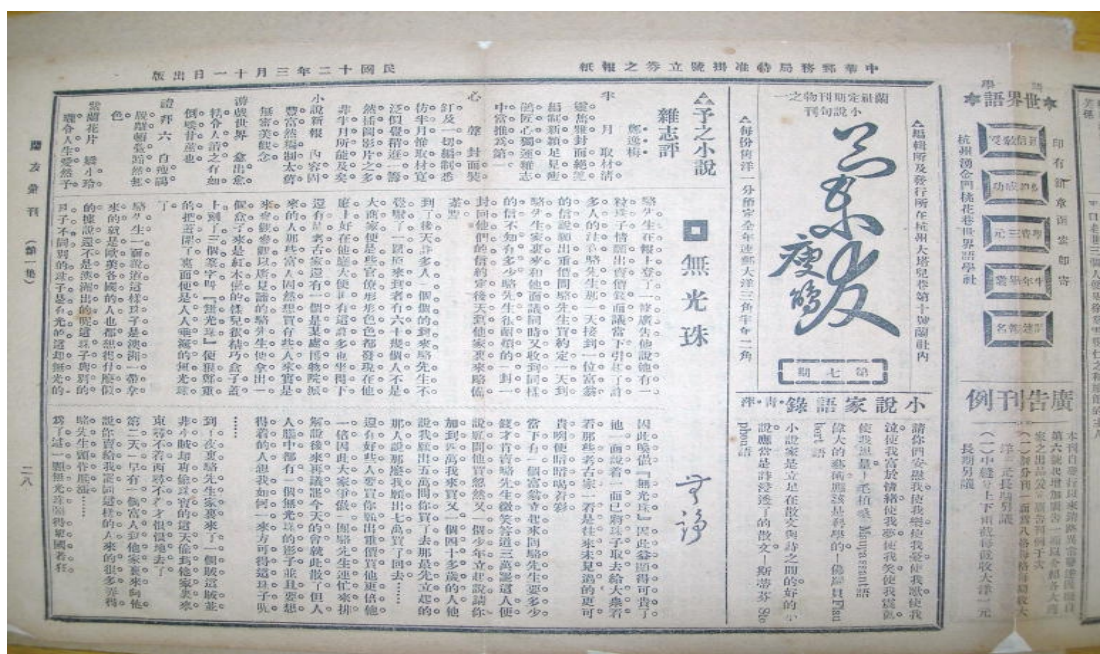
当時の杭州では既に印刷出版業が発達しており、小規模の同人誌の出版は難しいことではなく、整備された郵便業務により全国への雑誌郵送も可能であった。そして、1923年元旦、蘭社の同人小説旬刊誌「蘭友彙刊第一集」『蘭友』が創刊された。編集所兼発行所は当初孫弋紅の実家である清吟巷七号であったが、第7号からは戴望舒の実家である大塔児巷十号に変更された。『蘭友』は杭州宏文印刷所によって印刷され、「中華郵務局特準掛号立券之新聞」<sup>264</sup>として各地の販売代理所に送られた。

『蘭友』は、80年代末、当時、上海徐家匯藏書樓（現在の上海図書館）に勤めていた張偉によって発見された。1987年、張は『文芸報』に「蹣跚在新旧文学之間」を発表し、施蛰存と蘭社、『蘭友』との関わりを紹介した<sup>265</sup>。翌年、上海図書館が「新聞や雑誌からの名家たちの題辞、序跋の収集キャンペーン」に応じて、施蛰存を訪ね、『蘭友』に対して以下の題辞を得ていた。

「1923年、私は杭州之江大学に在学している頃、友人の戴望舒、張天翼らとこの小さな刊行物を創刊した。当時、私は鴛鴦蝴蝶派文人の一員だったので、旧文学の要素もとて多かった。約二年後、新文学の方に転身したので、そのような創作を中止した。徐家匯藏書樓に13期分が所蔵されている。昔の刊行物を見ると、驚き、喜びを感じる。残念なことに4期分が欠けている。この世で誰かが保存してはいないだろうか。60年前の青年時代の習作を今日再読すると、本当に幼稚なものだと恥じ入るばかりである。」<sup>266</sup>（下図参照）



『蘭友』の誌名は每期鴛派作家たちが揮毫しており、読者に新鮮味を感じさせたであろう。『蘭友』は同人作品のほか、鴛派著名作家の徐卓呆の滑稽小説「貞操租賃費的欠據」、鄭逸梅のエッセー「予之小説雑誌評」、姚民哀のエッセー「文人百媚」などを作者の自筆サイン入りで掲載している。これは鴛派作家の人気を借り、人目を惹き付けるために取った宣伝策とも考えられる。



（『蘭友』第7期巻頭写真）

同誌は他の社団同人誌の広告も掲載し、作品を交換して掲載し合うなど江南各地の文芸社団と交流を深め、江南地域間の緊密な文学活動ネットワークを作り上げていったため、その名声は遠くまで響きわたるようになった。例えば、『世界小報』第146号（1923年7月12日）では、謝鄂常が「蘭友。蘭友旬刊。小説を主体とする。編集者はすべて小説界で活躍中の者である。彼らの作品は早くから上海で一世を風靡していた。同誌の編集方法と内容は浙江のトップと言えよう」<sup>267</sup>と称賛している。また、杭州緑社の同人誌『緑痕』では、阿猫（鐘韻玉）の「談談杭州的小報」が、「蘭友が小報の中の覇者であり、蘭社メンバーの心血の結晶物であることは皆さんに知られており、その中のいくつかの作品はとても有名である」<sup>268</sup>と記している。

当時、地方文芸旬刊誌は500部前後の売上げが普通であったが、『蘭友』はすでに2万部を超えていたという<sup>269</sup>。そのような良好な売り上げをみせていた『蘭友』の編集は主に戴望舒と施蛰存が担当していた。誌面が上下二段に分かれ、上段には批評や旧体詩、文壇消息などが大半であり、中・下段には主に短篇小説を掲載した。施蛰存は同誌7、8期の誌名欄直下という最も読者の注目を引く場所に、次のような西洋の「小説家語録」を紹介している。

「私を慰め、楽しませ、私を悩ませ、私を歌わせ、私を泣かせ、私を情緒豊かにさせ、私に夢を見させ、私を笑わせ、私に衝撃を与え、私に考えさせてくれ。—モーパッサン Maupassant の言葉」、

「偉大な芸術は科学的であるべきだ。—フローベール Flaubert の言葉」、

「小説家は散文と詩の間に立脚しているものである。優れた小説は詩の精神が溢れた散文であるべきである。—スティーヴン Stephen の言葉」、

「人は、芸術を愛さないなら別として、もし愛するなら、ほかのものよりもっと大事に愛すべきである。芸術作品が観客を左右するのであり、観客は芸術作品を左右することはできない。—ワイルド Wilde の言葉」、

「文学には人生を描くべきである。—バーゾフ Ivan Vazov の言葉」。

原文：

請你們安慰我。使我樂。使我憂。使我歌。使我泣。使我富於情緒。使我夢。使我笑。使我震動。使我思量。—毛柏桑 Maupassant 語。

偉大的藝術應該是科学的。—佛羅貝 Flaubert 語

小説家は立足在散文與詩之間的。好的小説应当是詩浸透了的散文。—斯蒂芬 Stephen 語

人不愛藝術則已。若愛之則應該把他愛得比一切更重要。藝術作品左右看客。看客不能左右藝術作品。—王爾德 Wilde 語

文学是應該描写人生的。—跋佐夫 Ivan Vazov 語

モーパッサンやフローベールについては説明の必要はあるまいが、イワン・ヴァーゾフは魯迅に「ブルガリア国民文学の父」と称された作家であり<sup>270</sup>、「小説家は散文と詩の間に立脚する」、「人生を描く文学」などといった言葉から施蟄存の当時の文学観の一端が垣間見える。

「私を慰め、私を楽しませ」、「人生を描くべき」などの名句は言わば鴛派と新文学派両者の文学理念を合体させたものであり、『蘭友』の編集方針でもあったと考えられる。その文学的な趣向は『蘭友』の小説の掲載基準としても読み取れるほか、施の世界文学に対する鑑賞眼及び感受性をも表しているだろう。

現存する 13 期までの『蘭友』<sup>271</sup>は、文言文の小説と旧体詩、及び鴛派作家の作品を載せているため、一見従来の鴛派雑誌のような印象を与えるが、実際の作品には写実的な筆致、描写手法の重視、外国文学の紹介などが見られ、新文学派たちが批判した鴛派的な娯楽、遊戯的な趣向に偏ることはなく、全体的な芸術水準も決して低いものではない。例えば、滌源（杜衡）の「末路」という作品は、かつて軍人であったが戦争で両手両足を失い乞食になってしまった人の悲惨な境遇を描いており、戦争への批判や、人道的な同情の気持ちが現れている。董異観の独幕劇「光陰」、朱天石の理想劇「教訓」などは、軽妙な会話の応酬など斬新なスタイルの試みを行っている。

また、江紅蕉の「做言情小説」、程小青の「偵探小説和科学」、錢唐邨の「新旧小説的我見」、黄軫陶の「小説雑談」、戴望舒の「描写之練習」、朱煥祖の「談談小説題目」などが、創作をめぐって真剣な議論を交わした。特に胡瘦鶴は「中国現代小説的趣向」において小説の文体について述べ、語体文が次第に文言の代わりとなってきたと指摘し、当面の社会問題を題材として様々な問題に着目する写実的な小説が増え始めたという現状を指摘している<sup>272</sup>。『蘭友』の編集者は読者の多様な興味を考慮し、文言文と語体文両方を採用し、『蘭友』を通じて新たな文学像をうちたて、多くの読者の文学的関心を刺激し、満足させる新しいメディアを提供せんとしていたと言えよう。こうして上海周辺の中小都市の文学青年にとって、『蘭友』らの若手新鋭作者は憧れの的でもあった<sup>273</sup>。

『蘭友』第 10 期の「文壇消息」には、蘭社同人の「蘭社叢書」の出版案内が掲載されている。他誌には施蟄存の『紅禪集』、『中国小説史』を含む「蘭社叢書」が上海大東書局から出版されるという記事も載っている<sup>274</sup>。同叢書の全 8 種の著書のうち、施蟄存の作品集『紅禪集』、『中国小説史』が四分の一を占めており、施蟄存の文学創作に対する意欲の旺盛さがうかがえる。このときわずか 17、8 歳の施蟄存がすでに『中国小説史』を執筆する構想を温めていたわけであり、その気概には見るべきものがある。

『蘭友』は第 17 期まで発行され、1923 年 8 月 12 日には後継誌『芳蘭』が創刊された<sup>275</sup>。同人



誌発刊ブームの折から頻繁に誌名が変更されているが、それは宣伝戦略として練られたものであろう。恐らく蘭社も同人誌の多様性を重視し、さらに新鮮味を帯びた『芳蘭』を企画したのであろう。『芳蘭』は同人の作風の色彩を一層強調するため、メンバーの名前を冠した特集号を打ち出した。ちなみに、第1期は「施蟄存」（施蟄存の筆名）特集号である<sup>276</sup>。

ちなみに、施蟄存は『芳蘭』で外国作家のラブレターの翻訳を発表したが、後に景吉森も同じく翻訳作業を行っていたことを知り、『最小』に直訳型の翻訳方法について景と討論する一文を掲載した。

施蟄存は蘭社で活躍しながら、『婦女旬刊』（杭州・張儷娟<sup>277</sup>）、『虎林』、『癸亥』（蘇州・黃軫陶）、『波光』（蘇州・徐碧波）、『微光』（上海・姚賡夔）、『筆鐸』（蘇州・金君珏）などの文芸誌の執筆者も兼ねていた。1923年9月上旬頃、施蟄存、戴望舒らは杭州を離れたため、蘭社での文学活動を停止した。蘭社の運営は戴望舒の親戚戴蝶園が一時的に引き継ぎ、後に馬鵬魂に編集部幹事を委任したという。後に、杭州で結成された緑社は『蘭友』を真似て、『緑痕』、『緑玉』を発刊した<sup>278</sup>。

また、施蟄存と王受生、金君珏、朱智先、王天恨、黃軫陶、馬鵬魂、戴夢鷗、李伊涼、孫弋紅、戴滌源、錢唐邨、徐碧波、姚賡夔、範昆仲、朱天石、蔣吟秋、沈家驤らが卡党を結成し、お互いに切磋琢磨して文学活動を行っていた。卡党<sup>279</sup>は、施蟄存らの同世代の作家たちの結社であり、彼らはお互いに支持し合い、交流し合い、中国の文芸を繁栄させようとする理想を抱いていた。彼らが目下の自分たちの位置を上と下の間の「卡党」と定め、将来の発展をめざし、次の「上」党に向かっていったことがうかがえよう。さらに、蘇州を中心として活動している人たちは「蘇党」と名乗り、杭州を中心として活動している人たちは「杭党」と名乗っていた<sup>280</sup>。王受生のエッセー「記卡党大会」では施蟄存が主席と推薦されるという想像が語られてもいる<sup>281</sup>。

蘭社での活動から、之江大学在学中の小説集『江干集』出版、そして維娜絲文学会の発起へと至る施蟄存の精力的な活動ぶりから、「杭州」が確かに彼にとって文学的な出生の地であったことが理解できよう。「浮生雜詠八〇首」収録の「郷関慚愧説杭州」（故郷は恥ずかしながら杭州と言う）の一句中の「郷関」とは、施蟄存にとって、単なる生地を指すのではなく、彼の文学的「郷関」、いわゆる発祥点、起点をも意味しているのであろう<sup>282</sup>。また、蘭社での精力的な文学活動によって施は上海の鴛派作家に文学者としての実力を大いに認められ、文学青年としての自信を得た後、次のステップを目指して、活躍の舞台を上海に移すのであった。

## 第二節、上海進出後の新結社活動（1923～1924）

### 1、青鳳文学会——上海大学時期の文学結社

1923年6月、之江大学を退学した施蟄存は、宗文中学を卒業したばかりの戴望舒と共に文学専攻が設置されている上海大学に入学した<sup>283</sup>。それによって彼らの文学活動の舞台は杭州から上海に移ることになる。上海大学で施蟄存らは「青鳳文学会」の結成に踏み切った。1923年12月7日『民国日報』副刊「覚悟」の「文芸界消息」欄の記事「上海大学底兩個文芸団体」に、青鳳文学会の紹介が掲載されている。その内容は以下の通りである。

我々はとても愉快に自由に結集し、協力して我々の愛する文学を研究しており、現在、我々はまるで鳳凰のように香木の中で燃えていると感じている。我々は将来の美麗と不滅を望むため、青鳳を我々が集団の名前とする。

我々には一定の組織もなく、規則もなく、何の宣言もない。ただ我々は愉快に我々が同志に

告げるのみだ。「我らが青鳳文学会は本日をもって成立した」と<sup>284</sup>。

また、『小説月報』（第15巻第1号、1924年1月）の「国内文壇消息」も「青鳳文学会」の紹介や、『青鳳』季刊、同会叢書の出版予告を掲載している。さらに、1924年1月5日、『民国日報』副刊「平民」第187期に掲載された施蛰存の「波斯詩人Kābhī Gibran<sup>マ</sup>的散文詩」の下に、ハリー・ジブラーン<sup>285</sup>の作品集『先駆』（*The Forerunner*, 1920）、『瘋人』（*The Madman*, 1918）が近々青鳳文学会より訳出されると記されている。しかし、実際には青鳳文学会は維娜絲文学会と同じ運命を辿り、具体的な活動を展開せずに終わってしまった。それでもこの時期の上海大学の歴史を記した王家貴等『上海大学：1922～1927』は、学生の社团として「青鳳文学会」を取り上げて簡単な紹介を載せており、同会の短い成立宣言も重要な資料と見なしている<sup>286</sup>。

『小説月』や「平民」で掲載されたことは、新文学派の中の現象だと認められたことを意味しているが、一方、青鳳文学会は湖波社（上記の「覚悟」の記事で青鳳文学会と共に紹介される上海大学の文学結社）と並び称された社团で、同時代の社团の中で時流に合わせた新文学的な革新性を持つ一方で、依然として鴛派との交遊があり、伝統的審美観の範囲を脱していない、新旧二重の性格を持っていたことがうかがえる<sup>287</sup>。

1923年秋に上海大学に入学した頃、施、戴兩人は蘇州の星社が小倉別荘で開いた第10回雅集に参加し、『江干集』を星社のメンバーに贈呈した<sup>288</sup>。また、1925年5月に「施青萍」署名の作品が鴛派の雑誌『半月』に掲載されたこと、徐碧波と大同大学付近の半淞園に遊園したこと、黄軫陶、金君珏らと往復書簡をやりとりしたことなども、施が新旧二つの文学界を往来していたことの一つの証左となるだろう。

施蛰存の年譜資料によると、彼が『創造週報』に「残花」を含む二本の短篇小説を投稿したところ、『創造週報』第46期に施蛰存に宛てた郭沫若の公開書簡が掲載され、これが彼にとって励みとなったという<sup>289</sup>。しかし、諸事情によって創造社刊行物では彼の投稿作の掲載は実現せず、このことが施蛰存に与えたショックは恐らく大きかったであろう。このような投稿先刊行物側の事情によって作品を順調に発表できなかった経験により、やはり自分で文芸誌を発行しなければならないという意識が強まったのだと考えられる。その後も文芸誌の発刊が頓挫するという経験を味わうことになる施蛰存らにとって、巨大な資金を提供してくれる劉呐鷗との数年後の出会いが、本格的な出版事業の幕開けとなるのであった。

## 2、瓔珞社——外国文学翻訳才能の開花

1923年9月、施蛰存、戴望舒は上海大学中国文学系に入学した。施蛰存はクラスのリーダーとなり、「上海大学的精神」を『民国日報』副刊「覚悟」に投稿したが、やがて半年後、「この学校で勉強することはよくないことがわかった」<sup>290</sup>ため、上海大学を退学した。その後、施蛰存は大同大学、震旦大学に再入学し、英語、フランス語の勉強に専念した。大同大学図書館では『世界短篇小説選』を書き写し、オクスフォード大学版の英訳本『ハイネ詩選』を愛読していた<sup>291</sup>。1926年春、戴望舒、杜衡らと共に「瓔珞社」を結成し、同人旬刊誌『瓔珞』を発刊した<sup>292</sup>。「瓔珞」は「微小貴重の意味から採ったものである」<sup>293</sup>。

『瓔珞』には施蛰存、戴望舒、杜衡の散文、詩、翻訳作品、及び施蛰存の小説が、各自複数の異なる筆名で掲載されている<sup>294</sup>。施蛰存は「序文」で、自らの心境をスチーブensonが *An Island Voyage* の序文を書いたときの不安な心境になぞらえ、なおかつ彼にならって読者には何も言わず、ただ謙虚に帽子を手にして読者の前に姿を現そうと記している。杜衡の「傳記参情夢

雑説」では、『小説月報』に掲載された傅東華訳の『参情夢』(Dowson : *Learning about Love in a Dream*) の誤訳を英語の原文を参照しながら逐一指摘し、皮肉めいた口調で傅氏の英語力を揶揄していた。戴望舒は「讀仙河集」で、フランス留学経験を持つ東南大学教授李思純訳のフランス詩集『仙河集』(『学衡』第47期、1925年11月に掲載)を、原文と照らし合わせて誤訳を逐一訂正していた。「フランス語が一知半解だけではなく、中国語のレベルも極めて低い」<sup>295</sup>と酷評する一文も記していた。彼らはここで自らの文芸集団が新文学派に劣らない外国語のレベルと文学鑑賞力を持つことを宣告したとも言えよう<sup>296</sup>。また、『瓔珞』は新文学の刊行物として『小説月報』で紹介され、施蛰存らの同人の活動は次第に新文学側に認められ始めることになるのである<sup>297</sup>。

『瓔珞』に発表された施蛰存の「周夫人」は、フロイトの心理分析的な手法の触発を受けた作品と見なされている。『広州民国日報』には1923年9月8日から秋水訳の田山花袋「蒲団」が連載されており、同時期の同紙掲載の署名「青萍」の筆記が施蛰存の『半月』に発表した「紅禪記漫行」の抜粋であるため、施蛰存が『蒲団』中国語訳を手にとりて読んだ可能性も考えられる<sup>298</sup>。ちなみに、『東方雑誌』1926年1月10日号にも夏丐尊訳『蒲団』が掲載されており、これまで夏訳『蒲団』が施蛰存に示唆を与えたと論じられていたが、『蒲団』の中国語初訳は秋水訳によって二年繰り上がる。したがって、施蛰存「周夫人」は日本の自然主義的な手法を応用してもいるとも推定される。

以上のように、施蛰存は初期文学活動を通じて戴望舒、杜衡と強い絆で結ばれ、それぞれ異なる文学的関心を抱きながらも、外国文学の翻訳や、詩、小説の創作などを精力的に行っていた。その後、施蛰存は本格的に「新路径」<sup>299</sup>を歩み始め、シュニッツラー、クヌート・ハムスンの小説を翻訳しながら、心理分析的手法を用いて続々と作品を生み出していくのである<sup>300</sup>。

### 第三節、水沫社時期——本格的出版事業のスタート(1927～1933)

1926年秋、施蛰存は震旦大学に学ぶ間に、戴望舒のクラスメートであった劉呐鷗と知り合い、文芸に対する深い興味を共有していたことをきっかけとして親交を深めた。劉呐鷗は天文台(徐家匯)付近の施、戴の住居を度々訪ね、彼らに日本語を教え、日本の新興文芸を紹介している<sup>301</sup>。そのとき、文芸誌の創刊が話題となり、劉呐鷗は『近代心』という刊名さえ考案したことがある<sup>302</sup>。

1927年の四・一二反共クーデターの後、劉呐鷗は日本に行き、施蛰存らは上海の大学での勉強を終えて松江の実家に帰り、共に翻訳、創作活動を精力的に行った。戴望舒はフランス人作家シャトブリアンの作品、杜衡はドイツ詩人ハイネの『ハルツ紀行』、施蛰存はアイルランド詩人イェイツの詩とシュニッツラーの『蓓爾達・迦蘭』(*Frau Berta Garlan*, 1901、『ベルタ・ガルラン夫人』)などの翻訳に没頭していた。こうして松江を舞台とする「文学工場」の幕開けとなる。

28年頃には、北京より南下してきた馮雪峰が新たに「文学工場」のメンバーに加わり、昇曙夢、森鷗外、石川啄木らの作品を施らに紹介するなど刺激的な文芸交流を行っている。ソ連文学に耽溺する馮雪峰の影響によって、彼らは「新ロシア詩集」の出版を計画したこともある<sup>303</sup>。後に『莽原』に倣った月刊誌『文学工場』の発行計画を立て、第一期は最終の製版段階にまで至るが、発行元である光華書局側の責任者の沈松泉が内容が急進的過ぎると反対したため、中止された<sup>304</sup>。28年3月に杜衡の翻訳作品『タイス』(フランス人作家アナトール・フランス作)が「水沫社イデ叢書」<sup>305</sup>として開明書店から出版された際に、水沫社という社団名が初めて印字されるのである。



一方、日本から戻ってきた劉呐鷗は、27年秋に戴望舒との北京旅行の最中に翠花胡同の北新書店を訪ね、書店の経営や書籍の発行業務に興味津津に考察し、書店経営を考え始めていた。やがて上海に戻ると虹口の「公園坊」<sup>306</sup>（挿絵を参照）での不動産業の事業に成功し、一財産を築いた。そこで施蛰存らと共に文芸誌出版活動を本格的にスタートさせ、文芸書の販売業務に携わる第一線書店を北四川路西寶興路付近に開くに至る<sup>307</sup>。28年9月10日には半月刊誌『無軌列車』創刊号を発行し、「永遠に発行延期のないことを保証できる」<sup>308</sup>と宣誓し、「あなたのこれらの多くの欲望を満たす最も精緻な小雑誌」（ここでの「あなた」は読者を指す―筆者注）<sup>309</sup>を目指すと宣伝している。同時に開業を記念して、劉呐鷗の日本文学翻訳書『色情文化』<sup>310</sup>、杜衡の小説集『石榴花』、胡也頻の小説集『向何處去』等が、「第一線書店出版叢書」として出版された。また、1928年12月10日刊行の『無軌列車』第4期に「第一線書店出版叢書」の予告が掲載されており、そのなかには「今日文庫」、「水沫叢書」、「世界名著叢書」、「前衛叢書」などの同人たちの創作、翻訳作品がリストアップされている。

「第一線」とは、「一等、一流」<sup>311</sup>の意味合いであるが、当局から革命的、急進的な赤化書籍と関わっていると疑われたため、やむを得ず水沫社にちなんで「水沫書店」と改名し、『無軌列車』も第八号を以て停刊せざるを得なかった。水沫書店は購買部を四馬路望平街西に、雑誌部、批発部、出版部、編輯部を共に日本人街の北四川路海寧路の公益坊Y第一七三四号（現在の横浜橋付近）にある二階建ての「石庫門」の貸家に設置し、初めて正式に出版社として経営を始めた。

水沫書店から最初に出版したのは「今日文庫」、「水沫叢書」の同人著書シリーズである。また、1929年9月15日、水沫社は「唯一の中国現代文芸月刊」<sup>312</sup>と標榜する『新文芸』を創刊した。『新文芸』は『無軌列車』やかつての『蘭友』と同じく、同人作品やほかの社団の文芸誌の広告も掲載しており、クヌート・ハムスン等の外国作家に関する紹介も多く、これらの点からも編集者としての施蛰存の当時の関心のあり様がうかがえる。



（2011年3月17日筆者撮影）

水沫社は「日本文壇の左翼作品盛行の影響を受け、左翼作家の大本営となり、左翼分子はよく同書店の二階を借りて会議を開いた」<sup>306</sup>と、劉呐鷗が知人に語っているように、馮雪峰を通じて魯迅、夏衍などの左翼作家の著訳書を水沫書店から出版してもいる。そのほか、「新興文学叢書」、「現代作家小集」、「マルクス主義文芸論叢」、「俄羅斯短篇傑作集」、「法蘭西短篇傑作集」などの図書を続々と出版し、上海出版業界の重鎮となっていく。特に、同社が「科学的芸術論

叢書」の出版計画を打ち出したことにより、大江書舗、光華書局などの出版社もマルクス理論関係の書物を出版し、一種の左翼文芸理論書ブームが呼び起こされた<sup>314</sup>。

1930年4月15日、左翼文芸に転じたばかりの『新文芸』は当局の弾圧により「廃刊号」を出版し、水沫書店自体も業務中止に追い込まれてしまう。10月、水沫書店を東華書店と改名したものの、水沫社は衰退期に突入していく。書籍販売業務を一旦中止し、聯合書店の店舗を借りて水沫社の臨時店とし<sup>315</sup>、元の購買部での営業を再開し、新書数十種の出版を計画したが<sup>316</sup>、やがて1932年上海事変後には東華書店は完全に閉店することとなり、「将来中国唯一の一流の文芸書書店を目指す」<sup>317</sup>という水沫社同人の希望も、「水沫」の二文字の通り、はかなく水泡に帰してしまっただけである。

その後の水沫社のメンバーはそれぞれ異なる道を歩み始めた。劉呐鷗は『無軌列車』時期から抱き始めた映画理論、映画製作への関心をふくらませていき、その後数年間は中国映画界で活躍することになる。戴望舒は杭州の実家に戻り、フランス留学の準備を始める。杜衡は上海の家にこもって翻訳に専念した。施蛰存は引き続き松江の中学校で教鞭を執り、1932年に『現代』の編集者になるまで松江で静かに暮らすのであった。

以上の水沫社に関する記述は、施蛰存の「我們經營過三個書店」<sup>318</sup>及び先行研究に負うところが大きい。実は、施蛰存らの水沫社同人が左翼文学と距離を置きつつ創作を行ったためであろうか、劉呐鷗が全般的に日本新感覚派文学を取り入れた試みなどは、当時文壇の権威として主流を占めた社団や作家たちには認められなかった。また施が魯迅との間の「莊子、文選」をめぐる論争や、第三種人論争などによって80年代まで水沫社は低く評価され、その文学史的な役割はあまり重要視されなかった。以下ではこれまであまり言及されていない施蛰存の文学活動を見てみよう。

施は蘭社時期における叢書編集の経験を下敷きとして、水沫社で敏腕のジャーナリストとして活躍し、水沫社同人及び外国文学の叢書数種の出版も計画した。さらに『無軌列車』、『新文芸』の編集や出版関係の業務に携ったことで、後に大型雑誌『現代』の編集者として活躍するための経験をも蓄積した。かつて維娜絲文学会、青鳳文学会、瓔珞社の時期に示した外国文学の系統的な紹介や翻訳への意欲は、水沫社時期に実現することができた。

またハムスンに高い関心を示し、『新文芸』に日本の北欧文学研究者宮原晃一郎のハムスン論を汪馥泉の訳で掲載し、ハムスンの代表作『餓』も章鉄民の訳で水沫社から出版した。さらに、施蛰存は自らもハムスンの『恋愛三昧』（原題 *Pan*）を翻訳した。加えて、1927年頃にシュニッツラーへの関心を抱き始め、数種の翻訳を行うなど、人間の内面心理への関心をそれまで以上に深めていく。これは水沫社での編集、出版活動から見られる施蛰存文学の特色の一つである。

従来の水沫社での施蛰存の出版活動に関する研究は、マルクス関係の叢書及び魯迅の訳書の出版に重点が置かれることが多く、彼の創作集『上元灯』出版の意義は見過ごされてきた。『上元灯』は施が自家版『江干集』刊行後、初めて上海で創作し出版した作品集であり、文壇での名声の確立と緊密な関係を持っている。『上元灯』には文壇の第一線で活躍する葉聖陶、朱湘、沈從文、王哲甫、邵洵美、沈善堅らが称賛の文章を贈っていた。また『上元灯』が好評を得たことは、施蛰存の水沫社のメンバー、同人誌の編集者としての活躍ぶりと無関係ではなさそうだ。この水沫社時期に彼は上海文壇で活躍する沈從文、徐霞村、葉靈鳳、章克標、邵洵美、朱維基、林徽音、郭建英らと親交を持ち始め、広範な人脈を築いたのである<sup>319</sup>。

さらに、施蛰存の水沫社での出版活動には「新旧我無成見」（「新旧ともに異議なし」）という文学観が濃厚に現れていると言えよう。施、戴らは馮雪峰的勧めで『新俄詩選』を翻訳する一方、ダウソンやフランスの古風な弾詞にも興味を示し、戴は『屋卡珊和尼各萊特』（『オオカッ

サンとニコレット』、*Aucassin et Nicolette* は 13 世紀フランスの作者不明の歌物語）を翻訳したこともある。その一方で 1929 年 7 月に水沫書店から施鰲存校点による明の董若雨の古典白話章回小説『西游補』を出版し、「書相国寺撮景甲」、「書相国寺撮景乙」、「李清照詞的標点」など士大夫的な詩趣が溢れるエッセーも書いている。

さらに戴の『屋卡珊和尼各莱特』に寄せた序文「中世紀的行吟詩人」では、これらのフランスの古典詩（フランスの古代弾詞）を中国の「伝奇文学」と比較しながら吟味してはいかが、と読者に勧めてもいる。王文彬は戴望舒について「新旧混淆する複雑で多元的な文化思想が基調を成している」<sup>320</sup>と批評しているが、戴と親密な関係にあった施鰲存には、多かれ少なかれこの戴と似た感受性が見受けられる。水沫社時期でも施鰲存は「新旧ともに異議なし」の文学観を一貫して保持していたのである。

もう一つ注目すべきは、ハムスン、シュニッツラーの心理小説を翻訳し、自らも心理分析的小説作品群を発表していることである。施に関してはフロイトの心理分析理論やシュニッツラー小説の受容がこれまで重視されてきたが、その心理小説の源流を遡ってみれば、シュニッツラーの師に当たる「現代派文学の始祖」<sup>321</sup>と言われるハムスンの存在を無視できないであろう。次章ではハムスン文学の施鰲存への影響を詳しく論じたい。

施鰲存らの社団活動の足跡をたどることで、かつて同じ環境で共に文学活動を行ったものたちが、その後別々の道を歩んでいき、それぞれの分野で活躍していく様子が再現できるであろう。社団仲間とかつて深く影響し合う環境の中にいたからこそ、施鰲存はそれを足がかりにして、文学観念を形成することができたのであり、新たな文学的スタートをはじめたのである。また、ほかのメンバーたちの文学活動についても、その文学史的な意義を掬い上げて公平に評価する必要もある。施鰲存の初期社団、同人との関わりを把握することによって、施鰲存とその仲間たちの文学像をさらに多面的に理解でき、社団研究にも新しい資料と観点を加えることができるものと思われる。

#### 第四章、翻訳活動から再評価する施鰲存文学

施鰲存は之江大学で英国文学に関心を示し、英語の原書や英訳で外国文学読み始めた。蘭社で活動していた頃、「生育女子須知」（浙江『民報』副刊「婦女周刊」に掲載、未見）を翻訳し、『蘭友』に外国作家の語録を翻訳して書き写したこともある。松江の実家に籠って翻訳・創作活動を行っていた施鰲存、戴望舒、杜衡、馮雪峰らは、それぞれが気に入った作家の作品を翻訳していた。施鰲存はシュニッツラーの『ベルタ・ガルラン夫人』などを続々と翻訳出版した。1929 年頃には『新文芸』を編集し、『上元灯』などの小説集の出版に取りかかりながら、ハムスンの『恋愛三昧』を翻訳し始めてもいる。アイルランドのイェイツ、アメリカのアラン・ポーなどの作品を翻訳し、『域外訳叢』10 数巻の刊行も計画したことがある。また、鄭振鐸の依頼に応じて商務印書館の『世界短篇小説大系』の翻訳活動に携わり、1930、31 年にチェコ、ポーランド、ハンガリー三国の短篇小説を翻訳した。その一部は後に王雲五が編集した「万有文庫」（商務印書館）に『波蘭短篇小説集』などとして収録された。さらに、1939 年、張夢麟が編集人を務めた「世界少年文学叢書」（中華書局）の翻訳に携わり、スコットの『劫後英雄』などを訳出した。40 年代にアモイ大学で教鞭を執っていた時には、『自殺以前』、『老古董俱樂部』、『戦勝者巴爾代克』、『沙洛揚小説集』などの 10 種の作品を収録する叢書の翻訳を計画してもいる。42 年には陳原が編集人を務めた「弱小民族小説選」（螢社）シリーズの翻訳に携わり、ユダヤ人作家イツハク・レーブ・ペレツの作品を翻訳し、48 年には上海正言出版社から『老古董俱樂部』などを収録する「域外文学珠叢」の出版を実現した。

80年代には『外国独幕劇選』を編集し、ドイツ文学の翻訳者張索時による Rilke、Jacobson などの翻訳に対して方法論的な指導を行ったことがある。90年代には上海書店の要請に応じ、范泉と組んで『中国近代文学大系・翻訳文学集』（三冊）の編集に携わり、序言と三冊それぞれの選編説明、及び各作品の解題を執筆した。その序言においては、外国翻訳文学が清末民初の中国小説の文体、叙述スタイルなどに多大な影響を与えていたと述べている<sup>322</sup>。このように施は多くの作家の翻訳に携わったが、翻訳をめぐる議論や、自らの翻訳観を述べた文章は少ない。それでも「記念傳雷」では、傳の翻訳方法に賛同せず、異なる翻訳観を二点述べていた。「私が翻訳をめぐり意味を伝えることだけを強調するのは、私は英語書籍から翻訳するので、英訳本の意味を伝えることしかできないからである。英訳本は原文に対して責任を負うが、私は英訳本に対して責任を負う。傳雷は意味を伝えるのみならず、さらにその精神も伝えよと主張しているのだ。……私は原文そのままの意味を訳し、むしろ注を加えて、その成句の意味が中国のどの成句に相当するかを説明することを主張する」<sup>323</sup>。また、張索時宛ての書簡では、ドイツ文学の翻訳に関して「原文の文法、構造から大胆に抜け出してもよいが、原文の意味を歪曲してはいけない」と述べたことがある<sup>324</sup>。この意見も施蟄存自身の翻訳経験に基づいた感想であり、翻訳方法論でもある。

以下、中国におけるハムスン受容を概観したうえで、施蟄存のハムスン文学の翻訳を取り上げ、この翻訳作業と創作との並行関係を考察してみよう。

### 第一節、中国におけるハムスン文学の受容

中国でまず人目を惹いたハムスン作品は恋愛小説である。その抄訳 1920 年代以来「什麼是愛」、「奇談」は『小説月報』、『莽原』などの文芸誌にいち早く掲載されている。1930 年代には、ハムスンの恋愛小説『魏都麗姑娘』（*Victoria*）、『恋愛三昧』・『牧羊神』（ともに原題は *Pan*）が施蟄存らにより英訳から重訳され、40 年代までに数回の版を重ね、人気を博していた。時代が下って 80 年代に入ると、*Pan* が恋愛小説の世界的名著として突如再び高い人気を博し、かつて精力的にハムスン文学の翻訳を推し進めた施蟄存は、半世紀を経て『恋愛三昧』の再版を契機に改めて「北歐式の浪漫主義」溢れるハムスン文学の魅力を語った<sup>325</sup>。2009 年にはハムスン生誕 150 周年記念に際して、ハムスン文学に関する国際シンポジウムが南京大学で開かれてもいる。そして同年、四冊の『哈姆生文集』が出版され、2011 年には王義国訳『漢姆生伝記』（Ingar Kolloen, *Knut Hamsun: Dreamer and dissenter*, Gyldendal Norsk Forlag, 2009）も人民出版社から出版された。ここでは中国におけるハムスン文学の紹介・翻訳の実態を考察し、20、30 年代の外国文学受容の一側面を明らかにしたい。また、外国文学の翻訳を通じて中国近代文学が形成されていくなかで、ハムスン文学に見られる「内的独白」などの手法が、その翻訳者の一人である施蟄存らにどのような示唆を与えたかを検討したい。さらに、施蟄存のハムスン翻訳に注目し、彼自身のどのような文学修養がそれを具現化しているのか、ハムスン翻訳が彼自身の文学に何をもたらしたかなど、比較文学論の視点から解明を試みたい。

#### 一、民国文壇のハムスン文学の紹介

清末民初、世界各国に中国文学をより深く理解させるためには中国文学を翻訳する必要があるとして、陳季同は 1898 年に初めて「世界文学」を提唱した。郭延礼の研究によると、五四新文化運動前、近代翻訳文学は萌芽期（1870～1894）、発展期（1895～1906）、繁盛期（1907～1919）を経て、多くの外国文学翻訳により、新文学ジャンルの一つとして確立されていった。翻訳家たちは自ら翻訳者としての自覚や翻訳文体を模索することによって、五四時期に翻訳

活動を軌道に乗せるための礎石を据えた<sup>326</sup>。特に、東欧諸小国の文学がロシア十月革命の前に、民族独立の意識を高め、反侵略・反圧迫の精神を表していたことに、中国の作家、翻訳家たちは強く惹きつけられた。そして、これらの作品の中に溢れる民族精神に深い同情を抱くと同時に、中国自身が列強の脅威を感じるなか、自らの民族の独立を勝ち取ろうとの意識も高まってきた。さらに、これらの作品は読者にヨーロッパ文学に関する知識を広める一方、民族主義、愛国教育の役割をも果していたと言えよう<sup>327</sup>。

五四新文化運動後、知識人たちは外国の文学、文化や新思想を活発に輸入し続け、中国と同じように損害を被り、圧迫されていた北欧などの諸弱小民族の文学に高い関心を示したが、それは自国の独立、反抗精神を高めようとする狙いが非常に強かったことを物語っている。そうした翻訳文学の方向は、五四新文化運動の理念とも合致しており、また文壇に新風を吹きこもうと企てた文学的試みでもあって、まさに時宜にかなったものであったと言えよう。以下、1920、30年代頃のハムスンの紹介・翻訳状況を整理してみよう。

最初にハムスン文学に関心を示したのは日本に來た中国人留学生である。魯迅は日本留学中にスカンジナビア文化に親しみを抱いており、スカンジナビア文化の陶冶を受けていたという指摘があるが<sup>328</sup>、彼が購入したドイツ語のスカンジナビア関係書籍 50 点の中で、ノルウェー文学関係のものは 17 点に上る。

後に創造社のメンバーとなる鄭伯奇は、1921 年 5 月、日本留学中に京都白川の下宿でハムスンの短篇小説「森林之冬」<sup>329</sup>をフランス語訳から重訳した。郭沫若は博多の箱崎海岸付近の下宿で *Sult* を熟読したことがあり、郁達夫もドイツ語版の *Sult*、*Markens Grode* を持っていた<sup>330</sup>。これらの留学生は帰国後も引き続きハムスン文学に多大な関心を示し、国内の知識人たちに影響を与えたのである。

ここで、日本におけるハムスン受容を概観してみよう。明治末期、ドイツ文学研究者片山孤村、西澤富則らが率先してハムスン文学に関心をもち、ドイツ語訳からの重訳を始めた。1921 年、長島直昭がハムスンのノーベル文学賞受賞作 *Markens Grode* を英訳から重訳し、『土地の生長』と題して天佑社から出版した。後に、1921 年、宮原晃一郎訳『飢え』(*Sult*)、1923 年、福永煥訳『森の処女——グラーンの死』(*Pan*)、1924 年、宮原晃一郎訳『愛の物語』(*Victoria*)、1926 年、北村喜八訳『人生にひしがれて』(*Livet I vold*)などが続々と出版された。1928 年、当時流行のいわゆる「円本」の一種である新潮社「世界文学全集 27」『北欧三人集』(宮原晃一郎訳、生田春月序・解説)に『飢え』が収録され、大きな注目を浴びた。芥川龍之介はドイツ語版の『飢え』を読み、「ハムズンは大家だ」<sup>331</sup>と記し、横光利一は『飢え』を読んでハムスンの「豊富な想像力」に感服させられたといい<sup>332</sup>、林芙美子も『飢え』を読んで多大な影響を受けていた<sup>333</sup>。

## 二、ハムスン文学の翻訳について<sup>334</sup>

ハムスンが初めて中国に紹介されたのは、1920 年のハムスンのノーベル賞受賞がきっかけであり、まずは彼の生い立ち、人物評、作品批評などが中心であった。『小説月報』『海外文壇消息』などに掲載されたハムスンの文章は、主に欧米発刊の最新号の雑誌 *Nation* などの書評欄を訳載したものである<sup>335</sup>。それに続いたハムスン文学の翻訳も、主に英訳からの重訳である。文学研究会と清華文学社とのメンバーであった顧一樵(顧毓琇)がハムスンの *Victoria*、*Pan* を愛読し、後に翻訳を試みた。1928 年、魯迅らが起こした朝花社が文芸誌『朝花』に「東欧、北欧の文学作品を紹介する」方針を掲げたことの影響もあり、莽原社、朝花社、未名社らの魯迅と関わりの深い社団のメンバーたちが率先してハムスン短篇小説の翻訳

を行っている。以下具体的に見てみよう。

① 「什麼是愛」——散文詩、*Victoria* の部分訳

顧一樵訳、『小説月報』第14巻第11号(1923)「海嘯」専號に発表。胡夢華の書評「哈姆生的維多麗亜」の文末にも「什麼是愛」を引用。そのほか、『人民評論』第23期(1932)に「什麼是愛？」(訳者不詳)が掲載されている。

② 「奇談」—*Pan* の部分訳

白萊訳、『莽原』第10期(1926)に発表。後に韋素園編集の「未名社叢書」『黄花集』(開明書店、1929)にも収録された。無名氏『塔里的女人』(真善美圖書發行公司、1944、147-149頁)もハムスンの*Pan*に言及し、「奇談」に当る部分を引用している。

③ 「戒指」

梅川訳は『朝花』第2期(1929)に発表。紀雲龍訳は『華文大阪毎日』第5巻第9号(1940年11月)に発表。また、古有成編集の『挪威短篇小説選』(1930)、吳咸編集の『北欧集』(1933)にも収録。

④ 「生命之呼声」

訳題	訳者	掲載誌・収録作品集	出版社	出版時期
「生命之呼声」	梅川	『朝花』第6期	朝花社	1929.1.10
「生的叫喊」	古有成	古有成編集『挪威短篇小説選』	商務印書館	1930年初版、1933、37、39年再版
「生命的呼声」	林淡秋	『新中華』第1巻第21期		1933.1
「愛倫」	吳咸	吳咸編訳『北欧集』	擷英文藝社	1933
生命的呼声	林淡秋	桐君ら編訳「新中華叢書文芸彙刊之一」、『日射病』に収録	中華書局	1935
「生的叫喊」	古有成	施洛英編「世界文学短篇名著」『北欧小説名著』	啓明書局	1937.6
「生的叫喊」	古有成	胡適等訳『愛情的麵包』	啓明書局	1941.7
「生的叫喊」	羅塞	『挪威最佳小説選』	雲海出版社	1946.12

ハムスンの長篇小説の翻訳には以下のものがある。

①1929、現代書局、邱韻鐸訳『魏都麗姑娘』(*Victoria*)

左翼文芸誌『拓荒』第1巻第1号(1930)の新書広告に『魏都麗姑娘』(別題『愛的故事』)が見られる。「千冊の恋愛小説を読んでも、この『愛の物語』には及ばない。彼は叙情的な筆致で恋愛の本質、恋愛の空しさを描きだしている」<sup>336</sup>と記されている。実は魯迅も*Victoria*の翻訳に熱意を示しており<sup>337</sup>、朝花社における柔石と「北欧文芸叢書」の計画には、ノルウェー、スウェーデン、デンマークの短篇小説集三種のほか、魯迅訳ハムスンの『維多利亜』(*Victoria*)も入っている。楊家駱編『凶書年鑑』(六)『翻譯文学』(中国図書大辞典出版社、1935)に邱訳『魏都麗姑娘』の粗筋が掲載されているほか、胡夢華が「その小説(*Victoria*—筆者注)をよく見ると、實際婚姻の不自由の苦痛を描いており本来は問題小説であるのだ。ただし作者の手法は非常に巧妙なので、その痕跡が現れていないのである」<sup>338</sup>と評している。

②1929、水沫書店、章鉄民訳『餓』(George Egertonの英訳本 *Sult* が底本<sup>339</sup>)

魯迅は1927年12月21日に上海暨南大学で講演を行った際に *Sult* に言及している。当時章鉄民は暨南大学に勤務しており、その講演について記した「文芸與政治的岐途」を秋野社

の同人誌『秋野』に発表した。二年後に章鉄民は『餓』を訳出し、左翼文芸理論や世界各国の新興文学の翻訳出版を多く手掛ける水沫社より出版した。そのほか、1934年、*Sult*の編述（要約）版本『飢餓』（編訳者葉樹芳）も、中学生書局より「通俗本世界名著」の一冊として発行された。

### ③ *Pan* 二種の中訳本

一つは施蟄存訳『恋愛三昧』で、1933年に光華書局「欧羅巴文芸叢書」の一冊として出版された（1937年には大光書局が第三版を出版）。『恋愛三昧』という題名は、趙伯顔が翻訳したシュニッツラーの劇作 *Liebelelei* の訳題と同じである（このため、施蟄存訳の『恋愛三昧』はしばしばシュニッツラー作品の翻訳と誤解される）。もう一つは顧一樵訳の『牧羊神』で、1934年に商務印書館の「世界文学名著」にリストアップされた。顧訳の原作は *Pan* であるが、全訳ではなく、小説の後半「グラーンの死—1861年の記録から」が翻訳されていない。こちらは1939年に王雲五編集「万有文庫」の一冊として商務印書館から再版された。顧一樵訳『牧羊神』と施蟄存訳『恋愛三昧』とはそれぞれ三度増刷されており、両者を合わせると総発行部数は少なくとも一万冊に達しているであろう。この点からもハムスン文学が民国期においてかなり広く読まれていたことが分かる。

*Sult* 自体は社会批判のニュアンスは薄いだが、中国での紹介や批評においては、主にハムスン自身の各職業を転々とした経歴やその作品における非情な社会への批判などに焦点が当てられている。例えば、章鉄民訳の『餓』には訳者による意識的な改訳、省略、挿入などが見られ、このような意識は恐らく中国の社会状況、読者を意識したものと言えよう<sup>340</sup>。上海図書館1929年収蔵の『餓』原本（章鉄民訳）に対する復旦大学の学生の落書きにも、「熱病患者の寝言」<sup>341</sup>と記されている。他方 *Pan* について、施蟄存は「主人公の恋愛は野蛮であり、情熱的である」と評していたが、これは「野性の愛情」、「野性と原始性を持った主人公」などといった、同時代の日本人研究者の批評と共通している<sup>342</sup>。日本ではハムスンは左翼作家として評価されるが、中国ではハムスンは *Pan* など独特な恋愛を描いた作家として評価されている。

40年代に中国全土に人気が及んだ小説『塔里的女人』（無名氏、真善美図書発行公司、1944）はハムスン及び *Pan* に言及し、「奇談」に当る部分を抄訳していた。当時の読者は恐らく一世を風靡したこの『塔里的女人』を通してハムスンの名前に親しんでおり、このことが後の *Pan* ブームに一役を買ったと思われる。同作は現在でも数種の中国語訳が出回っていることから、ハムスンは恋愛小説としての *Pan* により中国で人気を得てきたものと推定される。

## 第二節、『恋愛三昧』について——翻訳・創作の同時進行

民国期におけるハムスン文学の紹介、翻訳の実態を振り返ってみると、当時の外国文学受容の一側面が浮かび上がってくるだろう。以下、精力的にハムスンの紹介、翻訳に携わっていた施蟄存を取り上げ、彼の文学におけるハムスン受容の意味を検討したい。

1920年代末期、施蟄存は上海の新興文芸社团水沫社の中心メンバーとして文壇で活躍し、ハムスン、シュニッツラーらの「内的独白」という手法を駆使した外国文学の翻訳、出版活動に携わり、人間の内面への関心をいっそう深めた。1932年5月創刊の大型雑誌『現代』の編集者になると、自らの文学が外国文学との同時代的な一面を持つことに気付いて「世界文学の同時代人」と称しており、世界の新興文学に合流しようとする意気込みで文学活動をしていたと言えよう。

施蟄存が『恋愛三昧』の翻訳に携わった具体的な経緯は定かではない。『小説月報』など



が盛んにハムスの紹介を行っていたことや、水沫社から章鉄民訳『餓』を出版したこと、朝花社メンバーが精力的にハムスン文学を翻訳していたという当時の文芸界の動向に敏感に反応したものであろう。1929年9月、「新しい路」を歩むと宣言し、心理分析的な手法を用いた「鳩摩羅什」などを創作した。ほぼ同時に、『新文藝』誌「国内外文壇消息」は『恋愛三昧』がすでに訳出されたと報じている<sup>343</sup>。ここから、施鰲存の創作は翻訳活動と同時進行していたことがうかがえる。

施鰲存の初期作品群からは、彼が人間の内面心理への強い関心を持っていたことがうかがえるが、その要素がハムスン文学に現れる心理描写に共鳴していたことがうかがえる<sup>344</sup>。例えば、「廉価的麴包」で乞食がパンの夢を見たり、飢えによる幻覚や奇想に陥る点は、ハムスの『飢え』に類似している。「廉価的麴包」と『飢え』という二つの作品は、いずれも現実社会の描写は少なく、人間心理の非合理的な躍動を生き生きと描いていた。また、「梅雨之夕」（1929）は全篇で主人公「私」の妄想と内的独白が綴られている。「私」は雨宿りの女性を過去の初恋の相手ではないかと想像し、話しかけて確かめるかどうかという内的な葛藤を愉しみながら、甘美な追憶に耽り、女性の言動にいろいろな解釈を試みているのである。

そして女性の髪の毛の匂いを吸い込んだ彼は思わず官能的な興奮を覚え、「ある種の男の勇気が湧きあがり」、「女の心を征服しよう」と思い、彼女に話しかけるのである<sup>345</sup>。このプロットの設定、内的独白はハムスの『飢え』と類似している。『飢え』の「私」は夜歩きの女性に「変な心」を起して、その後をつける<sup>346</sup>。その際、無意識のうちに呟かれた女性との関係の妄想は、「私」の素直な自己の表出であり、精神的な飢えを露わにして、現実と幻想の交錯の中で安らぎを求めようとするものである。もしも更に一步理性が狂うことになれば、妄想・白昼夢・無意識が洪水のように氾濫し、それに伴い性的衝動に駆られていくことになるのであろうが、施鰲存の登場人物たちはそのようなことはないものの、妄想自体は常に抱いている。このように施鰲存はハムスンと同様に心の奥深いところで作動する記憶の力に興味を示したことがうかがえる。施鰲存のその後の作品群は、肉体も精神も蝕まれた都会人がさまざまな幻覚に悩まされる姿を描くのである。

施鰲存が確固たる作家の地位を固めたのは、小説集『上元灯』（1929）の出版による。同時代評を見てみると、少なからぬ読者がその詩趣に富んだ筆致を高く評価している。「周夫人」、「扇」、「上元灯」などの作品では、彼の少年時代の心に深い感銘を与えた追憶を下敷きに、哀愁を帯びた清純甘美な世界を作り上げた。このような清純な感動的な愛の賛歌は古典的な抒情小説の列に連なり、読者は覚えず引きずり込まれたことであろう。一方、ハムスの *Pan* が「哀感と諦念、目立つ低音弾琴」、「回顧的詠嘆的な主調」<sup>347</sup>と讃えられているところは、『上元灯』評との同質性が見られる。恐らくこれが施鰲存が *Pan* に感激し、それを訳出した動機の一つであろう。ハムスン文学に共鳴する下地が施鰲存に十分に備わっていたことがわかる。呉福輝は施鰲存が江南地方で生活しているにもかかわらず、作品が北欧文学的雰囲気を感じていることを指摘しているが、施鰲存とハムスンには確かに共通した作風が見られる<sup>348</sup>。

施鰲存は回顧的・悲嘆的なスタイルを用いた「周夫人」、「扇」などを創作する以前の「執紼記」、「綵勝紀」などの初期作品群でも類似のスタイルを用いている。語り手「私」は友人の物語ないし友人から語られた第三者の物語を、現在の視点で物語の体験者であるかのように悲嘆的、抒情的な口調で語っている<sup>349</sup>。一方、『上元灯』に収録されている「扇」、「周夫人」等においては、一人称の語り手は物語の体験者と合体し、さらなる綿密な心理分析を



施しているのが特徴である。

次に、ハムスンの『恋愛三昧』の詳細を見てみよう。語り手「私」ことグラーン中尉は二枚の鳥の羽を目にしたことをきっかけとして、二年前の悲恋物語を追憶するが、「私」の語りには現在の心情が入り混じった哀愁が漂っている。グラーンとエドワルダはともに情熱と冷酷という二面の心的傾向を有しつつ、互いに惹かれあうが、短い間の熱愛を経て別れる。グラーンは失恋の苦しみを克服したように見えるが、実はその悲恋に原因する自虐的な陶醉と快感に常に耽っている。グラーンがエドワルダに贈った鳥の羽は彼の大自然に対する愛情の象徴であり、二人の愛の芽生えの証しでもある。グラーンは物語の発生地ノールラン地方を離れ、エドワルダとも別離したが、鳥の羽から追憶が呼び起こされたということから、その失恋の傷が長く尾を引いていると読者は推察できるのである。

施蟄存の「扇」は、「私」が愛の記念としての扇を見ることによって記憶を辿りはじめるというプロットである。「私」は樹珍に好意を抱き、彼女の扇に強い執着心を持ち、盗もうという邪心まで起してしまう。彼女に嫌われることを恐れるあまり、その恐怖は夢の中まで現れる。『恋愛三昧』のグラーンも夜の森で女性と出会い、架空の森の神である恋人同士のディーデリクとイセリンについての妄想に耽ることが描かれている。意識と無意識、現実と幻視の世界が入り混じり重なり合って並存している点で、二つの作品は共通している<sup>350</sup>。主人公の「私」が過去の時空に連れ出され、甘い思い出に耽るきっかけは「扇」である。その冒頭部分は以下のように書き始められている。

「唉、這個東西還在嗎？一時間真不禁有些悠遠的惆悵。那是安眠在抽屜底上的，綿紙封袋里的一柄茜色輕紗的團扇。……我之所以覺得惆悵，只是為了這一柄團扇與我有一些瓜葛。那還是住在蘇州的少年時候的事哩。」

「ああ、こんな物がまだあったのか？ その刹那に思わず遙か遠く去っていた心の痛みを感じた。それは抽斗の底に眠っている、薄い柔らかい封筒に入った茜色の薄い紗の団扇である。……私が心の痛みを感じたのは、ただこの団扇が私と些かの関わりを持つからにはほかならない。それはまだ蘇州に住んでいた少年時代のことであった。」

これに対して *Pan* の冒頭では、二枚の青い鳥の羽が郵送されてきたことをきっかけに、「私」の記憶が蘇る。その段落はテキスト全体におけるプロローグとして位置付けられる。山室静による日本語訳『みじかい北国の夏に』から該当部分を以下に引用する。

「そうだ、二三日前、べつに貸してあったわけでもないのに、さる人がはるばると二枚の鳥の羽を送ってよこした。王冠のマークのついた書簡箋につつんで、封印をした二枚の毒々しいまでに緑色の鳥の羽を見て、わたしはすっかり愉快になった。」

以上引用したように、「団扇」は「鳥の羽」と同じく過去を呼び起こす触媒として用いられている。また両作とも語りの途中で、それぞれ「団扇」と「鳥の羽」とに度々言及しており、現在の「私」（語る「私」）と過去の「私」（語られる「私」）との間に空間的、時間的な距離感を作り出し、隔たりの感覚を生みだしている。語る「私」は過去の自己を再構成しうる地平に立ちつつ、過去の自己を「私」なりに意味づけ、織りなした物語と対照し、かつての自己像（語られる「私」）を重ねていると読めよう。

「如果這一年不遺留這一柄團扇給我，現在我還能毅想念起她嗎？我的回憶還能不能捉到一個起因而蔓延開去嗎？」

「もし、この年私にこの団扇を残してくれなかったら、今の私はまだ彼女のことを思い出せるだろうか？ 私の追憶は一つのきっかけをつかむことにより次々と展開できただろうか？」

この自問は、「私」が現在と過去との心情を結び合わせようとする際の「団扇」の存在の重要性を明かにしている。また、『恋愛三昧』の第12節では、「私」は追憶の途中で再び現在の時点の心情を述べ、プロローグで想起された羽を意識し、それにまつわる物語を読者に暗示し、伏線を張っている。

「あの情事の全体が興を乗せてくれるし、気をまぎらせてもくれるから。それでは、その緑いろの二枚の羽というのは何のことか、それについて話してみよう。」

「這整個故事只使我娛樂和紛乱。至于那兩枚青色的鳥羽，我將在適當的時候講到它們。」

「興を乗せてくれる」、「気をまぎらせてもくれる」などの表現は頻繁に繰り返されているが、グラーンは心の中にエドワルドのことが強く根付いている事実を覆い隠そうとし、かえって彼女に対する彼の思いが露呈されていく。

また、「扇」の結末では、再び「幼い頃の友情の記念物」に焦点が当てられ、現在では中年にいたった「私」の境遇が嘆かれている。

「而我，性格仍是小時候那樣，過盡了青春，到了如現在這樣的可煩惱的中年，只在對着這小時候的友情的記念物而抽理出感傷的回憶。天啊！能穀再讓我重演青春的浪漫故事嗎？」

「しかし私は、性格こそ依然として幼い頃と変わらないものの、青春も終わり、今このように煩わしい事に悩まされる中年になると、幼い頃の友情の記念物を目にして感傷的な思い出を抽出することぐらいしかできない。神よ！ 私にもう一度青春のロマンスを演じさせてはいただけないであらうか？」

この一節に類似する *Pan* の描写を、前述の山室静訳で見よう。

「さて、ここに二枚の鳥の羽がある」と、わたしはなおも考える。わたしはこれを知っているような気がする。それはあのノルランでのちょっとした戯れを思い出させる。あれはわたしのさまざまな経験のうちのほんのささやかな経験だった。あの二枚の羽にまたお目にかかるとは愉快ではないか。そしてわたしは突然に、ある顔をそこに見、ある声をきく気がした。」

このように、結末部分で鳥の羽を再び手にとり、女性の話し声が耳に響き出すところで小説は終わる。二年前の戯れと現在の心情とが互いに入り混じり、影響しあい、さらに新たな追憶の世界が再構築されていくのだ。施鰲存の「扇」に現れる追憶を素材とする叙述スタイル、無意識的記憶の再現、人間の心理への根強い関心、余情が漂う詩的な情緒などは、彼の文学風土の下地をなしている。彼は自らの経験をモチーフとした物語と枠組みが酷似している『恋愛三昧』を翻訳する過程で、自らその詩的な回想及び甘い記憶を追体験<sup>351</sup>したと言えよう。

施は『恋愛三昧』訳序の中に「この訳書を通じて、読者は原作者の素朴な作風、独特な修辭、北国的な感傷を味わうことができる」<sup>352</sup>と記している。しかし、読者が翻訳から感じ取る作風、修辭、感傷はハムスンのものというより、むしろ彼自身のものであると言えよう<sup>353</sup>。ハムスン文学の本質を的確に掴み取る施鰲存にとって、その独特の情調、詩的な文体は、施

蟄存文学の最初期の段階でほぼ完成の域に達していたと思われる。ハムスン文学の方法とテーマが施蟄存の『恋愛三昧』の翻訳によって踏襲されたというより、自らの文学の「奥深いところで作動する磁力」<sup>354</sup>がハムスン文学に重ね合わさって作動したため、彼は深い共鳴を覚えたのではあるまいか。また、嗜好に叶った翻訳対象を選出したことから、彼自身の資質、その関心の所在がうかがえるほか、ハムスンの斬新な技法や変化に富んだ文体との融合を更に加速し、自己の文学風土を肥沃にしたことがうかがえる。

井上健は近代日本の大作家の翻訳と創作について、次のように指摘している。

作家の翻訳を考察の対象とするときは、まずは、作家本人の翻訳過程への関与がいかなるものであったかを、状況証拠を重ねて推測していかなければならない。そしてその一方で、関与の度合い、あるいは実質的関与の有無に関わらず、その翻訳に名を冠したことや、作家が原作にたいして積極的な関心を示した証として受け止めて、それが何を意味するかを、作家自身の創作活動との関連において解き明かしていく作業を、並行して進めていく必要がある<sup>355</sup>。

ただ、施蟄存の場合、彼が翻訳することと、翻訳という行為が彼の創造性に作用することとの間には、もう少し錯綜した多様な関係が想定される。施蟄存が主体的に関わった翻訳であったとして、それが創作人生のどの時点で手掛けたものであるかという問題である。また、『恋愛三昧』には具体的にどのような反響があったのか、その翻訳が施蟄存の同時代文学、さらには同時代の翻訳作法や翻訳文体にいかなるインパクトを与えたのか、この問題も施文学の評価及び彼の翻訳活動の研究、評価ともかかわっている。これらはともに今後の課題としたい。

### 第三節、未亡人の生の叫び——施蟄存とハムスン、シュニッツラーの比較の試み

包天笑の「一縷麻」（1909）と徐枕亜の『玉梨魂』（1912）は、ともに民国初期の未亡人の情感世界に注目した人気作である。これらの作品に描かれている未亡人は、初めは自らの情感に従って封建的な礼教に疑いをもち反発するが、因襲的な観念に束縛されたまま悲劇的な結果を招いてしまい、彼女たちが渴望した愛の発展は不可能となる。このような女性像は伝統文学に描かれている耐え忍ぶ貞節な女性と一線を画しつつあり、自分の情感を大胆に表して愛を追いか求める姿は、最初期の近代的女性像と見なしてもよいだろう。作者はこれら未亡人の愛の幻想を無価値・無意味なものとして否定することなく、人間の内的現実として暖かい理解を示していると言えよう。

五四新文化運動の後、女性が性意識の目覚めから社会の不条理に気付き、苦悶を感じ、叫び声をあげることが題材とする作品が多く現れた。例えば、楊振声の「貞女」（『新潮』第1巻第2号）は未亡人の微かな叫び声を取り上げている作品である。位牌を抱いて結婚したある未亡人が、心の奥に潜んでいる性的衝動を自ら意識するが、封建的な旧道德の枠を抜けきれず、悲惨な運命から逃れられない様子を描いている。ここからは作者の社会への強い批判が読み取れる。魯迅が指摘しているように、「彼らは、一篇作るたびに、すべて『目的があって』発表し、社会を改革する器具として使用していた」<sup>356</sup>。

また俞平伯の「狗和褒章」（『新潮』第2巻第3号）には、30年間貞節を守りながら、一匹の犬と一緒に暮らした未亡人が顕彰の記念章（牌坊）を授与された際に息を引き取るさまを描いている。この貞操を守るため死をも辞さぬような女性の苦痛を暴露し、封建的道德の

不条理を強く批判した作品は、主に女性問題に主眼を置き、彼女らの悲惨な境遇を描くことを通して社会批判の意を表明している。一方、五四時期には女性の内的な心の動きや、性的衝動、葛藤などにあまり関心が払われることはなかったが、20年代後半になると女性が自由解放を叫び、原始的な欲望を直視しようとする作品も現れるようになった。例えば、施蛰存、劉呐鷗、葉靈鳳、章克標らの作品は原始的な本能に従い、旧道德の禁忌を破ろうとする、性意識に目覚めた未亡人を描き出した。章克標は短篇小説「秋心」（初出不明）のなかに、若い留学生が、夫が死んで数年後、初めて男性と散歩し、心を乱した物語を描いている。亡夫の肖像写真は彼女を勇気づけたものの、次第に空しくなり、新しい男性との出会いが彼女の眠っていた欲望を呼び起こした。その後、彼女が肖像写真を隠したことは、自分の欲望を直視しはじめた第一歩として読み取れる。

創作の中で、作家自身の素地と外的な影響が互いに融け合うケースはよく見られる<sup>357</sup>。施蛰存が創作と翻訳に同時に携わるなか、翻訳文学が彼の文学にどのような働きを果たしたかを以下具体的な作品を取り上げて考察したい。

#### 一、未亡人の「生」の苦悶への同情——ハムスン「生の声」と施蛰存「周夫人」

前節で述べたように、ハムスンの「生の声」<sup>358</sup>（短篇小説集 *Siesta*、1897 に収録）は中国で最も多く翻訳された短篇小説である。30、40 年代に数回版を重ねた『挪威短篇小説選』、『挪威最佳小説選』などはこの作品を欠かさず収録した。未亡人の抑圧、衝動を正面から取り上げ、生（＝性）の賛美をテーマとするこの作品は、当時多くの作家、読者たちの共鳴を呼んだと思われる。この節では「生の声」を取り上げ、施蛰存の未亡人を描いた小説と比較してみよう。

「生の声」は、小説の語り手である一人称の男性「私」がある夜、前日に夫を亡くした若い女性に声をかけ、一夜を共にする体験を語る。喪章をつけて深夜の街角を彷徨う女性の挙動に惹かれ、「私」は家まで送ろうと申し出る。しかし彼女は「私」の手を握り、自分の部屋まで誘う。「私」は彼女の部屋を見回し、彼女に対する好奇心を更に高める。女性は「私」にキスをし、名前はエレンだと告げる。「私」は彼女の「身内から溢れ出ている荒い波打つ生の力」を不思議に思うばかりだった。翌朝、再び彼女にキスを求められたが、その隣の部屋から異様な空気が漂っていることを感じ、年配の男性の棺桶を目にした瞬間に「私」は衝撃を受けるが、別れ際に女性と二日後のデートの約束を交わす。その後、「私」はカフェに入り、住所録をめくり、彼女の名前、番地を確認し、朝刊の訃報欄もチェックすると、エレンが掲載した訃報を見つけ、あの死体が彼女の亡くなったばかりの夫であったことを知る。最後に、「私」は彼女と同一化し、「年の離れた夫が逝去した後、若い未亡人はほっと息をつき、生は今こそ歓喜に躍る狂熱を以て女に呼びかけている」と考えて納得するのであった。

小説は一人称の視点である夜のスリリングな体験を述べて、「私」のエレンに対する時々微妙な心情の変化をリアルに再現している。「性（＝生）の愉悅」を追求する原始的な人間存在の生命力に駆られたエレンが発する「生の声」への謳歌も読み取れる。「私」は年配の男性の死体を見た瞬間に衝撃を受け、それが物語のクライマックスとなっている。その年配の死体がまさに二人が一夜を過ごした部屋の隣に置かれていたことを考えると「私」は戦慄を覚えたが、翌朝、死亡広告をチェックして死んだ男性はエレンの夫であると知ると、エレンの立場に立つようになり、夫の死に悲しさを感じるよりも、むしろ安堵を感じるのである。

このように、当初のエレンの情熱への理解不能な状態から、死体によって受けた衝撃を経

て最後にエレンに同情するまでの「私」の心情の移り変わりが浮き彫りになっている。小説の結末部のエレンの気持ちを表す一行に関しては、「解き放たれた溜息をついた」、「さっぱりしたような軽い溜息をついた」、「ほっとした溜息をついた」、「救われたように溜息をついた」、「釈放されることが出来た」<sup>359</sup>などの数種の微妙に異なる表現が見られる。それは施蟄存の珠玉短篇「周夫人」（1926）を想起させる。周夫人も未亡人であり、亡夫の顔にそっくりだという口実で幼い私（小説の語り手）に好意を持ち、寝室まで誘い、飴をなめさせ、懷に抱きこみ、息を激しく波打たせている。数十年後、中年になった私は再び周夫人を思い出し、彼女の湧き上がった情欲を理解する。小説では女性の抑圧された情動が解き放たれるものの、燃え上がった情熱は急速に幻滅に転化していく。「私」は回想の中で、当時の周夫人の自分に対する欲望を再現しており、結末で「私」は周夫人と「同一化」し、彼女の苦悶を理解したかのような溜息をついており、この点は「生の声」における「私」のエレンに対する心情を彷彿させると言えよう。

「周夫人」の結末にも数回の書き換えが行われている。例えば、1926年の『瓔珞』初版本に収められた初出版では、「我是在尽着淌一些当时所应当淌而不曾淌的泪珠」（「私は当時流すべきだったのに流れることのなかった涙を、思う存分に流していた」）と書かれている。

中年になった私は、12歳当時の情景を回想し、思わず涙を流した。実際、この涙は当時流すべきものであったと追憶する。周夫人の夫への想念が少年の私に投射されていたことに、まったく無反応だった「私」がいた。当時、彼女の情動は全く理解不能であったが今になって彼女の苦悶を理解できたようであり、あの場にいた「私」は本当に涙を流すべきだったと悟る。涙を流すべき、という思いは、その時点での「私」の境遇にも関わると思われる。時の流れに伴い、「私」の周夫人への思いも当然変わっていくはずだ。これは後の版に見られる施蟄存の書き換えからうかがえる。1929年の『上元灯』第二版収録の際に、当該部を「我是在恍然想起了她那時的心緒，而即使事隔多年，我也还为她感觉到一些悱惻呢」（「私はその時の彼女の心情を急に思い出し、長い年月を経ていたにしても、私は彼女に些かの悲しみと憐れみを感じるのだ」）と書き換えているのである。『瓔珞』版では、「私」は涙を流すような感慨を覚えるに留まっていたのに対し、改稿後の1929年版では悲しみと憐れみを感じるまでに気の毒な彼女の心情と同一化したのであろう。

1995年に『十年創作集』に収録する際にも、この一節を「我是在恍然想起了她那時的心緒，而即使事隔多年，我也还为她感觉到一些苦悶呢」（私はその時彼女の心情を急に長い年月を、私は彼女に些かの苦悶を感じるのだ）と再び書き換えている。悲しみと憐れみという感情の表現は、「苦悶」というさらに深みのある言葉に再び書き換えられたのである。彼女は未亡人として、亡夫に未練を抱きながら、新しい恋を追い掛ける機会もなく、少年の私に好感を持つことしかできない。少年であるからこそ、彼女にとって一種の安心感が得られることになる。なぜなら、少年の私は大人の世界を知らないだけでなく、彼女の送っている静かな生活に波瀾をもたらす危険性もないからである。彼女もそれを承知の上でありながら、「私」の無反応に対して思わず一種の寂しさを味わい、「私」が彼女と同じ思いを共有できないことを遺憾に思っていたのであろう。それこそが彼女の「苦悶」の所在であると言えよう。数年後、私はようやく彼女の心情を理解でき、彼女に同情を覚えて「苦悶」さえも感じたのではないか。

このように「周夫人」の前半部は「生の声」と似通っているが、欲望を抑えて再び閉塞した未亡人生活に回帰したという後半の展開は大きく異なっている。施蟄存がここに描いてい

る周夫人の心理と行動は、「生の声」のエレンと共通点が見られる。女性の微妙な心の移り変わりや、一人称の観察眼の感受性など、ハムスンからの影響が感じられる。もし、「私」が12歳の少年ではなくもう少し年上であれば、周夫人がエレンのような大胆な行動をとり、「私」と一夜を過ごした可能性は十分にありうる一方で、貞節が重視された当時の中国では、それにより彼女は破滅に至ったことであろう。当時、「生の声」が収録されている英訳小説集<sup>360</sup>などの外国語原版図書が上海で入手しやすいく<sup>361</sup>、「生の声」が『朝花』などの人気文芸誌で訳載されていたことから、施鰲存がこの作品を読んでいた蓋然性は高いと思われる。エレンの発した「生の声」に触発され、初めて心理分析的な手法を試みた1926年の「周夫人」を思い出し、そこに表した女性の性的な衝動との同質性及びプロットの類似を意識したことがうかがえる。

「周夫人」に見られる未亡人の抑圧された情欲に関する描写は、美しい抒情詩のようである。少年時代の「私」と周夫人が二人で演じるドラマには「生の声」ほどの強烈さは感じられないが、中年に至った後の「私」の感慨には、濃厚な陳年老酒の味わいのような深い余韻が漂っている。周夫人がエレンのように欲望を満たす行動に走らず、理知を以て情感を押さえようとして心理のバランスを保っている点は中国的であり、古典文学であれば李商隱「錦瑟」の一句「此の情 追憶を成すを待つ可けんや 只だ是れ 当時 已に惘然」（此情待可成追憶，只是当時已惘然）<sup>362</sup>を思い起こさせるような余韻を残す。また、作者は作中人物の抱く愛の幻想を無価値・無意味なものとして否定することはなく、人間の内的現実として暖かい理解をしめしているように思われる。

「生の声」はノルウェーで発表された当時、その評価は決して高いものではなかった。ハムスンより一つ上の世代の名作家ビョルソンはこの小説は吐き気を催させるものであると批判し、検閲局長がこの小説を取り締まるという事件も起きた<sup>363</sup>。また、もともとノルウェー作家連盟はハムスンに1200クローネの特別手当てを支払うことを決定していたが、「生の声」の悪評によってこれが無効となっている。一方、日本では「生の声」の邦訳者、ドイツ文学者西澤富則がこの作品を高く評価し、「彼の面目を躍如たらしめるものがある様に思う」と記している<sup>364</sup>。中国においてはハムスンの短篇小説のなかで「生の声」が最も多く翻訳された作品である。その多くはエレンを目覚めた新女性と見なし、中国の女性を鼓舞する意図で翻訳されたものと思われる。

一方、「生の声」を女性解放の側面から捉えて高い評価を与えた例もある。例えば、「生の声」の翻訳者の一人梅川は、中国ではエレンのように年の離れた夫と結婚するケースも稀ではないが、「そもそも、中国の婦人たちはこのような勇気を持たず、社会も厳しく監視している」<sup>365</sup>と述べている。また、エレンが官能への憧れを抱え、生身の叫びを発したのに対し、「目下国内（中国一筆者注）の多数の妾たちが、泰然と処し、目覚めさえ知らないことは極めて嘆かわしい」<sup>366</sup>と指摘した者もいる。このように中国女性の性的欲望を抑圧する社会的状況が注目されていたが、語り手「私」の冷静な観察や、エレンの情緒の微妙な移ろい、生の歓喜を上げるなどの内的心理にはあまり関心が示されていなかった。

## 二、未亡人の愛の幻滅——施鰲存「春陽」とシュニッツラー『ベルタ・ガルラン夫人』

次に、施鰲存の同じく未亡人を描いた「春陽」を見てみよう。上海の郊外昆山の未亡人嬋阿姨は、結婚式の前に夫が病死してしまう。彼女は女性としての幸せを諦め、夫の財産を目当てに位牌と「結婚」し、膨大な遺産を抱えたにもかかわらず質素な暮らしを送っている。銀行に行くある日、上海のにぎやかな街と温かい春の日差しに誘われ、思い切って恋でもしようと思い、銀行員の男性に好感を抱いたが、彼は自分のことをただの客と扱っており、そ

の親切も事務的なものに過ぎないと悟り、さっさと位牌のある家に帰って行く。未亡人の嬬阿姨は恋愛への切実な憧れを抱くが、幸せを手に入れようとしてもう一步踏み出す勇氣はなかった。

作品の原動力となっているともいえる嬬阿姨の内面の動きを、施蟄存がどのように捉えていたかを押さえておく必要がある。小説の冒頭に、「彼女の心は動いた」（原文：她心里一動）という一言がある。これは彼女の心に芽生えた感情を表現することで幻想的な愛への展開のための伏線をはっている。上海の大通りを歩いている嬬阿姨は楽しそうな顔つきの若い男女の姿を目にし、自分の季節遅れの服を意識し、気後れを感じる。ここでは都会のモードを意識するだけでなく、都会を離れて田舎で生活していた自分の身体を意識する契機ともなっている。暖かい春の光が彼女の眠っている性を呼び起こしたように、彼女は自分の身体のすべてに血が猛っているような気になる。官能への憧れを抱えた身体が自ずと叫びを発するように、「大きく彼女を揺り動かすような自分への反抗心が不意に胸のなかで熱く燃え始めた」（原文：一陳很騷動的对于自己的反抗心驟然在她胸中灼熱起来）。自分の身体がまるで自分の身体ではないかのような意識の乖離が引き起こされ、田舎昆山での惨めな生活が脱しようとする彼女の衝動が暗示されている。

暖かい光の誘いで嬬阿姨は上海でゆっくり遊ぼうと決意した。そして、レストランに入ってから綿々たる白昼夢が展開していく。まず、子供連れの一組の夫婦を羨ましく見つめ、一般的な家庭を知らない自分を惨めに思う。嬬阿姨は彼女と同じ年格好である妻に、自分が「死んだ許婚者と結婚した人間に見えるだろうか（原文：她看得出我是个死了的未婚夫的妻子吗？）」と自問して落ち込む。後に上品な男性が彼女の視線に入り、彼はきっと銀行で働いているだろうと想像し、また密かに午前中に遭った銀行員の顔と比較し始める。これらの一連の幻想によって、彼女の潜在的な好意の対象が銀行員であることが判明する。これと冒頭部分の彼女の「心が動いた」ことは互いに呼応している。嬬阿姨は不意に自分の容姿を鏡で見たくなり、その際ファンデーションを塗り忘れたことを後悔する。この気持ちは、異性の前で自分の外観が気になり始め、自意識が呼び起こされたことを示している。その後、再び銀行員のことを思い浮かべ、彼女の髪の毛が彼の顔に触れ、肩が彼の胸にあたる光景を夢想する。髪の毛、肩などの身体の部位の接触への連想はまさに性的な欲望を反映したものであり、ここに彼女の心の奥に潜んでいる性的欲望があぶり出されていく。

周夫人は少年の私を抱きしめるという自らの愛欲の衝動によって一刻の幸せを味わおうとしたが、嬬阿姨は銀行員に恋愛の妄想を抱いたり、体の触れ合いで快感を感じたり、後者は別種のリアリティを感じさせている。周夫人の少年の「私」を抱きしめるという愛欲を秘めた挙動は、過去の自分と決別し、新たに生き生きとした女性として再生したいという自己変革の強い願望であるようにも読み取れる。一方、嬬阿姨は銀行員に対する愛欲の芽生えを、彼の親切は顧客に対するものに過ぎないという自らの合理的な解釈によって再び抑圧している。このように施蟄存は両作で未亡人の敏感で繊細な心に湧き上がる情熱とこれをめぐる彼女たちの内的な葛藤を丹念に描いた。彼女たちは自分のそれまでの生活様式を突き破ろうと願ってはいるが、エレンのように見知らぬ男性を誘い、一夜を共にするほどの勇氣は持たない。彼女たちは結局、未亡人の悲哀から脱出できないまま、その恋愛の欲望は妄想で終わってしまう。この時期の施蟄存作品には、ほかにも夜歩きする女性が貞節を破ろうとする衝動に襲われたり、姦通願望を抱く女性像が多くみられる。例えば、「蝴蝶夫人」（1933）における大学教授の浮気する美人妻、「宵行」（1933）における不貞する棺桶屋の美人妻などは、上述の未亡人の系譜作品における妄想を実行するに至ったものと言えよう。

このように施鰲存文学の重要なテーマの一つとして女性の性的衝動が挙げられる。施が1929年に翻訳したシュニッツラーの『ベルタ・ガルラン夫人』は、未亡人が抑圧された情動を解き放ち、日常を打ち破ろうとしたものの、結局恋の心は急速に幻滅へと転化してしまうという経緯を描いている。年の離れた夫が死んだ三年目のある日、ベルタ・ガルラン夫人は昔の恋人エミールがバイオリストになって名声を博しているとの新聞記事を読み、思わず過ぎ去った恋への追憶に沈む。突然血が騒ぐような騒動を感じ、彼に手紙を送る。やがてウィーンで彼と再会し、一夜の思いを遂げる。彼女は初めて静かな田舎で生活していた自分を否定的に思い、もう一度女としての幸せを味わいたいと願望する。その後も数回ウィーンを訪れ、エミールとのデートを重ねるが、やがてエミールが自分の肉体にしか興味を持たないことに気付き、高揚していた愛への憧れを断念し、再び静かな未亡人生活に戻っていく。

『ベルタ・ガルラン夫人』は未亡人の愛の充足への渴望と、再び既成の道徳に従う過程とを描いている点で（自己の願望の投影としての幻想→過ぎ去った春への回顧→幸福への渴望→愛への陶酔→陶酔から覚醒・幻滅）、施鰲存の「春陽」のプロットと同じ構造をなしている。またウィーン―田舎、上海―昆山というそれぞれ対照的な舞台で展開された内面に苦しむ女性の抑圧された生活、あるいはまた社会に対する無力な反発というプロセスは、ベルタ・ガルラン夫人―婢阿姨という女性像の対照と重なり合っている。柳西夷が指摘しているように、中国にもベルタ・ガルランのような女性は大勢いる<sup>367</sup>。施鰲存は「春陽」で中国の「ベルタ・ガルラン夫人」としての婢阿姨を描きだしたと言えよう。

『ベルタ・ガルラン夫人』の中国語訳<sup>368</sup>は数種出版されており、40年代まで数多くの読者に読まれていたことがわかる。当時、代表的なドイツ人作家としてシュニッツラーが紹介されることが多く、その繊細な心理描写とロマンチックな筆致とにより読者の人気を得、数回も版を重ねたものと考えられる。「通俗本文学名著」シリーズに収録される李志萃訳『苦恋』の序文には、『苦恋』は「最も悲惨な婦人問題を孕んでいる」<sup>369</sup>と記されている。李訳の中華書局版が四版も重ねて出されていたことから見れば、恐らく当時の読者がベルタ・ガルランをめぐる婦人の生存問題にも熱い視線を注ぎ、女性のリアルな性の欲望に関心を示していたのであろう。

### 三、生の叫びの文学的系譜

比較文学の研究者矢野峰人が述べる通り、「影響が一度全然内面的なものとなり、創作心理にまで立ち入り、例えば一つの情調情緒展開の様式を学ぶというような方面になると、影響の有無を判ずることは決して容易でない」<sup>370</sup>。フロイディズムや、シュニッツラーらの作品から影響を受けたという施鰲存自身の告白があっても、その影響を具体的に突き止める作業は必ずしも容易とは限らないだろう。シュニッツラーとハムスンの二人は、施鰲存が興味を示し、作品を翻訳した作家であり、彼らの未亡人を描いた互いに似通った作品にも横糸のつながりがある。シュニッツラーが女性の抑圧、女性解放というテーマを正面から取り上げた三幕劇「生の叫び」（Der Ruf des Lebens）は1906年2月に上演されている<sup>371</sup>。父の看病を余儀なくされるマリーが父を殺し、「呼び寄せた生」を聞いたかのように、思いを寄せる青年将校マックスの元に飛び込むというストーリーである。『生の叫び』は因習的文化の苛酷で抑圧的な側面とともに、愛の本能に屈して因習の世界の外に満足を求めようとする試みの儚さを描いている<sup>372</sup>。作中では死を前にした人間の生を呼び戻す声に焦点を当てており、この生の肯定は非常に現代的である。

シュニッツラーが『生の叫び』を執筆するに当ってハムスンの「生の声」を意識したかど



うかは明らかではないが、二つの作品はいずれも女性の生（性）を肯定的に描いており、類似の構造を共有している。施が彼らの作品を選んで翻訳したのは、恐らく単に自分の作品との共鳴を見出したためのみならず、世界的な作家との同時性を獲得したことがより深層における動機であろう。施が1929年に「新路径」を歩み始めるという宣言を打ち出したとき、彼はシュニツラー、ハムスンらと文学的同時性を保ちながら、翻訳活動により自らの文学の幅をさらに広げていこうと目論んでいたのではあるまいか。

魯迅が「随感 40」に「人の子は目醒めた。彼は、人類のあいだには愛情がなければならないことを知った。これまで、若い者、老いたる者がともに犯してきた罪惡を知った。かくして苦悶が生まれ、ついに口を開いてこの叫びをほとぼしらせたのだ」<sup>373</sup>と述べている。20、30年代当時においては「苦悶」、「叫び」などを描いた作品は人気があった。このことはハムスンの「生の声」に与えられた数種の中国語訳の題名「生的叫喊」、「生命之呼声」を見れば分かるだろう。この作品はまさに当時典型的な「叫び」をモチーフとする外国文学の翻訳であった。シュニツラーの戯曲までもが『生の叫び』と題されていることから、19世紀末、20世紀初頭において「叫び」を題名として用いることは、恐らく世界的な文学潮流を背景にしたものであったと考えられる。

以上述べたように施蟄存はシュニツラー、ハムスンらと文学的「同時（質）性」を保ちながら、さらに翻訳活動を経て心理分析的な手法を加速し、自らの文学の幅を広げていった。この経験が彼の「新路径」を歩む自信を倍増させたのだろう。作家の持ち合わせた稟質や中国伝統文学の素養などの違いから、施蟄存とハムスンやシュニツラーとを同一線上には置くことはできないが、施がテキストを世界文学と同等の立場に位置付けたその独自性は見直すべきだろう。彼が心理分析的な手法を用いて未亡人の内的な葛藤をえぐり出したことは世界文学との共時性を獲得し、中国的な色彩を帯びた現代派文学を創りだした。

施蟄存は文学修行期に翻訳と創作という二足の草鞋を履きながら、林琴南、蘇曼殊、周瘦鵑らの翻訳・創作から多大な影響を受けていた。また、施と同世代の朱維基、孫昆泉らも周瘦鵑の創作と翻訳活動に啓発されて、鴛派の刊行物『最小』などで創作、翻訳作品を発表した。これらの事実は施蟄存らの文学活動の一斑をうかがうには有益な資料であると思われる。

若き施蟄存が作家としての出発点において書いた「廉価的麴包」には、ハムスンのみならずチェーホフの影響もありえよう。また『江干集』に収録された「進城」、「二日的出家」などは、チェーホフの「かき」の子供の視点による観察や、モーパッサンの下層社会の暗黒さの暴露などと一脈通じる箇所が見られる。施はこれらの模倣的な試作を自分の正規の創作と見なしておらず、1933年の「我的創作生活之歷程」では『江干集』から『追』までの作品群に対して否定的な態度を取ったが、これらの模倣的な試作と、習作期に鴛派を通じて西欧文学を受容したこととの間には脈絡はないのであろうか。その後発表された「春陽」、「鷗」、「黄心大師」などの作品は、旧小説から養分を吸収した上で、ハムスン、シュニツラーらの手法と自身の文学の素地とを融合させたことの産物でもある。このような近代西洋文学と伝統中国文学との融合は施蟄存独自の外国文学受容と言えよう<sup>374</sup>。

施蟄存はその文学生涯において大勢の外国作家に興味を抱き、その作品を翻訳した。鴛派作家、新文学派作家たちと同じくモーパッサン、チェーホフらの19世紀的な文学手法を取り入れ、日本の自然主義、私小説風の小説を試作し、アラン・ポーの怪異的な作風への憧れ、またハムスン、シュニツラーらの浪漫主義的な文学、シェンキュヴィチ（ポーランド）、イワン・ヴァーゾフ（ブルガリア）らの弱小民族文学などから多種多様な養分を得たと言っても過言ではない。施蟄存文学を理解するためには、施の創作の変遷に即して、最初に具体

的にどの作家からテーマや着想の借用などの影響を受けたのか、文壇にデビューした後、いかに関心を移し自らの叙法や文体・スタイルを確立したのか、またどのような道程を経て再びチェーホフらの作家への関心を回復したのかといったことを徹底的に検証することが重要なのである<sup>375</sup>。

## 第五章 結論

『最小』第117号掲載の「中国文芸協会成立会記」（記者、1923年10月23日）によると、上海大世界の寿石山房で鴛派作家の包天笑、周瘦鵬、胡寄塵、徐卓呆ら39人が参加して「中国文芸協会」の成立大会が開かれ、袁寒雲が主席に選出されている。この大会で採択された中国文芸協会「簡章」によると、当協会の宗旨を「文芸を研究し、道徳を磨き、互助の精神に基づき、文化の発展を求める」<sup>376</sup>と定めている。また、同協会主要メンバーより一回り下の世代の施蟄存ら「後進作者」は、新文学派作家に負けない情熱を抱いて文学創作の手法や中国文学の将来像を真剣に検討している。施蟄存らは鴛派社団の星社や新文学派の文学研究会を参考に維娜絲文学会、蘭社を発起して文壇へのデビューを果たした。胡寄塵、施蟄存、朱維基、黃厚生らは新文学派、鴛派双方の刊行物に投稿し、両派の作家たちと交友関係を深めたが、やがてその内の一派の文学にアンビバレントな感情を持ち、別の一派の道を歩んでいった。

施蟄存は最初は革新前の鴛派刊行物だった『小説月報』に投稿したが、同誌の編集者であった惲鉄樵は一篇も採用しなかった。そのため、彼は『小説月報』を高級な「旧文学」刊行物だと思い込むようになった。その後、『礼拝六』、『半月』、『星期』などで続々と自作品を発表し、文学少年の夢を実現することができた。確かに齋藤敏康氏が述べるように、これらの刊行物の「文学的性格が施蟄存の創作の規範として作用していくことは避けがたい」<sup>377</sup>状況が存在した。しかし、興味深いことに、彼の投稿先は多岐にわたっており、まず「廉価的麴包」を『民国日報』副刊「覚悟」で発表し、後に同紙に投稿して返却された「恢復名誉之夢」（1922）などを鴛派刊行物に投稿しているのである。「覚悟」から返ってきた作品を無修整のまま鴛派刊行物に投稿することは、彼が特に「創作の規範」にこだわらなかったことを物語っていると言えよう。自分の文学の発表場所の確保を優先して「軽率」に鴛派刊行物に投稿したのは、その投稿先の文学的性格をあまり問題にしていなかったためであると言えよう。

本稿では蘭社、青鳳社、瓔珞社における施蟄存の社団活動を考察してきたが、彼の鴛派から新文学派への移行とは、「旧」文学から「新」文学への突然の転進ではなく、持続的有機的な文芸活動の発展であったと言えよう。彼は「新文学への転進」について繰り返し述べているが、その転進時期及び文学創作の起点に関する説明には度々微妙なズレが生じていることは興味深い<sup>378</sup>。従来は『小説月報』での「娟子」の発表と、葉聖陶らの新文学派作家との交遊が施の新文学への転進の証左とされてきたが、転進後の作品を初期の試作と比べて読むと、実は質的な断絶よりも連続性の方が濃厚である<sup>379</sup>。鴛派と新文学派両者においては題材の扱いや、スタイルなどの変遷のプロセスは全く異質のものではなく、ある程度の類似性が同時に「作品の中に飽和する状態に達するならば」<sup>380</sup>、両者の分け目は相当に曖昧と言えよう。当時の文学状況を考えれば、鴛派と新文学派の間には明らかな分水嶺は存在せず、むしろ両者が重なり合う面を持っていたことも視野に入れるべきではないだろうか。施蟄存は、清末以来の旧文学及び五四新文学を吸収し、30年代という民国期文学黄金時代において本格的な文学活動を開花させた。

「新文学の著名作家の中で、鴛鴦蝴蝶派旧文人と付き合い、また悠々自適の名士異人とも親密な関係を保っていたのは、恐らく施蟄存一人だけであろう」<sup>381</sup>と李剛が述べている通り、施蟄存の「新旧ともに異議なし」という文学観は、人間関係においても貫かれていると言えよう。

1932年、上海事変勃発に伴い、上海の出版業界は大きなダメージを受けた。業界最大手の商務印書館が刊行する唯一かつ最高の月刊誌であった『小説月報』が停刊を余儀なくされたため、文壇に一種の空白が生まれてもいた。施蛰存は短期間のうちに『現代』創刊号の編集に取りかかり、「よく顔を合わせる友人」が執筆陣の中心となって無事に編集を終えた。後に、同人雑誌の枠を遥かに超えた大型雑誌となる『現代』にふさわしい顔ぶれが、創刊号の紙面にはすでに揃っていた。

また、30年代に左翼作家の間で熱心に討論された「文芸大衆化」をめぐる議論では、大衆を教育することや、「大衆化」、「化大衆」は政治闘争の一環と見なされ、いかに「旧形式」を再利用するかの議論が後を絶たなかったが、新文学派は大衆の実際の受容能力をあまり考えずに自説を通したため、大衆の文学にはなれなかった<sup>382</sup>。また、聶紺弩らが催した宣伝・文学・旧形式の利用についての座談会の中でも、新文学派に否定された旧形式を再利用することの必要性が議題に上り、文学の通俗性、民族性、大衆性を実現するため、形式と内容を密接にさせて人間の心の真実に触れる新たな文学を創出することが提案された<sup>383</sup>。施蛰存は文学自体の問題に注目し、「大衆化」においては「大衆」の意味には様々なレベルがあると述べ、その中から大衆をある程度の文化基礎がある人たちと想定し<sup>384</sup>、「中国の純粋な白話」<sup>385</sup>を使って「平話」小説を試作した。この「平話」小説の試作は、朱自清らが1922年に打ち出した民衆文学論<sup>386</sup>の「文言、章回小説、文明新戯、礼拝六派小説等」を読む第三種の大衆を対象とする創作の具体的な試みと見なしてもよい。

さらに、伝統的な話本、演義、伝奇の叙述スタイル及び心理分析手法を取入れながら、最大限に欧化文法を排除した「獵虎記」、「黄心大師」を発表した。施蛰存は、中国人の伝統的な文学鑑賞の習慣に配慮してあえて叙述的な描写法を使用するのは、「芸術」のためであり、同時に「大衆」のためでもあった、と告白している<sup>387</sup>。このような試みも維娜絲文学会の主旨を想起させ、「新旧文学ともに異議なし」という文学的立場の一展開とも考えられよう。彼が行った文学的な試みは、新たな大衆化小説に鴛鴦的な伝統スタイルと西洋文学の心理分析手法との両者を取り入れたものであり、中国文学の「連続性」<sup>388</sup>の側面がうかがわせる。

また、施蛰存が目指した文学は、「自由で、創造的な精神」が溢れているものである。蘇曼殊、周瘦鵬らの恋愛小説を愛読し共感を覚えた施蛰存は、最初期の試作として「玉碎記」、「綵勝紀」などの哀傷の情緒漂う悲恋物語を発表した。また、「綵勝紀」の雲玲と懷玲の従姉弟同士の恋愛や、愛の証として綵勝が用いられるなどのディテールは、沈復の『浮生六記』を彷彿させる。「上元灯」に描かれる淡い恋愛の喜びや少女の繊細な心情、男女間の含蓄ある愛情表現などは、伝統恋愛の系譜から外れてはいない。ここに現れている気立ての優しい少女の姿は施蛰存の中の理想的な女性像と重なりあっていると言えよう。さらに、これらの古典文学に現れている意匠、細部の描写など、ハムスン、シュニッツラーらの文学に現れる世紀末の都市風俗、男女の恋愛心理、内面の機微などにも一脈通じると言えよう。

施蛰存は自らの初恋の思い出を下敷きに、異なるスタイルを用いてその記憶を再生しているが、これらの作品にはむろん一貫した要素が通底している。「玉碎記」から「上元灯」、「扇」、「梅雨之夕」へ、そして後期作品の「鷗」<sup>389</sup>までの諸篇に描かれている純情は、施蛰存自身の過去の忘れがたい初恋体験を抜きに語られないものでもあろう。施蛰存は「憶」、「記」、「紀」のスタイルを用い、過ぎ去った時間を探

し、失われた思い出を求める幼少時代の甘美な追憶として語るのである。過去の出来事を述べている途中に、現在の時空の出来事や感想を挿入するフラッシュバックの手法がしばしば見られる。これは、東洋的な詩意を下敷きにしつつ、西洋的ロマンチズムの回憶的なスタイルにより内面心理に大胆なメスを入れる解剖であり、いわゆる伝統的な語りと西洋的な叙述方とを融合したものと思われる。

施蛰存文学の基底をなしているのは「記憶」、「恋愛の思い出」の再生である。伝統文学と西洋文学を受け入れる下地を十分備えていた施蛰存は、鴛派の新鋭として文壇でデビューし、中国における心理分析的な作品創作の先駆けとなり、『現代』派作家群のリーダーとして活躍した後、30年代の文芸大衆化運動において、彼なりの新しい試みである「黄心大師」などの作品で成功を収めた。五四新文化運動から30年代文学の黄金時代に至る時期において、施蛰存は伝統と西洋とを融合させた有力作家の一人と言えよう<sup>390</sup>。

#### 脚注：

- 1 それぞれ『文芸春秋』第3巻第4期（1946年10月）、『文潮月刊』第3巻第3期（1947年7月）、『文芸春秋』第6巻第1期（1948年1月）に掲載。「二桶」の執筆は1947年12月であり、残る2編の執筆時期は不明である。応国靖「施蛰存年表」、『施蛰存』三聯書店（香港）、人民文学出版社聯合編集出版、1988、322頁によれば、「超自然主義者」は施蛰存が執筆する予定であった長編小説の一節であるという。
- 2 作品リストは付録資料を参照。
- 3 黄軾陶「卡党小伝」、『最小』第70号（1923年7月25日）参照。原文：描摹勝常。蓋亦学有勝人耳。姚鵬雛は「旧文学の探究は最も優れている」とも評価していた。（『江干集』の題詩。原文：旧学焚膏汝最賢。）
- 4 「編輯室中之記者」、『蘭友』第10期（1923年4月21日）。原文：文字哀艷。筆致古雅。極為名貴。
- 5 蘇州癸亥社の同人誌『虎林』第5期（1923年5月26日）。原文：論作小説頗能中肯亦小説作者之一助也。
- 6 「小説界消息」、『蘭友』第11期（1923年5月1日）。原文：青萍对新文学和旧文学都有心得和研究。
- 7 朱智光「評『江干集』」、『最小』、第93号、1923年9月9日；香港匿名CCC「对于『江干集』中『鄉人』一編有所懷疑」、『最小』、第124号、1923年11月10日；徐碧波「浪漫談」、『世界小報』第271号、1923年11月13日；金君珏「讀『江干集』後」、『世界小報』第377号、1924年3月7日；姚民哀「編集完了」、『世界小報』第292号、1923年12月4日などがある。
- 8 鄭逸梅『民国旧派文芸期刊叢話』、魏紹昌編『鴛鴦蝴蝶派研究資料』上海文芸出版社、1962、332頁を参照。
- 9 「紅禪室漫行」は『広州民国日報』1924年2月18日、6月24日、6月27日に掲載。拙稿「『広州民国日報』に新発見する施蛰存の作品について」、『中国文芸研究会会報』第351号、2011年1月を参照。
- 10 杭州婦女学社が1920年6月に発刊した旬刊誌で、浙江省の婦人界で最も早い刊行物である。編集主任は何慨秋。
- 11 原文：説来精透極了。此君の小説詞章。可算臻極。
- 12 それぞれ『現代評論』第6巻第141期（1927年8月20日）、第6巻第148期（1927年10月8日）に発表。
- 13 『『上元灯』與我的記憶』、『新文芸』第1巻第3号、1929年11月15日。
- 14 1929年12月28日、施蛰存宛ての書簡に『上元灯』への称賛の言葉を贈った。孔另境編『現代作家書簡』花城出版社、1982、153頁を参照。
- 15 沈從文「論施蛰存与羅黑芷」、『現代学生』、第1巻第2期、1930年11月。
- 16 AB「介紹批評与討論『上元灯』」、『金屋月刊』、第1巻第6期、1929年6月。なお、「AB」が誰のペンネームであるかは特定できていないが、『金屋月刊』の編集者である邵洵美、章克標の可能性が高い。

- 17 沈子成「読上元灯」、『胡芦』創刊号、1931年3月；沈善堅「施蛰存和他的『上元灯』」、『読書月刊』第2卷第2号、1931年5月10日；張平「評幾篇歷史小説」、『現代文学評論』第1卷第3期、1931年6月10日；樓適夷「施蛰存的新感覺主義」、『文芸新聞』第33期、1931年10月26日等がある。
- 18 青野繁治「施蛰存『阿檻公主』と郭沫若『孔雀胆』」、『野草』第66号（2000）；斎藤敏康「第66号合評（2）」を参照、『野草』第67号（2001）。
- 19 許道明『海派文学論』（復旦大学出版社、1999、80頁）に、郭沫若は抗日戦争後の施蛰存が一文字さえも書けなかったと皮肉な口調で語ったと記されている。
- 20 原文：一条把老路当作新路的新路。許傑「施蛰存的黄心大師」、『大晚报』副刊「火炬」第5版、1937年6月8日を参照（未見）。
- 21 例えば、海銀「読了施蛰存解説魯迅の『明日』以後」、『学习生活』第1卷第6期、1940年10月10日；羅遜の「学習与研究」『文学月報』第10卷3期、1940年10月；「閑輿魯迅的《明天》」、『抗戰文芸』第6卷4期がある。斎藤敏康「施蛰存と陳西の魯迅『明天』論」、『立命館経済学』第52巻第4期、2003年10月を参照。
- 22 疎影「新文学者也是從旧文学堆里钻出来——施蛰存之文言小説」、『紅緑』第2巻第1号、1936年1月を参照。
- 23 「文学史の見直し」とは、従来「左翼」と見なされる作家だけに高い評価が集中していた傾向を「見直し」、それ以外に中国の近代文学において特筆すべき成果をもたらした作家たちを新たに評価する動きであった。つまり、流派あるいは社団というような枠組みを用いて、それまでの「文学史」ではあまり言及されなかった作家たちを新たに評価し、「文学史」における地位を再検討することになったのである。その結果、施蛰存の名が「新感覺派」の重要作家として浮上した。
- 24 中国社会科学院文学研究所現代文学研究室が編集し、人民文学出版社から1980年に出版した。
- 25 「為社会主义尽心尽力——訪施蛰存教授」、『文匯報』、1981年3月31日。
- 26 「中国現代小説的先驅者：施蛰存、穆時英、劉呐鷗的作品簡介」、『聯合文学』、1987年10月。
- 27 台湾の研究者鄭明俐、史書美の友人でシンガポール『聯合早報』の記者劉慧娟らは施蛰存のインタビューを行い、後にそれを発表した。そのインタビューは施蛰存自身にも評価され、『沙上的脚跡』（遼寧教育出版社、1995）に収録された。
- 28 1983年第7、8期に掲載。『文教資料簡報』は南京師範大学から出版された「内部発行」刊行物である。
- 29 施蛰存の辜劍宛て書簡1986年2月28日を参照。辜劍編『施蛰存海外書簡』、大象出版社、2008年、130頁。吳福輝の論文は前掲『十月』の論文と、「施蛰存一对西方心理分析小説的向往」（曾小逸編『走向世界文学』湖南人民出版社、1985に収録）である。
- 30 「施蛰存の小説は、現代派であれ、写実派であれ、多くは独自性を追求し、新しい角度（本能的な角度あるいは文化心理的な角度など）から社会と人間性を見つめていた。気魄は大きくないが、繊細、自然、円熟な筆致は優れている。したがって、小説史の中で探索性に富み、独自のスタイルを持つ作家になったのだ。」原文：施蛰存の小説，無論現代派的還是写実風的，多是力図独辟蹊徑，從新的角度（原始本能的的角度或文化心理的角度，等等）審視社会和人性，尽量気魄不太大，但不乏細麗、自然、圓熟之筆，使之成為小説史上富探索性，又富有風格的作家。楊著、692頁を参照。
- 31 2004年ヴェネチア映画祭で大きな話題をさらった『愛の神、エロス』三部作のその一、エロスの純愛「若き仕立屋の恋」（「手」の邦訳）である。『愛の神、エロス』は王家衛、ソダーバーグ、アントニオニーの3人によるエロスをテーマとしたコラボレート作品である。
- 32 楊迎平著、光明日報出版社、2007。
- 33 曼若訳。『満蒙』第14巻第2号（大連、中日文化協会発行、1933年2月）に収録。
- 34 奥野信太郎訳。除村一学編『支那文化談叢』（名取書店、1942）に収録。
- 35 西野由希子訳。『中国現代文学珠玉選 小説Ⅰ』（株式会社二玄社、2000）に収録。
- 36 辜劍編『施蛰存海外書簡』大象出版社、2008、116頁を参照。原文：此文写得深。
- 37 「施蛰存訪問記——施蛰存との会見及び上海印象記」（上、中、下）、「施蛰存再訪」、『日中友好新聞』1991年7月25日、8月5日、8月15日、10月5日を参照。
- 38 施蛰存『將軍底頭』成立の背景資料について、中国文芸研究会『野草』第78号（2006）が挙げられる。また、『野草』第79号（2007）に「評者」張建明が青野氏の研究成果について以下のように評している。「青

野先生の研究とはこういった作品の形成過程と作品成立の背景資料に対する追跡及び分析であり、二十数年間続いたものである。72号の斉藤評者の言葉を借りて言えば、青野先生の研究はテキストの確定、物語構成とそのプロセスの検討そして作品のモチーフや主題におけるオリジナリティの分析からなるものである。」

39『立命館言語文化研究』第3巻5号、1992年3月。

40『立命館経済学』第50巻5号、2001年12月。

41 嚴家炎「略談施蛰存的小説」、『中国現代文学研究叢刊』第3期、1985年。

42 黄献文『論新感覺派』武漢大学出版社（2000）；張芙鳴の博士論文「施蛰存研究」（2000）などがある。

43『遺留韵事——施蛰存遊踪』、文匯出版社、2007、19頁。原文：我希冀相关的研究者、批评家们不要过于淡忘了这本《江干集》。

44「我的創作生活之歷程」（『創作的經驗』天馬書店、1935に初出、『灯下集』、開明書店、1994、60頁を参照）、施蛰存『十年創作集』（華東師範大学出版社、1996）「引言」を参照。1928年という時期が重視されるのは、この年に施蛰存が短篇小説「娟子」を初めて新文学派の機関誌『小説月報』（1928年1月）で発表したからである。1928年以前の創作は主に非「新文学派」刊行物で発表されており、施蛰存自身が回想執筆当時における鴛派文学に対する悪評を考慮し、それらの創作への言及を極力避けていたからであろう。ちなみに筆者が上海復旦大学教授袁進からうかがった話によると、彼が80年代末頃に施蛰存を訪問し、「施青萍」署名の作品について問いかけたとき、施はノーコメントだったという。

45 1881～1953。字次子。施の籍貫は呉興であるが、その前は魯国の施系に遡る。馬叙倫、黄郛と浙江仁和県で同期及第である。羅振玉が創立した兩級師範学堂に勤めたことがある。

46 履和靴下工場は、『民国日報』『地方新聞』欄（1920年6月10日、1921年2月20日）で報道され、山根倬三編『東亜指要』（東洋協会、1925、1823頁）で松江の名勝古跡「官公署其他」の紹介の一つとしてされている。

47 沈建中編『世紀老人的話——施蛰存卷』、遼寧教育出版社、2001、20頁。

48「鴉」、1930年8月執筆、前掲『灯下集』、37頁を参照。

49「我的第一本書」、前掲『北山散文集（二）』、1055頁。

50「我的創作生活之歷程」、前掲『灯下集』、57頁。原文：神似江西。「江西」は江西詩派のことである。

51近年、李賀、李商隠らの詩作は、西洋の現代派的な意識の流れやモンタージュなどの手法との比較研究も行われている。例えば、康亜偉「古典詩歌中的現代写作技巧」、『語文教学与研究』、2008年第10期（上）、熊国華「李商隠詩歌的心靈性結構」、『江漢論壇』2004年第10期などがある。

52「我的創作生活之歷程」、『灯下集』、開明書店、1994、57頁と「我的第一本書」、前掲『北山散文集（二）』、1055頁。

53「我的家屋」、前掲『北山散文集（一）』、88頁。

54 現在の中学校に相当する。校舎は施蛰存の家の近くにある。現在の上海市重点小学校松江区中山小学校である。

55 原文：父母在，不遠遊。黎明即起，洒掃庭除。

56 原文：暮春三月，江南草長，雜花生樹，群鶯亂飛。

57「浮生雜詠」は1999年2月11日～25日、『光明日報』に連載されている。ここでの引用は『北山樓詩』華東師範大学出版社、2000、141頁による。原文：清詞麗句必為隣。

58「浮生雜詠」二十四、前掲『北山樓詩』、142頁。

59 生没年不詳。松江人。詞曲家。笛の演奏や昆曲に堪能。「蔣韻笙」、沈建中編『雲間語小録』（文匯出版社、2000、366頁）と「業師蔣韵笙」、前掲『遺留韵事——施蛰存遊踪』、87頁を参照。

60 施蛰存「飲水思源」、前掲『北山散文集（一）』、367、368頁を参照。

61「繞室旅行記」、前掲『灯下集』、122頁。『大食故宮餘載』は商務印書館（1915）が出版した『説部叢書』第2集第11編歴史小説である。林琴南と魏易が共訳した。

62 前掲『北山樓詩』、144頁。

63 1896～1927。松江人。1918年上海南洋公学（現在の交通大学）に在学。1922年秋、国民党に加入。1927年3月、上海工人第三次武装起義勝利の後、上海特別市臨時市民政府委員に選ばれた。蒋介石を反革命として糾弾した後、国民党当局に暗殺された。

64『民国日報』『松江学校消息合誌』欄では、1922年2月22日「開學日期以及新校長林以鈞」、2月24日

「蘇三中小風潮旋息」、7月2日「三中举行卒業式」などの記事が見られる。また、『申報』(1919年5月28日)、「江蘇第三中学罷課宣言」、『民国日報』(1919年6月8日)、「松江罷市之經過」を参照。また、『申報』(1919年5月12日)「国恥記念日之聞見」は、三中の学生趙富基が国恥記念の演説大会で指を噛み切り血を出して国恥を忘れないように誓ったことを報じている。同紙1919年6月19日の記事は、三中の教員許棟材が学生の「非買同盟」に反対して、学生の秦、沈の二人を学校から追放したと報じている。『民国日報』(1922年7月2日)に「三中举行卒業式」などがある。

65 1922年2月24日「蘇三中小風潮旋息」。原文：上英文課程時，因某教員誤解某字，已群退出教師。釀成小風潮。

66 施蛰存、「我的創作生活之歷程」、前掲『灯下集』、57頁を参照。

67 村田雄二郎「『文白』の彼方に——近代中国における国語問題」、『思想』第853号(1995、31頁)を参照。

68 いわゆる1905年頃の生まれの人たちである。この世代の人たちは新旧文学の過渡期に育っており、旧文学、新文学の素養をともに備えている人が多い。施蛰存を含めた現代派作家たちのうち、穆時英(1912~1940)は施蛰存と異なる文学的土台に立つので、現代派を論じるときには、この世代の差は重要なポイントである。また、施蛰存らと同じ「鴛鴦蝴蝶派」出身の作家たち、例えば劉半農(1891~1934)、葉聖陶(1894~1988)らは、後の新文学への転進や、「鴛鴦蝴蝶派」への批判的態度などの点で施蛰存とは異なる。これらの作家の初期文学活動を研究するとき、この世代の差も重要なポイントだと考えられる。

69 前掲『北山樓詩』、146頁を参照。

70 施青萍「我的名字和別署」、『最小』第121号、1923年11月4日。

71 「庶青萍、結緑、長偕于薛、卞之門」は李白「与韓荊州書」(「韓荊州に与うる書」)の一句である。元々、青萍は宝剑名を、結緑は宝玉名を意味しているが、李白はここで「青萍」、「結緑」を自分の文学才能の比喻として用いている。また、薛は春秋時代越国の人薛燭であり、劍の鑑定に長けていた。卞は春秋時代楚国の人卞和であり、玉の鑑定に長けていた。「薛、卞」はここでは文章の優劣を鑑定する人、即ち韓朝宗のことを指している。全句が「願わくばこれらの作品が青萍の宝剑、結緑の美玉のように、薛燭、卞和の鑑定、評価を経てさらに価値が高められたことを」と解釈できる。また「青萍」と同じく「劍」の意味がある書齋名「葱蘆」を父親に命名してもらったこともある。

72 「我的名字和別署」、『最小』第121号(1923年11月4日)を参照。原文：知道了幾個英文名字。取施高德。和中文名諧音。覺得太道学氣了。改為施太邱。

73 『時報』副刊「余興」に掲載、未見。「梅影軒」は施蛰存の筆名の一つである。「影梅庵」は明の冒襄の有名な追憶文学『影梅庵憶語』の中に現れた尼寺のことである。「庵」と「軒」は共に建物を表す言葉であるため、両者の類似性から施蛰存が冒襄を意識し、共感したとも思われる。

74 1850年に上海で最初の活字新聞『北華捷報』(*North-China Herald*)が西洋人によって刊行されて以来、1894年までに、中国では70種類以上の新聞雑誌が発刊されたが、そのうち上海刊行のものが32種と他の都市を圧倒していた。楽正『近代上海人社会心態(1860~1910)』上海人民出版社、1991、135頁を参照。

75 1921年、工場勤務の作業員が休日なしで働いた月給が12元、週刊誌『礼拝六』一冊の値段が1角であった。徐雪筠等訳編『上海近代社会經濟發展概況(1882~1931)』上海社会科学院出版社、1985、232頁。

76 鴛派作家の数は150人前後である。魏紹昌『我看鴛鴦蝴蝶派』(台湾商務印書館、1995)は「鴛鴦蝴蝶派」の範疇を、作品の傾向や社会的な影響を有する、清末に教育を受け、民国20年前後に活躍した作家群と定めている。代表的な人物として李涵秋(1874-1923)、包天笑(1867-1973)、徐枕亜(1889-1937)、張恨水(1895-1967)、周瘦鵑(1895-1968)の「鴛鴦蝴蝶派」の「五虎将」が挙げられる。しかし、周瘦鵑、包天笑は自らが「鴛鴦蝴蝶派」文人であることを認めず、「礼拝六」派文人であると自ら主張している。確かに、1920年代の新旧文学論争の頃には、「礼拝六」派と自称していた作家が多い。これに対し、新文学側は、あらゆる「非新文学」のものはすべて「鴛鴦蝴蝶派」文学であると論断し、「礼拝六」派を「鴛鴦蝴蝶派派」と一括りにして批判し



ている。本論では、「礼拝六」派と「鴛鴦蝴蝶派」の概念を区別せず、通称の「鴛鴦蝴蝶派」を使用する。

77 廖超慧『中国現代文学思潮論争史』武漢出版社、1997、575 頁。

78 『1709 年にイギリスの文学者 Richard Steele が毎週三回出版した『坦脱墨報』(*Tatler*) を連想させた。……(中略) 後に Joseph Addison と合併し、『傍觀報』(*Speet Ajtor*) を発刊した。この二種の新聞は紙幅がともに小さい。文章は簡潔で流暢なものが中心とある」、張含我「我之祝『最小』、『最小』第 4 期、1922 年 12 月 15 日。原文：使我聯想到了 1709 年英国文学者查理施蒂氏 (Richard Steele) 辦他每星期出版三次的坦脱墨報 (Tatler)。……(中略) 施蒂爾又和約瑟阿狄生 (Joseph Addison) 合股出版傍觀報 (*Speet Ajtor*)。這兩種報的紙幅也都很小。行文都以短峭通暢為主的。

79 子巖「惡趣味的毒害」、『晨報副鐫』、1922 年 10 月 2 日を参照。

80 西諦「消閑?」、『文学旬刊』第 9 期、1921 年 7 月 30 日、西諦「悲觀」、『文学旬刊』第 36 期、1922 年 5 月 1 日を参照。

81 「雅集」とは文人雅士の集まりである。「雅集」の由来は中国文化史上有名な「西園雅集」(北宋) から来ている。「西園雅集」以来、士大夫階級では作詩、作賦、クイズショーや遊園、唱酬を行う重要な文化活動としての「雅集」が定着した。王喜明「雅集漫話」、『書屋』第 9 期、46~48 頁(書屋雜誌社、2010) を参照。南社第一回目の「雅集」は蘇州の虎丘で行われている。

82 原文：12 月 3 日午後 7 時。青社假座東亜酒樓西餐部。(中略) 席間有補充該社範圍之議。庄諧雜出。卓呆每語哄堂。瘦鵲諡為開胃妙品。八時余宴畢。會鈔十四元有零。ちなみに、1922 年 12 月『申報』によると、地方教員の講義料は一時間当たり 1 角 5 分、制服工場の従業員の月給は 20 元である。

83 原文：此多留園林之美。而彼則留驚鴻之影。斯其別耳。記遊之日。為雙星渡河之前一日。故曰星聚。兼為牛女祝也。『申報』副刊「自由談」1922 年 9 月 16 日を参照。

84 上海有名な遊樂場小世界が発行した日刊誌(後に三日一刊誌に変更)である。庶民向けの京劇、演劇などの芸能情報誌である。1923 年 2 月 16 日に創刊。1926 年 3 月 15 日に停刊。全 961 期。編集者は張丹斧、姚民哀。

81 范伯群『中国現代通俗文学史』(北京大学出版社、2008、240 頁)は、いろいろな手を使って調べたが、『長青』は全国の図書館に蔵されておらず、恐らく世の中にもう残されていないだろう、と記している。筆者は幸運にも 2010 年春に上海図書館で『長青』を発見するに至り、それに関する紹介資料を「青社興『長青』」と題し、『新文学史料』第 4 期(2011 年 12 月)に掲載した。

86 原文：長青也。我全体社員心血之花也。

87 茅盾編『中国新文学大系(1917~1927)小説一集』「導論」、上海文芸出版社、2003、4 頁を参照。原文：各地文学社团活動和小型刊物的出版，就好比是尼羅河的大氾濫。

88 魏紹昌『我看鴛鴦蝴蝶派』(台湾商務印書館、1995)は、青社、星社を鴛派の正式な社团とは認めないと記し、李楠『晚清民国時期的上海小報』(人民文学出版社、2006)は青社と星社のメンバーと鴛派小報との関係や、同人誌『長青』、『星』には全く言及していない。しかし同じ星社のメンバーにしても、一枚岩の鴛派ではなく、科举世代と科举廃止後に生まれた世代、職業、階級などの相違によってそれぞれの個性を持っている。先行研究は都市研究、メディア文化論、大衆通俗文化などを考察する際に彼らを中心に据えたものの、各社团の個性に注目することはなかった。

89 鴛派の雅集は月一、二回の晚餐会を中心とした新月社との共通性が見られるが、専用のクラブハウスを持つ新月社とは異なり、レストランや名園など公共の空間を会場とするなど、より開放的であったと言える。

90 原文：這次赴通寧錫蘇等處去參加教育，到處可以看見什麼『礼拝六』、『快活』、『半月』等等的惡魔，迷住着一般青年——以学校中的青年以最；這惡魔的勢力真利害呵！

91 蘇雪林(1897~1999)は子供の頃に消閑の物がなく、『礼拝六』などを愛読していたと回想している。「東方曼倩第二的劉半農」、『蘇雪林文集』第 2 卷、安徽文芸出版社、1996、316 頁を参照。陳白塵(1908~1994)も『新青年』などの新文学派の刊行物は淮陰最大の商務印書館にも売っておらず、『紅玫瑰』、『小説日報』、『紫蘭花片』などの鴛派刊行物のみ売っていたという。陳白塵『対人世的告別』三聯書店、1997、158 頁を参照。

- 92 化魯「文芸界的聯合戰線」、『文学旬刊』第36期（1922年9月3日）を参照。
- 93 陳建華『從革命到共和——清末至民国時期文学、電影、文化的轉型』（広西師範大学出版社、2009、178頁）を参照。
- 94 袁進『鴛鴦蝴蝶派』（上海書店、1994、27頁）を参照。
- 95 張含我「礼拝六那里去了」（『最小』第15期、1923年3月29日）には以下のように見える。『礼拝六』復活後の数期は題材を厳選しており、文芸的価値に富む作品もいくつかあるが、惜しいことに内容は20期以後になると、ますます悪化していった。発行人はもっぱら儲けのことしか考えず、編集人にいい加減な作品を適当に選ばせて紙幅を充たしていたので、社会的信用を失ってしまった。たとえなんとか100期まで続けたとしても、停刊せざるをえなかった。……『礼拝六』の作家たちの作品もほかの刊行物に拡散した。どのような名称であれば彼らを一括りにして罵ることができるだろう。我々「文丐」の新しい罪名は、新文学派の旦那様が下さるのを待つしかないだろう。」原文：礼拝六復活以後の頭上幾期。選材很精。很有幾篇有文芸的価値。可惜二十期後材料。愈弄愈遭。發行人專想發財。便叫編輯人選些東拉西扯的小說。充塞篇幅。社会上的信用失了。便勉強到一百歲。只好撒手。……他們的作品。又散在各處。如何可以另起一個籠統的名称去罵他們呢。我們文丐的新罪名。只好待新文学老爺的賞賜罷。
- 96 施蟄存は辜劍に宛ての書簡（1985年11月19日）に「作家の名声は、作品を発表する媒体によるのではなく、具体的な作品のみを重要視すべきだ」と述べている。辜劍編『施蟄存海外書簡』大象出版社、2008、159頁。
- 97 趙毅衡『苦惱的叙述者——中国小説的叙述形式與中国文化』北京十月文芸出版社、1994、9頁。原文：要对五四時期出版的小説作“新派”、“旧派”的分項統計，不太容易。新旧派固然壁壘分明，但尚有一些次要作家色彩不明，個別作品難分新旧。
- 98 黄修己『中国現代文学研究史』広東人民出版社、2008、12頁を参照。
- 99 胡曉真「知識消費、教化娛樂與微物崇拜——論『小説月報』與王蘊章的雜誌編集事情」（『文化啓蒙與知識生産：跨領域的視野』、麦田出版、2006、154頁を参照。
- 100 Michel Hockx, *Questions of style : Literary societies and literary journals in modern china 1911-1937* (BRILL, 2003, 128頁) に提示されている「Elements of horizontal reading」（水平的解読）から啓発を受けた。
- 101 魏紹昌編『鴛鴦蝴蝶派研究資料』上海文芸出版社、1984、268頁。
- 102 上海文芸出版社の第1384号批示によると、「史料部分」は1962年11月、2500冊を「内部発行」として出版することが許可された。その発行物が開放される対象は、現代文学研究工作者、作家協会会員、大学中文系講師以上の幹部、新聞出版社の編集者、記者、省と市級的主要図書館であった。また、1962年2月8日、上芸第12626号の申請書によると、「作品部分」の出版を同じく「内部発行」で実施し、約50万字の作品集を出版する計画があったが、「3、5年後様子を見て出版するかどうか決めるべし」となった。このように、当時の出版社の責任者丁景唐らの議論を見れば、鴛派に関わる出版には賛否両論があった。以上は、筆者が2011年12月29日に上海档案馆で行った調査による。
- 103 范伯群の代表的な論著は以下のものがある。「鴛鴦蝴蝶—礼拝六派」、蘇州大学を鴛派研究の拠点として、通俗文学研究史の3冊の著書が出版されている。代表的な論文は「關於編写中国近、現代通俗文学史的通信」、『中国現代文学研究叢刊』1987年3月、「清末狹邪小説『淫惡』代表作——『九尾龜』」、『蘇州大学学报（哲学社会科学版）』第2期、1989に掲載、「周瘦鵑和『礼拝六』」、『蘇州大学学报（哲学社会科学版）』第1期、1988に掲載。
- 104 朱自清『論雅俗共賞』（觀察社、1948）、何滿子『中国愛情與兩性關係』（商務印書館、1994）、史鉄生『我與地壇』（中国社会科学出版社、1993）、阿城『閑話閑説：中国世俗與中国小説』（作家出版社、1998）を参

照。

105 子敵「新旧文人」、『小説日報』第 809 号、1940 年 11 月 18 日を参照。

106 例えば、周浩泉の「諸家作品和水果的比喻」（『最小』第 26 号、1923 年 4 月 20 日）、鄭逸梅の「各有所長」（『最小』第 38 号、1923 年 5 月 14 日）、龔心華の「我想像中之小説家與藥名対象」（『最小』第 160 号、1925 年 1 月 3 日）がある。

107 鴛派の若手作家が行った翻訳活動を見てみよう。例えば、意識と直訳の使い分けについて意見を述べた葉克鈞「翻訳的我見」、『最小』第 74 号（1923 年 8 月 2 日）。また、オー・ヘンリー短篇小説の景吉森、朱維基らによる翻訳が『最小』で掲載されている。朱維基の翻訳には他に「団長的情史」、『最小』第 65 号（1923 年 6 月 15 日）、「紅康林的口才」第 74 号（1923 年 8 月 2 日）、「沒有機會」第 88 号（1923 年 8 月 30 日）などがある。

108 緑天翁「緑天清話」、『小説月報』第 3 卷第 12 号（1912 年 12 月）を参照。

109 胡瘦鶴「中国現代小説的趨向」、『蘭友』第 15 期（1923 年 6 月 11 日）は、「現代中国小説における描写と文章は、多くが社会と家庭の方面に傾いている。そのため、労働問題、改造問題、婚姻問題、妾や下女の問題などが、現在小説の最も人気ある題材となった」と指摘している。原文：現代中国小説文学上の描写文字。大都傾向于社会和家庭一方面。所以那些劳工問題。改造問題。婚姻問題。妾婢問題。都成了現今小説文字上最熱鬧的題材。

110 鄭振鐸編『中国新文学大系・文学論争集』導言、上海良友圖書公司、1935、14 頁。原文：可惜這一類的文字，現在也搜集不到，不能將此一一列舉。

111 栞梅健『前工業文明與中国文学』（広西教育出版社、2000、46 頁）を参照。原文：在对待文学與読者の關係問題上，五四新文学工作者也有着明顯的媚俗傾向。

112 『小説月報』第 14 卷第 10 号（1923 年 10 月）を参照。原文：革新後的小説月報……使我們研究文学的，如得良師，好伴侶。獲益真不鮮。現在我可說当情人般看待了。非有重大事情及一定所要做的事情以外，我總不願離他片刻。

113 原文：寧可不娶小老婆，不可不看『礼拝六』。

114 錢唐邨「小説零話」、『最小』第 49 号（1923 年 5 月 14 日）を参照。

115 胡瘦鷗「小説小説」、『最小』第 52 号（1923 年 6 月 11 日）を参照。原文：描写小説中人的周圍景物。宜乎簡潔而適當。（中略）我從前見一篇小説。其中描写一個閨女坐在房里。乃將房里的擺設器具。累累墜墜的說了一大篇。好像是嫁粧店里給顧客的一篇帳目。

116 小説痴「説林片葉」、『微光』第 1 号（1924 年 4 月 23 日）を参照。原文：小説之作。必有注意存乎其中。若一味平鋪直叙。無怪為人譏焉「記帳式」矣。

117 ここで参考として挙げた「新文学」の實際的な展開方向については、尾崎文昭「中国近現代文学の基本構造とその終焉についての試論」（『アジア学の将来像』東京大学出版会、2003）から啓発を受けた。

118 「小説小話」、『蘭友』第 8 期（1923 年 3 月 21 日）を参照。

119 『松声』第 6 期（1923 年 10 月）を参照。

120 鏡水生「小説雑談」、『星期』第 42 期（1922 年 12 月 17 日）、馬鵲魂「著作家の兼別業問題」、『最小』第 53 期（1923 年 6 月 13 日）、夢雲「小説閑話」、『晨光』第 2 期（1924 年 4 月 28 日）などが挙げられる。

121 『小説月報』第 13 卷第 1、2 号（1921 年 1 月、2 月）「通信」欄「語体文欧化問題」に掲載された梁繩禕、呂冕韻の投書、胡閑雲の投書「我的一点小意見」、『長青』第 1 期（1922 年 9 月 3 日）、紅蕉「靠做小説吃飯的人」、『長青』第 2 期（1922 年 9 月 10 日）を参照。

122 馮雪峰「關於「芸術大衆化」、『抗戰文芸』第 3 卷第 9、10 期合刊、1939 年 2 月、鄭伯奇「關於文学大衆化的問題」、『大衆文芸』第 2 卷第 3 期、1930 年 3 月。

- 123 曼郎「青社文風大半『伊』、『最小』第7期、1923年1月15日を参照。
- 124 「小説雑談」、『星期』第11期（1922年5月）。
- 125 錢理群等『中国現代文学三十年』（北京大学出版社、1998、7頁）を参照。
- 126 「小説話」、『晶報』（1922年4月15日）を参照。原文：除了『小説月報』以外，是万万看不起什麼『星期』、『礼拜六』的，並且不必看，就一口敲定這是壞東西。
- 127 『文学旬刊』第5期（1921年6月20日）「雜譚」欄を参照。
- 128 「新旧文学的調和」、『文学旬刊』第4期（1922年6月10日）を参照。
- 129 『文学旬刊』第64期（1923年2月11日）を参照。
- 130 『文学旬刊』第13期（1921年9月10日）を参照。原文：只要這東西有一二处可取，便可以發表。
- 131 『文学旬刊』第13期（1921年9月10日）を参照。原文：惟有痛罵一法。
- 132 「They appear to be differences of style, rather than of essence」Michel Hockx：*Questions of style: Literary societies and literary journals in modern china 1911-1937*, BRILL, 2003, 126頁を参照。
- 133 『文学旬刊』第110号（1924年2月25日）に掲載。ある貧しい家の出の料理人が、人間の貧困/裕福の運命の不思議に感嘆し、あくまでも運に左右される問題に過ぎないと認識した経緯を描いている。ある日、金持ちの息子の結婚披露宴に雇われ、家に帰る途中、農村の静かな夜空の下でふと連想の世界に沈んでいった。新婚の二人の幸せな場面を思い浮かべ、思わず自分の孤独な生活に不満を覚えている。帰宅後、料理人の母が彼の不愉快な気持ちを察し、十八年前のことを「記帳式」に回想する。その回想は母の一人称の語りで、金持ちの使用人との会話をありのままに再現した。出産する前、生んだ子を金持ちの家に売ることを決心したが、生まれたのは双子であり、たまたま選んだ一人を残し、もう一人を売ったのだが、その売った子は、料理人が当日に見た新婚の男であった。料理人は人生の不思議な巡り合わせを嘆きながら、小説が終わる。
- 134 『小説月報』第13巻第10号（1922年年10月）に掲載。小説は大学生呉志成がミッション学校出身の女性と婚約するもののそれを解約し、ほかの女性と結婚する経緯を物語っている。「説起」、「實際講来」、「現在摘要記在下面」などの言葉を使った伝統的な平板な叙述スタイルが見られる。
- 135 『新潮』第1巻第4期（1919年4月）に掲載。小説は一人称の視点で「私」の隣家の老婦人の嫁虐めを描いている。老婦人は息子「阿大」の新婚の妻を気に入らず、無理やりに二人を別れさせた。後に「阿大」が新しい嫁をもらったが、老婦人は相変わらず嫁の虐めに走った。嫁が出産したばかりにもかかわらず、腐った食事を食わせるほか、嫁が家事もせず怠けものであると罵る。姑と嫁との間に不和を起していることに悩んでいる「阿大」が問題を如何に解決するかという問題を提示した。
- 136 原文：願這些文人的心血，染在那微笑的玫瑰上，来安慰枯燥的人生。
- 137 原文：希望收獲些可笑可哭的作品，使煩惱悲哀的人們得了無窮的安慰。
- 138 廬父「告青社社員」を参照。原文：青社者。我全体社員之結晶也。長青者。我全体社員心血之花也。
- 139 嚴独鶴『紅雜誌』第1期、1922年8月を参照。原文：斯紅雜誌。蓋文人心血之結晶体耳。
- 140 「專電」、『良晨』第2期（1922年5月21日）を参照。
- 141 冰「青年的疲倦」、『小説月報』第13巻第8期（1922年8月）、「文学家的環境」『小説月報』第13巻第11期（1922年11月）を参照。
- 142 無虛生「小説與青年」、『星期』第33期（1922年10月22日）を参照。原文：小説中確有引人墮落者。如昔日流傳之金瓶梅肉蒲團及今日市上種種侮淫之作等。…即如新小説中。鼓吹自由戀愛者。此類本事。幾乎篇盡一律。
- 143 鏡水生「小説雑談」、『星期』第42期（1922年12月17日）を参照。原文：今日之所謂短篇小説。不能得其描写之主点。專写才子佳人一類小説。已成過去之時髦品。

144 趙園「『五四』時期小說中的婚姻愛情問題」、『中国社会科学』第4期（1983）を参照。

145 原文：我对于现今著述界。觉有不少意见。蕴集于中。不能复忍。随写数则。愿假虎林一席地。与同志诸君共勉之。盖正如胡适之诗所谓我自不吐定不快耳。／母為願成小說家而作小說。作家宜自願其人格。投稿宜審慎雜誌報章之價值。母失之濫。無論何種文字。總宜有些文学意味。卑瑣之作。尚以不作為佳。／母為金錢故扯長作品。母失精彩。／看書後母作文字。蓋書中情節。尚印腦中。不知不覺間。入自己筆下。易成抄襲。小說非苦思所易得。／新旧小說家何必互相抨擊。以我觀之。今日中国文学。實際上尚不能分新旧。蓋新文学作品。除去標点。即是半月星期中小說耳。惟所惜吾儕近來無紹介西洋文学者。且無一与小說月報性質相同之雜誌。故相形之下。似少拙耳。不則如新文学家言。豈半月星期中乃真尽不能謂為小說耶。我殊未信。／新文学家称吾儕為黑幕派礼拝六派。然吾倘称小說月報中作家為□□派。□□派。即新文学家亦肯受否。（□□、□□、者新文学刊物中最下乘之作品也）。／倘有人願成一著作家者。則請趕緊讀書。趕緊研究社会上一切問題。徒事抄襲。成一日之名非計也。

146 原文：青萍之青萍談吐論作小說頗能中肯亦小說作者之一助也。

147 原文：我懇切的求一般青年。用你們自我的識見慧弁和理解。來批評那些不用新式符号的小說。また、廉子玉の「新小説和旧小説」（『小説日報』第15期、1922年12月17日）に、「新派側においては、……欧化の二文字の看板を掛けて旧派を脅すことはできない」と語っていた。原文：在新派方面呢。……却不能掛着欧化两字的招牌。吓唬旧派。

148『最小』第91号、1923年9月5日。

149 原文：極不堪的事实。只要加上美的芸術。無有不成好文字的。

150 張舍我「中国的毛柏桑」、『最小』第81号、1923年8月14日。

151 原文：我近来的思想。以為小說是应当講求芸術的。所以小說月報和創造我也願意看。冰心和葉紹鈞的作品。我也願意領略。但对于詩的方面。我以為白話詩的格調。簡直比彈詞還低。並且現在的詩。愈做愈低。連意味都找不到了。所以詩的問題。我以為律詩可廢。而其余必不可廢。我抱着這樣的主張。想聯合許多同志。恢復詩而創作小說。所以發起了一個維娜絲文学會。想征集幾位同志。不意有時遭到了一個詩好的朋友。我便請他入會。他聽說小說要議創造季刊小說月報那樣做。他便說我是新文化人物。不願加入了。有時遭到了一位研究小說的朋友。我又請他入會。他聽說我不做白話。他便說我性質太旧。又不願意加入了。至今可憐這個文学會。還只有十多位同志啊。

152 袁進は「中国現代文学研究应当有旧体文学研究的地位」（朱棟霖等編『中国雅俗文学研究』、上海三聯書店、2008、32頁）において五四作家の旧体詩、文言散文に関する研究の重要性を指摘している。

153 1923年8月1日、維娜絲文学會發行、上海明星出版公司印刷。

154 施蟄存的短篇連載小説で、初出は『蘭友』第11期、1923年5月1日。

155『礼拝六』第156期、1922年4月8日。署名張無諍。

156『最小』第100号、1923年9月23日。署名施青萍。

157 原文：後來聽見一種批評，說它有些像枚乘『七發』。單就結構而論，也未始沒有一部分的類似。俞平伯「讀『毀滅』」、『小説月報』第14卷第8期（1923年8月10）に初出。『俞平伯散文雜論編』（上海古籍出版社、1990、38頁）に収録されている同文にこの意見が付け加えられている。

158 胡寄塵「一封曾被拒絕發表的信」、『最小』第8期、1922年1月25日。原文：為着文学的前途。只要作品有進步。無論這作品是何人做的。都應該提倡。不必把新旧的界限放在心里。

159「創造自由」、『最小』第6号、1923年1月5日。原文：小說既沒有新旧。也原無什麼主義。

160「新旧小說的我見」、『蘭友』第15期、1923年6月11日。原文：新旧兩派小說家的筆鋒交戰。完全是無謂的。……（中略）故說小說加以不必分新旧了。只要做得好。無論是新是旧。總是好的。

161 茅盾『我走過的道路』（上）、三聯書店（香港）、1989、139頁。原文：他（王蘊章-筆者注）對我表白：他對新旧文学並無成見，他覺得應該順應潮流。……治新旧于一爐，勢必兩面不討好。當時新旧思想鬥爭之劇烈，不容許有兩面派。

162 前掲『鴛鴦蝴蝶派研究資料』、338頁。原文：融合新旧，自立田園，而能不流于神秘。

163 初出『獨鶴小説集』世界書局出版社、1926。前掲『鴛鴦蝴蝶派研究資料』、334頁を參考。原文：博覽西方小説，故其所作，能融治新旧，自成一家。

164 原文：然當此新旧交替之時，當新旧兼為之，殊不當以旧譏新，著新毀旧也。即我近作，亦為過渡主張，無論其寫實派邪，旧浪漫派邪，新浪漫派邪，均將為之。今余長篇雖久未作，短篇則于新旧諸體，咸有著述。但作一新體者，旧派之人，必譏以效顰時俗。著一旧派者，新人物又必詆之為故步自封。

165「重印『雜拌兒』題記」、1982年1月20日作、前掲『北山散文集』（二）、1277頁。

166 これらの作品は様々な筆名を用いて書かれているため、考証は難しく、筆者が現在までに発見した詩作は「蟹」（『民国日報』副刊「覺悟」、1921年9月2日）一点のみである。その署名「蟄存」は恐らく「蟄存」の誤植であろう。

167「浮生雜詠」三十、前掲『北山樓詩』、146頁。

- 168 之江大学は当時杭州の銭塘江近くの皮市巷にあったが、後に大塔児巷に移転した。『申報』1923年9月5日、第1版「上海大学録取新生案」に施蛰存が当時学校で使っていた「施德普」の名前が見える。
- 169 「我治什麼『学』」、前掲施蛰存『北山散文集』（一）、673頁。
- 170 「我的日記」、前掲『灯下集』、115頁。
- 171 原文：疲倦的眼睛發生了奇幻的光線，他耳朵里也同時有了精銳的聽覺。
- 172 原文：他想用刀子刺心，唉！這是最痛苦的！血！流出血來，唉！這也是最可怕的！奇怪！為什麼他們竟不覺得痛苦？為什麼他們竟不怕？究竟痛苦嗎？怕嗎？
- 173 原文：到後來又想：痛苦，恐懼，這都可以忍耐的。惟有饑餓忍耐不得，要是忍耐飢餓，就不能有生命。我只得為了生命去受痛苦，恐懼，就是比痛苦和恐懼再厲害些，為了生命也只能受着。
- 174 原文：又使起了遲疑。
- 175 原文：他又遲疑了半晌。
- 176 原文：霎時間，他回復了他底原狀，微近的眼光幽細聽覺，什麼都看不見聽不到了。
- 177 史書美が施蛰存に行ったインタビュー（1990年10月22日～24日）に依拠する。史書美『現代的誘惑——書写半殖民地中国的現代主義（1917～1937）』（江蘇人民出版社、2007、386頁）を参照。
- 178 施蛰存『老古董俱樂部』（永安十日談社、1945）、「引言」を参照。原文：篇幅極短，而強烈地表現着人生各方面的悲哀情緒。
- 179 海峯「哈姆生伝」（第31期、1923年3月11日）に「目下中国にでも『餓者』（*Hunger*）の訳本が出た」とある。原文：現下我們中国也有訳本了。
- 180 「海外文壇消息」（十六）、「哈姆生的餓者」、『小説月報』第12卷第2号（1921年2月）を参照。原文「這本書自頭至尾，通是描写這個餓者的情緒，感触，夢想，幻念以及動作。」
- 181 大東和重「恋愛妄想と無意識——『蒲団』と中国モダニズム作家施蛰存」、『比較文学研究』第82号（2003）。
- 182 当時、松江地区に西洋人が多く、住民との間に起きたトラブルなどの事件は『民国日報』、『申報』などに報道されている。
- 183 原文：是外国人。碰不得。
- 184 張芙鳴「施蛰存論」（復旦大学中国語言文学系博士学位申請論文）、2000、9頁。
- 185 張東蓀、陳慧忠「施蛰存与頤志志勒」、『中国比較文学』第4期、1987。
- 186 『江干集』所収の「十三頁半」には戦争に関する叙述も見られ、兵士の戦場における内面心理の描写において共通する。一例を挙げる。「しかし、いよいよ敗戦が明らかであるにも関わらず、隊長は前進せよと脅迫する。」原文：但看明明要打敗仗的了。隊長還強迫着前進。
- 187 「月根国」という造語は、「日」の対義語「月」と「本」の同義語「根」を想起させる。恐らく施蛰存は「日本国」からヒントを得たかと思われる。2012年10月31、伊藤ゼミで研究発表のなかで杉谷幸太氏のご指摘による。
- 188 施蛰存は上海大学や松江の中学校で絵を教えている洪野と交友があり、本作の老画師の人物像には洪を彷彿させる一面がある。
- 189 「ほかの人は先生の絵を気に入らないが、私はとても好きだ。もし、父がこれらの絵を見たら、きっと美人画よりよく描けていると喜んで言うだろう。」原文：人家不用你的画。我却十分喜歡先生的画。便是我父親看見了。也一定要快活得說先生的画。要比美人画好呢。
- 190 原文：這等画。于我們没用。我們所要的是我們自己的狀況。
- 191 原文：鈍根曰。吾讀此篇。為天下懷才不遇者放聲大哭。
- 192 「編輯室中之記者」、『蘭友』第10期、1923年4月21日。原文：文字哀艷，筆致古雅，極為名貴。「紅禪記」は『蘭友』に連載された連作短篇小説のシリーズの題名で、「不忍詞本事一」、「不忍詞本事二」からなり、連作を構成する二篇の短篇小説のタイトルは「玉碎記」、「執紼記」である。第17期、三回目の連載「執紼記」の文末に「不忍詞本事 後続 敵情紀」の予告が書かれており、「紫丁番館雜事詩本事之一」と記されている。
- 193 原文：也聊以寄儂平日情思耳。
- 194 原文：顧君實儂平生好友也。
- 195 原文：而實不知亦朋友之情。故記其始末。小説の結末で二人の交際について以下のように謳っている。「ああ、玉が砕け、香りも消え。風雨が窓を揺さぶり、紅い燈も消えた。命の別れはいかに悲慘なことか。私の心に度々私たちの最初の出会いが浮かびあがってくる。幼い頃、私は彼女と隣同士として知り合い、互いに大きく成長していった。学問の琢磨のため交際が次第に深くなり、彼女が私に与えたよい影響は数え切れないほど多い。友人とはそういうものかと私は思う。これは男子にも珍しいことだ。しかし、彼女と早くも永別になる

うとは。いまここで彼女の一言半句を思い出してはせつなくなるばかりだ。この一篇はまさに涙を誘う作品にもなる。」原文：嗟乎。玉碎香消矣。風雨撼窓。紅灯亦死。永訣慘情。實使余久久憶之初。幼時余與伊以隣而識。後次各長大。以學問之研磨而交遂深。總伊之益余者弗可計。余方謂有友如此。即男子亦罕。而孰知其遽永訣哉。今茲余冥然憶其一言一語。一舉一動。在是使余心傷。而此一篇。亦適足為導泪之文耳。

196 施蟄存の『十年創作集』（華東師範大学出版社、1996）に収録される小説は、「薄暮れ」、「日暮れ」の時間帯に物語が紡がれるもの過半数を占めている。中国現代文学における秋や日暮れなどが頻出する作品の研究はいまだに見られない。

197 施蟄存は卡党の中で「欧化小説のすごい腕前を持つ」と評されている。徐碧波「浪漫談」、『世界小報』第257号（1923年10月30日）を参照。原文：青萍「欧化文字」。皆為辣手。

198 惲鉄樵、張舎我らは、1916年に『小説月報』においてアメリカのFrank Richard Stocktonを通じて問題小説を中国に取り入れた。鴛派側が導入した問題小説とは、登場人物が板ばさみになるような状況・展開を設定し、読者を悩ませ、それを楽しませることが目的である。これに対し、後に新文学が名づけた問題小説とは、社会に存在している問題を直視し、読者の義憤をかきたて、問題解決の方法を探究することに目的がある。範伯群『中国現代通俗文学史』北京大学出版社、2007、220頁を参照。また、『虎林』第3期（1923年5月6日）に戴望舒が問題小説に関する一文を書いている。「問題小説の始祖はアメリカのフランク・R・ストックトンである。」原文：問題小説之鼻祖為美之史篤唐。Frank Stockton先生。戴夢鷗。

199 許地山「春桃」に似たプロットが見られる。「春桃」論について、黄日貴「月有陰晴圓缺人有悲歡離合——『帰来』與『春桃』的比較」、『広西民族大学学报』第2期、1991を参照。

200 原題 *Le Retour*、沈澤民訳「帰来」、『小説月報』第12巻第12号（1921年12月）に掲載。また、李青崖訳「帰郷」、『東方雑誌』第21巻第19期（1924年10月10日）に掲載。

201 谷葦、銭紅林「訪施蟄存」、『小説界』第5期（1993）。原文：我開始写的還是比較傳統的短篇小説，稍稍有些法国派。また、施蟄存「我的第一本書」、前掲『北山散文集』（二）、1056頁を参照。原文：這時，我已決心搞文学，当作家。我十分崇拜歌德、莫泊桑、屠格涅夫。

202 CCC君（香港）が、「郷人」において農民が指を切られることを心配するという叙述には破綻が見られると指摘したのに対し、施蟄存は以下のように返答した。「私はこの小説を書くにあたって、常に心理の描写を好んでいた。農民たちの呉匪を恐れる心理をできる限り描こうとしたのだが、凝りすぎてかえってまづいことになってしまった」。施青萍「答香港CCC君」、『最小』、第164号、1924年3月5日。原文：該篇我作小説。常喜歡描写心理。我想竭力的写鄉民畏懼吳匪的心理。以致這樣弄巧成拙。

203 『半月』第2巻第19号、1923年6月14日に掲載。署名施青萍。

204 付記：いろいろな書籍を参考した上、以上のようなものを構成した。読者はこれを小説として見なしてもよからう。原文：纂輯群書。成此一紀。読者以稗官之說視之可矣。

205 全三冊、中華書局、1917。魯迅が周瘦鵑のこの翻訳を「闇夜の中の薄明かり、鶏の群れの中で鳴く鶴」（原文：昏夜之微光，鶏群之鳴鶴）と高く評価していた。「通俗教育研究会審刻小説報告」、『教育公報』第4年第15期、1917年11月30日を参照。

206 「周瘦鵑の訳文の形態は多様である。文言文の叙述スタイルもあれば、白話の講談スタイルもある」、原文：形態多様，有文言叙述体，亦有白話講談体。張麗華『現代中国「短篇小説」的興起——以文類形構為視角』、北京大学出版社、2011、85頁。

207 例えば「綵勝紀」などの恋愛小説にはやや高雅な文言文を用いているのに対して、「聖誕華筵記」、「棄家記」などの社会的な題材には白話文に近い平易かつ簡潔な文言文を用いている。

208 『半月』第2巻第15号、1923年4月16日に掲載。署名施青萍。

209 原文：女佣亦会稽籍。……日携余坐其下。授余山歌二三則。

210 斎藤敏康「雑誌『半月』における施蟄存」、『立命館経済学』第50巻第5号、2001年12月を参照。

211 『新文学史料』第3期、2005に掲載。

212 施青萍「新旧我無成見」、『最小』第92号、1923年9月7日。

213 蘭社同人文艺旬刊『蘭友』第8、10期の「小説界消息」よれば、施蟄存の第一小説集は当初『江之華兮』と題されていたが、後に『江干』と改題された。「江干」は民国時代の杭州の行政区であり、江干に属する徐村、梵村などでは漁業と猟業が主な産業であった。



- 214 当時、鴛派の出版物では「排圈」の使用がごく普通であった。朱智光は『最小』第93号（1923年9月9日）所載の『江干集』の批評で、同書が「排圈」を使用していないために見た目が良くなく読者に好まれない、と遺憾の念を示していた。原文：不過我有一点意見。覺得不加排圈。于外觀上。不能引起読者の美感。
- 215 『橡湖仙影』、『迦音小伝』、『洪罕女郎伝』、『離恨天』、『紅葉露伝』、『大食故宮餘載』、『青黎影』、『孤星淚』、『蛇女士伝』などの文言小説からの抜粋である。
- 216 『蘭友』第14期（1923年6月1日）。原文：有聊齋俊語零語。説林小艶。
- 217 施青萍「答香港CCC君」、『最小』第164号、1924年3月5日。
- 218 小説痴「説林片集」、『微光』第2期、1924年3月2日。原文：凡著作界中人皆常三復斯言。
- 219 『最小』第70号、1923年7月25日。原文：不日出版。声重鷄林。可予卜焉。
- 220 『蘭友』第15期、1923年6月11日。原文：計此書出版後。当在文壇上增一雄獅也。
- 221 「各作品はみな描写に極めて優れ、特に真摯な天性を描きだしている」（原文：篇篇都極描写之能事。而尤以描摹天性的真摯）、朱智先「評『江干集』」、『最小』第93号、1923年9月7日を参照。徐碧波が「浪漫談」（『世界小報』第271号、1923年11月13日）に、『江干集』を読んだ後、「まるで口にオリーブを入れたように、豊かな味わいがなかなか消えない」（原文：果覺如啖諫果、津津然味美於回）と称賛している。金君珏「読『江干集』後」（『世界小報』第377号、1924年3月7日）が同書のデザインを「そのデザインの精緻且つ優雅さは、十分人に美感を覚えさえる」（原文：至其式様之精雅、尤足令人發生美感）と称賛している。
- 222 『世界小報』第292号（1923年12月4日）を参照。原文：直已抉得畏盧精微要竅、最為余所欽佩者、非但不強分新旧畛域、且從而調劑之。
- 223 施青萍「致姚民哀書」（『世界小報』第287号、1923年11月29日）を参照。
- 220 彌灑はラテン語 Musai、すなわち英語 Muse の音訳から来ており、文芸を司る女神（「司文芸の神女」）を意味している。胡山源「彌灑臨凡曲」、『彌灑』創刊号、1923年3月を参照。
- 221 原文：本会以破除新旧意見。順會員内心之情感。發為作品。以創設中国新文学為宗旨一。以整理中国旧文学為宗旨二。以研究及介紹世界文学為宗旨三。
- 222 原文：本会以研究介紹世界文学、整理中国旧文学、創作新文学為宗旨。
- 223 原文：青萍對於新文学旧文学。都有研究和心得。
- 228原文：「嗟乎。女郎者。直人類之春耳」、「世界中女郎不応死于春時。」
- 229原文：余友藉所告余者既畢。
- 230 施蟄存は『蘭友』第7期で旧体詩「不忍詞」を發表したことがあり、後に「紅禪記—不忍詞本事」も執筆している。この「不忍」という言葉の由来は、康有為により創刊された『不忍』（1912）にちなんでいると思われる。
- 231 施蟄存は伝聞の叙述者である「余」という一人称を使用しながら、「余」に全知の視点を与えており、恐らく伝統小説の語り方を踏襲したと考えられる。古典的な筆記小説の中ではこのような作品が絶対的多数を占めているという。陳平原『中国小説叙事模式的轉變』（北京大学出版社、2003、65頁）を参照。
- 232 原文：「即同性間亦易成至友」、「固一輕薄子。」
- 233 原文：即深夜命車叩同学陸氏門。訴其經過。
- 234 原文：余意世界上無情者。則男女間無相忌嫉。
- 235 原文：素善傷心。
- 236 綵勝は婦人用の髪飾りである。『欽定音韻述微・勝』に、「花勝や、綵勝という場合の『勝』とは、立春の日に使う髪飾りのことである」。（原文：又花勝、綵勝、春日冠簪之飾）。高承『事物紀原・歳時風俗・綵勝』に『歳時記』を引いて、「綵を切り取って、勝を作るとは、晋代に賈充の妻が作ったものに由来している。黄母（西王母）が勝を付けること。」（原文：剪綵為勝，起於晋代賈充夫人所作，取黄母戴勝之義也）と記している。また、「綵勝」は唐宋の詩詞にしばしば用いられている。例えば、張繼「人日代客子是日立春」の「遥知双綵勝，併在一金釵」、辛棄疾「好事近・席上和王道夫賦元夕立春」の「綵勝鬧華灯，平把東風吹却」などがある。

237 原文：因物結想。結想成痴。緣痴生愛。

238 原文：將望事之或有萬一轉機。能償夙願。……當此時。而欲遂其夙願。厥惟明白告父取消訂婚一舉耳。此既不敢。

239 原文：但蟄居一室。洒其浪浪情泪。誓以一死報雲玲。

240 懷玲は日々の生活の中で父親の意に逆らうような行動を控えていた。例えば、親戚の家を訪ねて新年のあいさつをすることが嫌いでも、親の命令に従わざるを得ない（「顧格于父母命」）。そのほかに、父親を畏怖し、威圧感を感じて恐れおののくこと（「畏父」「懼于老父威棧」）などがあげられる。

241 原文：蓋方其為子女締婚時。幸毋獨憑己意。

242 金君珏「読『江干集』之後」、『世界小報』第374号（1924年3月4日）を参照。原文：通篇用画家白描法、写情極好。

243 原文：在他未結婚以前。他在中学里讀書是極活潑的。

244 施蟄存は陶雯の観点を表す言葉（「他以為他的妻子不是由戀愛而結合的。所以他們倆中間是沒有愛情的。他以為由舊式而結婚的妻子。決計不能與他和諧的。」）に、同時代の言説を意識的に取り込んでいる。彼は五四期に流行していたスウェーデンの社会思想家・女性運動家エレン・ケイが語る恋愛観を参考にしたものと同推測される。ケイの文章を以下に引用しておく。「無論怎樣的結婚，一定要有戀愛才算得道德。如果没有戀愛，縱使經過法律上底手續，這結婚仍然是不道德的」、本間久雄著、瑟盧訳「性的道德底新傾向」、『婦女雜誌』第6卷第11号（1920年11月）に収録。ちなみに、愛のない性的欲望は否定されるという新たな規範を生み出したエレン・ケイの『恋愛と結婚』の中国語訳『恋愛與結婚』（光明書局、1923）は、朱舜琴によってなされた。

245 原文：人的勇氣最不容易發生。所以我們也不能深怪陶雯。

246 原文：在別個少年處陶雯的境界。我知道有一大半要向厭世的路上去的。

247 原文：讀者要曉得舊式的女子也很有許多不錯的。雖然她們沒有多大的希望。她們只知道她們自己達到賢母良妻的地位。但是我以為如果凡是女子都能做賢母良妻。也未始非社会的幸福呢。爭奈現在許多一知半解的女子。竭力的攻擊她們舊式的姊妹。說她們是屈伏在男子勢力之下。做男子的玩具。於是結果使她們竟不能配一個有學問的丈夫。這不是太過了嗎。所以我說陶雯妻子真是一個好妻子。

248 「これはすべて三人称の小説であり、その中に作者の主観的な議論或いは説明を挿入するのは、すなわち作者が突然現れることである。小説は形式上の統一性が失われてしまうので不適切な創作手法と考えるべきで、改善すべきだ」、と夏丐尊が述べている。夏丐尊「論記敘文中作者的地位並評現今小説界的文字」、『立達季刊』第1巻第1期（1925年6月）を参照。原文：這都是第三人称の小説，而于中却夾入着作者主観的議論或説明，就是作者忽然現出。文字在形式上失了統一，應認為手法上的不周到，須改善的。

249 陳平原は『中国現代小説の起点—清末民初小説研究』（北京大学出版社、2005、231頁）で林紓、吳趸人、周瘦鵑の小説を取り上げ、理想的な女性像に現れる新／旧及び中／西の対峙、更には20世紀初頭の知識人の文化選択との関係を詳しく論じている。

250 陳延滢が『婦女雜誌』を例として2、30年代の中国における良妻賢母の女性像の変遷を詳細に論じている。『東アジアの良妻賢母論—創られた伝統』、勁草書房、2006。

251 奮小傑『中国現代社会言情小説研究』（中国社会科学出版社、2004、209頁）を参照。

252 周叙琪「国立台湾大学文史叢刊」『1910～20年代都会新婦女生活風貌』（国立台湾大学出版委員会、1996、232頁）を参照。

253 包天笑「一縷麻」（『小説時報』第2期、1909）で描かれる愛情の喪失から復活までの変遷プロセスと似た構図が見られる。

254 原文：物質方面的供应。果然十分不满意。而精神方面。我們倒反都覺得有一種異樣的愉快。

255 原文：以下就是那拉胡琴的說的話。

- 256 原文：当他说完之後。我直覺得有不少的思想。攢緊在我腦筋中。但我也竟不能將這許多思想細細的抽繹出來。
- 257 原文：如果那時我們只是互相做朋友。那麼到現在。雖然精神上受些缺陷。而在物質的享樂方面。我們當然決不會像現在的窘迫的。
- 258 黃軫陶「讀施青萍『江干集』以後」、《世界小報》第389号（1924年3月29日）を参照。
- 259 金君珏は「讀『江干集』之後」（《世界小報》第397号、1924年3月6日）で「梵村歌侶」を評して、「結末の數言は怪しいようだ」と述べている。原文：末數語似不倫。また、黃軫陶は「讀施青萍『江干集』以後」（《世界小報》第389号、1924年3月29日）で、「最後の一段落の議論はあまり意味がなく、かえって読者に理解されにくい」と指摘している。原文：末一段の議論、似乎無謂、反使讀者一百個不解。
- 260 Albert Mordell: *The erotic motive in literature*, New York, 1919、劉文英訳『文学中的色情動機』、文滙出版社、2006、68頁を参照。中国語訳：如果某個作家的作品中經常出現某一主題，或者總是使用某種語調，那一定是出于他個人生活中的某些原因。
- 261 趙園「五四時期小說中的婚姻愛情問題」（《中国社会科学》第4期、1983）は、五四小説の中に描かれている人物は「個人の狭い世界に閉じこもり過ぎており、社会的歴史的な角度から個人の運命を観察することに慣れていない」ために、「登場人物の悲劇的な性格が、生来の憂鬱から来ているように見えてしまう」と指摘している。原文：他們過分地囿於個人狹小的經驗世界，不習慣於從社会歴史的的角度觀察個人的運命。（中略）以致人物的悲劇性格象是来自与生俱来的憂郁性。施がこれらの作品において描いた恋愛問題には、同時代の五四新文学派小説と共通する問題が潜んでいると言えよう。
- 262 陳平原『中国小説叙事模式的轉變』（北京大学出版社、2003、73頁）；『中国現代小説の起点——清末民初小説研究』（北京大学出版社、2005、243頁）を参照。
- 263 施蟄存らの社団活動に関する先行研究は多い。例えば、楊之華『文壇史料』（大連書店、1944）、施建偉『中国現代文学流派論』（人民出版社、1986）、賈植芳等編『中国現代文学社団流派』（江蘇教育出版社、1989）、趙凌河『中国現代社団論』（遼寧人民出版社、1990）、金理『從蘭社到「現代」——以施蟄存、戴望舒、杜衡及劉呐鷗為核心的社団研究』（上海書店、2008）などがある。本章では、これらの先行研究ではあまり言及されなかった施蟄存の20年代初期における維娜絲文学会や青鳳文学会などでの活動を視野に入れ、当該時期の彼の文学観が如何に後期の社団活動へと展開していったかを検討したい。
- 264 「立券」とは、王雲五編『郵政』（商務印書館、1933、49頁を参照）によると、新聞紙類の郵送料を毎月送る新聞の総量によって計算し、まとめて支払うシステムのことである。
- 265 「蹣跚在新旧文学之間」、《文芸報》1987年7月18日、第8版に掲載。
- 266 原文：1923年，我在杭州之江大学肄業，與友人戴望舒、張天翼等辦此小刊物，其時尚屬於鴛鴦蝴蝶派文人，故頗有旧文学気味。越二年，始轉向新文学，不復作此等文字。徐家滙藏書樓有此刊十三期，閱之驚喜，惜缺少四期，不知天壤間尚有存者否？六十年前少年文字，今日閱之，甚愧幼稚。
- 267 「杭州的報屁股」（下）。原文：蘭友。蘭友旬刊。以小説為主体。編者都是属小説界的健者。他們作品早已在海上風行。該報編法與内容。可称全浙之魁。
- 268 第5期（1923年8月16日）。原文：蘭友大家曉得是小報中之霸王。蘭社社員的心血結晶体。幾個著述。都是很有名。
- 269 『蘭友』の売上部数は、『蘭友』第8期（1923年3月21日）の折り目の記事による。『蘭友』の発行部数に関して、もう一説がある。董校昌によると、『蘭友』の発行部数は每期1000部足らずであったという（董校昌「蘭社與『蘭友』旬刊」、《杭州時報》1985年4月19日）。『世界小報』第148号（1923年7月14日）、笑天が「我也談談小報」に、当時の小報の印刷部数と純利益などを書いている。それを参照すると、2万部の発行部数は一桁誤っているのではないかと思われる。
- 270 「ヴァーズフは革命的文学者であるばかりでなく、旧文学のレールの破壊者でもあり、名文家（Stilist）でもある」、魯迅「戦争中のヴェルコ」記者附記、『魯迅全集12』、学習研究社、1985、244頁を参照。
- 271 『蘭友』第1期から第4期は未見だが、鐘韻玉によると、第1期には「出版的話」と7本の小説が掲載されており、最も力が入った優れた作品は施青萍の「幾種不相同的笑」であるという。鐘韻玉「飯後閑評・評評各種小報」、『緑痕』第7期、1923年9月5日を参照。原文：蘭友旬刊第一期是一篇出版的話。和七篇小説。最精力

傑構。筆墨深刻的。就是施青萍的幾種不相同的笑。

272 胡瘦鶴は「中国現代小説的趨向」で「現代中国小説における描写作品は多くが社会と家庭の方面に偏っている。そのため、労働者問題、改造問題、婚姻問題、妾や下女の問題などが、現在小説の最も人気ある題材となった」と指摘している。『蘭友』第15期（1923年6月11日）を参照。原文：現代中国小説文学上の描写文字。大都傾向于社会和家庭一方面。所以那些劳工問題。改造問題。婚姻問題。妾婢問題。都成了現今小説文字上最熱鬧的題材。

273 例えば陳白塵が姚慶慶、張天翼らの活躍ぶりを羨んでいた。陳白塵『対人世的告別』三聯書店、1997、160頁を参照。

274 緑「文壇消息」、『緑痕』第3期、1923年7月21日；『時報』1923年8月8日、署名「修甫」の記事を参照。

275 『緑痕』第2期（1923年7月11日）の「文壇消息」に、『蘭友』は第18期から紙幅を増加し、小説やエッセーを多く掲載し、48行に変更するとの旨が見えるが（原文：蘭友第18期起増加篇幅。多登小説及雜論。改為48行云）、施蟄存は前掲の1988年の題辭において、13期分が発見されたことを喜ぶとともに「4期分が欠けている」と発言しており（注256参照）、第18期は結局刊行されずに終わったようである。

276 「施青萍」特集号に「閨誥」、「名人之情書」、「蘭閨月令」らの6篇が掲載されている。「文壇消息」、『緑痕』第6期（1923年8月24日）を参照。

277 発刊地・編集者。以下同じ。

278 『緑痕』第7期、1923年9月5日を参照。『緑痕』は杭州岳王路第3号に拠点を置く緑社の同人誌。緑社の発起人は戴望舒の従兄弟鍾韻玉で、『蘭友』のスタイルを真似して『緑痕』を発行した。

279 「卡というのは、上ではなく、下でもないものの呼称である。卡党というのは、中間位置にいる作家の結党である。命名者は徐碧波である」。範菊高「談卡党」、『最小』第71号、1923年7月27日。原文：卡者。不上不下之称也。卡党云者。中等作家結合之会也。取名者徐子碧波。卡党の結成についての詳細は不明だが、黄軫陶が『最小』に「卡党小伝」を連載し、施蟄存、戴望舒、杜衡、王天恨、張無諤らの20人の卡党メンバーを紹介していた。筆者が閲覧した鴛派刊行物『蘭友』、『虎林』、『癸亥』、『筆鐸』などが主に卡党のメンバーが編集者・執筆者であった。

280 徐碧波「江浙和平契約和蘇杭両党」、『最小』第88号、1923年8月30日を参照。即ち、杭党は浙江地方を指し、蘇党は江蘇地方を指している。そのなかで、戴夢鷗は浙江皖系軍閥督軍・浙滬聯軍總司令盧永祥、黄軫陶は江蘇省長韓国鈞、施青萍は浙滬第一軍正副司令何豊林であると茶化されている。江浙戦争とは、1924年9月2日に江南地域で起きた軍閥の権力争奪をめぐる戦争で、40日余り続き、皖系が直系に敗れて終わった。陳長河、殷華「從档案看1924的江浙戦争」（『歴史档案』第2期、1995）を参照。

281 『最小』第168号（1925年4月15日）掲載。ここに書かれる卡党大会のことは架空のものであるが、ここからは強固な組織への希求、同人たちの熱意、そして、その中で主席にと囑望されている施蟄存の高い人望がうかがえる。

282 謝魯渤「我眼中的杭州詩意」、『美文』第1期、2008を参照。

283 『民国日報』1923年9月5日、第1版広告欄「上海大学録取新生案」の「中国文学系一年級」新入生リストを参照。その中で施蟄存と戴望舒が用いている名前は、それぞれ施德普、戴朝棠である。

284 原文：我們很愉快很自由地集合了，互助着研究我們所愛的文学，現在我們覺得我們正如鳳鳥一樣地在香木中燃燒，我們希望将来的美麗和永生，所以我們便以青鳳作為我們的集合名字。／我們也没有一定的組織；也没有章程，也没有什麼宣言。我們只是很愉快地報告我們的同志道：「我們的青鳳文学会從今天起成立了」。

285 Kahlil Gibran, カリール・ジブラーン（1883～1931）はレバノン生まれのアラブ系作家である。彫刻家ロダンに師事したことがある。代表作『預言者』は世界30か国以上に翻訳された大ベストセラーとなった。ここに出たのは出版の予告のみであったが、1931年冰心によって訳出された。後に施蟄存は1943年1月に『先知』及其作者」を執筆し、1947年に『兩個嬰兒』を訳出した。

286 上海市委党史資料征集委員會編集、王家貴等著『上海大学：1922～1927』（上海社会科学院出版社、1986）

及び黄美真等編『上海大学史料』（復旦大学出版社、1984）の中で青鳳文学会を取上げている。

287 青鳳文学会の「青鳳」は『聊齋志異』巻一「青鳳」の狐の化けものである「青鳳」の名の使用から施蟄存らの伝統的審美感が窺われる。五四新文学派の出版物が「新」の文字をよく用いたのとは対照的に、「青鳳」、「蘭社」の名は星社、青社、紫羅蘭などの鴛派の社団名、同人誌名と類似しており、青鳳社と鴛派との文学的センス、趣向においての合致性がうかがえるだろう。また、青鳳文学会の趣旨に関して、『民国日報』副刊「覚悟」及び『小説月報』（第17巻第4号、1926年4月）で紹介されているように、「お互いに助け合いながら、彼らの愛する文学を研究する」（原文：互助着研究他們所愛的文学）という一文から、彼らはあくまでも自らの趣味を重んずることを前提として文学を研究していたことがうかがえよう。そこからは社会改革など重大な歴史的使命を担うことを目指す新文学派との質的な相違が見られるであろう。

288 戴夢鴟、施青萍「蘇州的二日」、『世界小報』第222号（1923年9月26日）を参照。

289 「施先生、小説原稿はすでに拝見しました。住所を教えてください。沫若」。原文：施先生，小説稿已奉読，請把住址示我。沫若。

290 朱健国「施蟄存の第五扇窓戸」、『文学自由談』第98期、2004年5月。原文：看到了這個學校讀書不行。

291 「我的創作生活之歷程」、前掲『灯下集』、59頁。

292 通信處：江蘇松江城内県署南四〇三号瓔珞旬刊社（施蟄存の松江の実家の住所である）。定価三分。

293 瓔珞社の通信處は臨時に施蟄存の松江の実家に設置された。瓔珞とは元々古代の珠玉を連ねて作った貴重な首飾りのことである。沈子成「記水沫社」、『小説月報』（1940年10月創刊、聯華廣告公司出版部發行）第41期、1944年5月15日を参照。原文：系採微小珍貴之意（瓔珞本系古代珠玉連成之珍貴頸飾）。

294 それぞれの筆名は以下である。安華一施蟄存、信芳一戴望舒、白冷・徳嘯・禹生一杜衡。

295 『瓔珞』第2期、1927年3月27日、13頁。原文：訳者不但不通法文，就是国文也還般不到精通二字。

296 「青萍談吐」、『虎林』第5期（1923年5月26日）に掲載。原文：惟所惜吾儕近来無紹介西洋文学者。且無一與小説月報性質相同之雜誌。故相形之下。似少拙耳。不則如新文学家言。

297 『小説月報』第17巻第4号、1926年4月、「文壇雑訊」に「三月に私たちは以下のような定期刊行物を受け取った。一つ目は『緑竹』……。二つ目は『弦上』……。三つ目は『瓔珞』である。松江瓔珞旬刊社が発刊し、現在まですでに二期を出版した。通信處は江蘇松江城内県署南四〇三号瓔珞旬刊社である」と記している。原文：三月份内我們收到的定期刊物有下列幾種。一、緑竹……；二、弦上……；三、瓔珞，松江瓔珞旬刊社の刊物，已出版兩期，通信處為江蘇松江城内県署南四〇三号瓔珞旬刊社。また、済南第一師範の李広田、鄧広銘らが『瓔珞』の愛読者であった。彼らが結成した書報紹介社が『瓔珞』の販売拠点でもあり、同人誌『牧野』の表紙デザイン、サイズなども『瓔珞』を模倣した。陳明遠「文人的經濟生活」、[http://book.sina.com.cn/longbook/his/1111394831\\_wenhuarendejingji/48.shtml](http://book.sina.com.cn/longbook/his/1111394831_wenhuarendejingji/48.shtml)（2008年12月4日閲覧）を参照。

298 拙稿「『広州民国日報』に新発見する施蟄存の作品について」、『中国文芸研究会会報』第351号（2011年1月30日）を参照。

299 施蟄存「我的創作生活之歷程」、前掲『灯下集』、61頁を参照。原文：独自去走一条新的路径。

300 シュニツラーと施蟄存の比較研究については、斎藤敏康「施蟄存とA. シュニツラー——『婦心三部曲』と『霧』、『春陽』、『野草』第66号（2000）；張東書、陳慧忠「施蟄存與顯尼志勒」、『中国比較文学』第4期（1987）などの論文がある。

301 『劉呐鷗全集 日記集（上）』（台南県文化局、2001、172頁）3月8日に、「施蟄存の新作の小説「紅衫」を読んだが、まだ幼稚の領域を脱していない」（原文：看施君的短篇「紅衫」還不服出幼稚之域）と書いている。「紅衫」は、短篇小説「娟子」（『小説月報』第19巻第1号（1928年1月）に掲載）の改題前のものである可能性が高い。「娟子」ではヒロイン娟子の「紅衫」（赤い毛糸のセーター）が重要なモチーフとして現れており、また登場人物である蕪村が燃やす性欲の象徴でもある。彼がこれを娟子の体から強引に剥ぎとって懷に抱き締めるシーンは、女弟子の体臭を残す「蒲団」に時雄が顔を埋め匂いを嗅ぎながら泣く、という田山花袋の『蒲団』の結末を連想させる。

302 前掲『劉呐鷗全集 日記集（上）』1月4日と19日、36と66頁を参照。

303 施蟄存「最後一個老朋友——馮雪峰」、前掲『北山散文集』（一）、286頁を参照。

304 その後、光華書局は「水沫社」の文字が印字された「螢光叢書」を1929年4月から続々と出版するに至る。同叢書の中には、施蟄存が柳安の筆名で翻訳したイタリア人作家ボッカッチョの『十日物語』（『デカメロン』）と、孫昆泉が翻訳したゴーリキーの『瑪爾伐』（『フォマ・ゴルデーエフ』）が収められている。

305 「水沫社イテ叢書」の「イテ」は、「独力で行い、行動を共にするものがないとの寓意である」。施蛰存「懷開明書店」（前掲『北山散文集』（一）、332 頁）を参照。原文：寓独行無伴之意。「イテ叢書待刊書目」リストには、アラン・ポーの『黒猫』（施蛰存訳）、森鷗外の『杯』（馮雪峰訳）、シュニツラーの『蓓爾達・迦蘭』（『ペルタ・ガルラン夫人』（施蛰存訳）など7カ国の作品が挙げられる。

306 虹口江湾路の六三花園付近にある。六三花園は長崎出身で上海で日本式の料亭を営んでいた白石六三郎によって1908年に建設された日本庭園で、上流階級の居留邦人の社交場であった。

<http://gd.shwalker.com/shanghai/contents/serialize/200509/index.html>（2012年7月7日閲覧）を参照。

307 1928年11月29日、上海で開いた「新書業公会第二次籌備会」に第一線書店もその一員として参加した。陳樹萍『北新書局與中国現代文学』（上海三聯書店、2008、243頁）を参照。

308 『無軌列車』第1期、1928年9月10日。挿入広告を参照。原文：可以担保永不脱期。

309 『無軌列車』第1期、1928年9月10日。挿入広告を参照。原文：滿足你這許多欲求的最精緻的小刊物。

310 『色情文化』について詳しくは藤井省三「台湾人『新感覺派』作家劉訥鷗における1927年の政治と＜性事＞—日本短篇小説集『色情文化』の中国語訳をめぐって」、『2007年台日國際學術交流國際會議論文集：殖民化與近代化—檢視日治時代台灣』（亜東關係協会編、台北外交部出版、2007、126～139頁）を参照。同論文中国語訳は『劉訥鷗全集：增補集』（国立台湾文学館、台南県政府共同出版、2010）に収録されている。

311 沈子成「記水沫社」、『小説月報』第41期、1944年5月15日。

312 原文：惟一的中國現代文芸月刊。

306 随初（黄天佐）「我所認識的劉訥鷗先生」、『華文毎日』第49号、1940年11月1日。原文：當時的水沫書店是受了日本文壇左翼作品盛行的影響，成為左翼作家的大本營，左翼份子常假借該書店樓上開會。

314 施蛰存「我們經營過三個書店」、前掲『北山散文集』（一）、316頁を参照。

315 「文芸短訊欄目」、『草野』第4巻第4号、1931年1月16日。

316 水沫來函「水沫書店的購買部的旧住所は營業開始し、新書數十種の出版を計画中であるという」、『草野』第4巻第6号、1931年1月30日。原文：聞飯水沫書店門市部旧址。開始營業。並計画中即將出版新書數十種云。

317 「書業別訊—水沫書店來函摘刊」、水沫社同人、1931年1月13日。『草野』第4巻第5号、1931年1月24日に掲載。

318 前掲『北山散文集』（一）、307頁を参照。

319 施蛰存の鴛派作家、新文学派作家たちとの交友遍歴は、彼の創作・翻訳・出版活動において重要な位置を占めるとして施蛰存研究において近年ますます注目されている。例えば、前掲金理、吳福輝の著書が挙げられる。

320 王文彬『雨巷中走出的詩人——戴望舒伝論』（商務印書館、2006、62頁）を参照。

321 シンガー（Isaac Bashevis Singer）は *Hunger*; Alle Preisangaben inkl. MwSt. に「20世紀の現代派小説はハムスンから始まる」（“The whole modern school of fiction in the twentieth century stems from Hamsun. They were all Hamsun’s disciples: Thomas Mann and Arthur Schnitzler …… and even such American writers as Fitzgerald and emingway.”）と評している。何成洲『対話北欧經典——易卜生、斯特林堡與哈姆生』（北京大学出版社、2009、99頁）を参照。

322 「『中国近代文学大系・翻訳文学集』序言」、1990年3月18日に執筆、前掲『施蛰存全集』第4巻、1515～1532頁。

323 原文：我主張翻譯只要達意，我從英文本訳，只能做到達英訳本的意。英訳本对原文本負責，我对英訳文負責。傅雷則主張非但要達意，還要求伝神……我主張原文原意識，寧可加個注，說明這個成語的意味相当于中国的某一句成語。前掲『北山散文集』（一）、350頁。

324 原文：要大胆脱離原文語法、結構，但不要歪曲原文意旨。1978年12月25日。劉凌編『施蛰存全集』第5巻、華東師範大学出版社、2011、1856頁を参照。

325 『恋愛三昧』訳序、1994年7月10日に執筆、岳麓書社、1994。

326 郭延礼『中国近代翻譯文学概論』湖北教育出版社、1998、55頁を参照。

327 施蛰存「『中国近代翻譯大系・翻訳文学集』序言」、前掲『北山散文集』（二）、1395頁を参照。

328 姚錫佩「滋養魯迅的斯堪的納維亞文化」、『魯迅研究月刊』第9期、1990；袁荻湧「魯迅與北欧文学」、『張家口師專学報』第2期、1996を参照。

329 原題 Un Hiver en Foret。『学芸』第1巻第5期、丙辰学社、1921年5月に掲載。1926年2月に商務印書館が出版した「学芸彙刊10」の『短篇小説集（一）』にも収録される。

330 「創造十年」、『郭沫若全集・文学編』第12巻、人民出版社、1992、85頁；郁達夫「蕪城日記」（1921年10月5日）『時事新報・学灯』1921年11月3日に初出、『郁達夫全集』第9巻、三聯書店（香港）、1984、5頁を参照。

331 書簡番号271 恒藤恭宛と、書簡番号782 佐佐木茂索宛、『芥川龍之介全集7』筑摩書房、1971、177と329頁を参照。

332 中山義秀『台上の月』新潮社、1963、121頁を参照。

333『林芙美子全集第二巻・放浪記』（新潮社、1952）の「あとがき」に「この放浪記を書きはじめた動機は、ハムスの『飢え』という小説を読んだからである」と記している。『放浪記』の中には、「6月X日、クヌウト・ハムズンの『飢え』と云う小説の中にも蠟燭を買いに行つて、五クローネルのつり銭と蠟燭をただでもらつて来るところがありましたね」（43頁）、「クヌウト・ハムズンの『飢え』と云う小説を読んで感激したものであつた」（290頁）など、『飢え』に言及する箇所が見られる。

334 ハムスン文学に関しては、宋炳輝『弱勢民族文学在中国』（南京大学出版社、2007）、李春林「魯迅與哈姆生一謹以此文記念作為『現代派文学之父』的漢姆生誕辰150周年」（『山東師範大学学報』2010、第4期）において、民国時代のハムスン文学の紹介や翻訳の概況が述べられている。しかしながら、中国におけるハムスン文学の受容に関する系統的な論著はまだ見られない。

335『小説月報』第12巻第2号（1921年2月）「海外文壇消息」を参照。

336原文：読千百篇恋愛小説、不如読此『愛的故事』。他抒情地描繪地写出恋愛の本質、恋愛的空虚来。『現代』第5巻第1号（1934年5月）にも同じ広告が見られる。

337「論『他媽的』」、上海暨南大学での講演「文艺與政治的岐途」、雑文「哈謨生的幾句話」を参照。『新文藝』1巻第2期（1929年10月15日）、「国内外文壇消息雑話（十）」、「中訳哈姆生名作三種」は、「魯迅も『魏都麗姑娘』（*Victoria*）の翻訳をしている」と記している。

338「哈姆生的維多麗亞」、『進展月刊』第1巻第4期、1932年1月を参照。原文：細繹其書則演婚姻不能自由之痛苦固一問題小説也；惟作者手段高妙，故不露痕跡耳。

339 George Egerton は Mary Chavelita Dunne Bright の筆名である。Alfred A. Knopf の版が底本。汪馥泉「關於哈姆生」、『新文藝』第1巻第1期、1929年9月15日を参照。

340 章鉄民訳『餓』と、三上於菟吉訳『飢餓』（進文堂・榎本書店、1924）は同じ英訳本から重訳されたと見られる。二つの訳本を宮原晃一郎訳『飢え』（新潮社、1921）と照らし合わせてみると、同じ箇所に省略見られる。例えば両訳共に「私」がユラヤリイの家にいたときに彼女と交わした親密な行動、言葉などを省略している。また、第四章で女将が親爺の前で水夫と寝た光景を目にした「私」が呆然とすることを省略した。その一方で、宮原訳には見当たらない「増訳」された部分もある。

341

342 仲郷三郎「ハムスン論（三）」、『博物』第5号（博物発行所、1937年6月）；『新潮』第38巻5号（1923年5月）、「ノオベル賞金の由来と其の賞金を得た人々（2）」の「(20)クヌウト・ハムズン」を参照。

343『新文藝』第1巻第2期（1929年10月15日）、「国内外文壇消息雑話（十）」の「中訳哈姆生名作三種」には、施鵬存がすでに *Pan* を『恋愛三昧』として訳出し、光華書局より近刊と記されている。

344 拙稿「施鵬存の初期恋愛小説について」、『東方学』第122号（2011）を参照。

345 原文：「有一種男子的勇氣昇上来」、「要求制服她的心在我身里急突地催促着」。「梅雨之夕」、『創造十年集』華東師範大学出版社、1996、252頁。

346「特殊な快感が僕に起こつた」、「髪のパウダー、その身体から出る温み、女の香り、顔を此方へ向ける度にかかるその呼吸」、「皆僕の身に流れ込んで、僕の五官を無暗と圧迫した」、「ふと奇妙なむら気がさした。その女の後を尾つて、脅かし、どうかして怒らしてやりたいものだという、変な心を起こした」。宮原晃一郎訳『飢え』、新潮社、1923、168頁を参照。

347 山室静「ハムスンの場合」、『近代文学』（1949年3月）；「*Pan* という散文詩小説」、『小説月報』第12巻第2号（1921年2月）；「抒情詩的な基調」、「無韻の詩」、山室静等編『現代世界文学講座8：北欧、南欧、東欧篇』講談社、1956、18頁を参照。

348 吳福輝「施鵬存：対西方心理分析小説的向往」、『走向世界文学——中国現代作家與外国文学』（湖南人民出版社、1985、291頁）、斎藤敏康『新的路徑』を歩み始めるまでの施鵬存、『野草』第58号（1996）を参照。

349「私」は懷玲と雲玲の間に見出した「愛の芽生え」を賛美し、二人の愛の不幸な結末の根本的原因を分析している。拙稿「施鵬存の恋愛小説について」、『東方学』第122号（2011）



を参照。沈復の『浮生六記』に見られるように過ぎ去った時間を見つけ、失われた思い出を求める「過去の体験」、「追憶の諸相」をめぐるという文学のジャンルがある。古典文学に精通している施は『浮生六記』に触発された可能性がうかがえよう。また『浮生六記』に現れている「輕羅小扇」（「輕羅をまとい、小扇を手にする」、愛の証としてお粥の置きなどは「扇」のなかにも見られる。

350 施蟄存は、芸術の最高の境地とは主観と客観が融合された「夢の趣」である、と述べている。「雨的滋味」、前掲『灯下集』、18 頁を参照。

351 「ジョージ・スタイナーの述べるように、文学作品の翻訳者は原作を翻訳することで、言語創造の過程を、言語と世界のアンビバレントな関係を追体験する」。井上健『文豪の翻訳力——近現代日本の作家翻訳：谷崎潤一郎から村上春樹まで』（ランダムハウスジャパン、2011）、151 頁を参照。施蟄存の『恋愛三昧』の翻訳は彼なりに感受性や想像力を追体験する過程でもある。ただし筆者は外国文学の手法が施蟄存文学の根幹を揺さぶるような作用を及ぼしたとは考えない。例えば施蟄存は「黃心大師」の中で欧化文体を排除し、伝統的な説話的な語り方及び心理分析手法を用いたことで高く評価された。

352 原文：從這本小書中欣賞到原作者的朴訥的風格、独特的修辭和北国的感傷。

353 河盛好蔵は作家の翻訳そのものが、自らの理解に基づく原作に対する一種の再創造であると指摘している。大塚幸男著、陳秋風等訳『比較文学原論』白水社、1977、101 頁を参照。

354 前掲井上健著書、45 頁を参照。

355 前掲井上健著書、108 頁を参照。

356 『中国新文学大系』「小説二集」序、『鲁迅全集・8』、学習研究社、1984、274 頁。原文：每作一篇，都是“有所為”而發，是在用改革社会的器械。

357 王富仁「対一種研究模式的質疑」、『佛山大学学报』1996、第 1 期。

358 榊原貴教「ハムスン翻訳作品年表」、『翻訳と歴史』第 35 号（ナダ出版センター、2007 年 11 月、41 頁）と、『図説翻訳文学総合事典』第 3 巻「ハムスン編」（大空社、2009、869 頁）とは、「生の声」は『新独逸雑誌』に掲載されたとのことだが、未見であると記されているが、実際には『新独逸雑誌』第 3、4 号（1913 年 11、12 月）に「生の声」（Die Stimme des Lebens、原文はノルウェー語）のドイツ語訳と、西澤富則の邦訳及び訳注が掲載されている。そのほか、西澤富則が翻訳した「死亡広告」（『帝国文学』19 卷 12 号、1913 年 12 月に掲載）は「生の声」の別題である（訳に多少の変動が見られる）。以下、この作品を言及する際には中国語訳と区別せず、一律に「生の声」というタイトルを使う。

359 原文：「吐了一口解放的嘆息」（梅川訳「生命之呼声」）、「輕嘆了稔然的一口气」（古有成訳「生的叫喊」）、「嘆了一口的寬心气」（吳咸訳「愛倫」）、「得了救似的嘆了一口气」（林淡秋訳「生命的呼声」）、「得到了釈放」（羅塞訳「生命的呼喊」）。

360 例えば *Norway's best stories : an introduction to modern Norwegian fiction*, translations by Anders Orbeck, London : George Allen & Unwin に ハムスンの「生の声」の英訳 The call of life が収録されている。

361 有名な外国語図書を扱っている書店は別発書店などが挙げられる。

362 訓読みは『中国詩人選集：李商隱』岩波書店、1958、29 頁から引用。

363 王義国訳『漢姆生伝記』（Ingar Kolloen, *Knut Hamsun: Dreamer and Dissenter*, Gyldendal Norsk Forlag, 2009）、人民出版社、2011。原文：比昂松發見這篇小說令人作嘔，而且檢查局局長也取締了這篇小說。

364 西澤富則「ハムズン『幽霊』邦訳附記」『龍南』第 180 卷、龍南会、1921 年 12 月。

365 「生命之呼声」、『朝花』第 6 期、1929 年 1 月 10 日。原文：本来中国的婦女没有這種勇氣，社会，也監督得嚴。

366 吳咸編『北欧集』序文、杭州擷英文芸社、1933。原文：可是目前国内一般的婢妾，竟处之淡然而不知觉悟，極可嘆息。

367 「顯尼志勒和他的作品——關於蓓爾達迦蘭夫人」、『新民声』第 11 期、1944 年 1 月。原文：關於蓓爾達迦蘭夫人，我想過很長的時候，在我們現環境的里边這樣的女人是很多的吧。

368 『ベルタ・ガルラン夫人』の出版状況は以下のとおりである。①訳題『多情の寡婦』、施蛰存訳、尚志書屋、1929年1月、②訳題『婦心三部曲——孤零』、施蛰存訳、神州国光社出版、1942年、③訳題『苦恋』、劉大傑訳、上海中華書局出版、1932年7月、④訳題『苦恋』、李志萃訳、開華書局出版、1934年4月などがある。

369 『苦恋』李志萃訳、開華書局、1934年。原文：苦恋……另一方面還含着最悲慘的婦女的問題在。

370 矢野峰人『比較文学——考察と資料』南雲堂、1978、31頁。

371 岩淵達治『シュニツラー』、清水書院、1994、149頁を参照。

372 カール・E・ショースキー（安井琢磨訳）『世紀末ウィーン』岩波書店、1983、29頁。

373 『新青年』第6巻第1号（1919年1月15日）に掲載。『魯迅全集Ⅰ』、学習研究社、1984、402頁を参照。

原文：人之子醒了：他知道了人類間原有愛情，知道了從前一班少的老的所犯的罪惡，于是起了苦悶，張口發出這叫声。

374 「施氏の作風はむろん西洋小説のよさを備えているが、彼の特長は中国旧小説のよさを吸収できていることである」、朱光潜「編集後記(二)」、『文学雑誌』第1巻2期、1937年6月（原文：施先生の作風当然也有西方小説的佳妙处，但是他的特長是在能吸收中国旧小説的優點）；吳福輝「施蛰存：對西方心理分析小説的向往」、『走向世界文学——中国現代作家與外国文学』湖南人民出版社（1985）を参照。「これらの作品は作家が備えている中国古代文学及び西洋現代文学の素養をある程度疎通させ、融合させたものであると言えよう。」原文：它們在一定程度上溝通了和融合了作家所具備的中国古代和西方現代的文学修養。楊義『中国現代小説史』第2巻、人民出版社、2005、689頁。

375 1934年1月、『現代』第4巻第3期に発表された「汽車路」について、余鳳高は、『汽車路』における小農思想は、チェーホフ『わるもの』におけるデニース・ダリゴリエフを想起させる」と指摘した（「施蛰存小説創作論」、『紹興師專学報』第1期、1991）。具体的な作品分析はほとんど見られない。

376 原文：研究文芸砥礪道德本互助之精神謀文化之發展。

377 斎藤敏康「雑誌『半月』における施蛰存」、『立命館経済学』第50巻第5号、2001。

378 例えば1983年発表の「羅洪，其人及其作品」（前掲『北山散文集』(二)、1033頁）では、「私は1924年から新文学創作を始めた」と述べ、2001年刊行の『世紀老人の話—施蛰存巻』（遼寧教育出版社、40頁）では、『瓔珞』創刊時（筆者注：1926年）には頃、私はすでに鴛鴦蝴蝶文学から新文学の創作へと変化していた（原文：『瓔珞』創刊時，我已從鴛鴦蝴蝶派文学轉變到投入新文学創作之中）と述べ、1996年刊行の『十年創作集』（華東師範大学出版社）「引言」では「私は自分の創作人生を1926年から計算し始める。『上元灯』を1926年に執筆したからである」と記し、1996年刊行の『施蛰存文集』「序言」では「文学生活のスタートを1928年に定めている」と記している。多くの研究者は施蛰存が1928年から新文学の創作を始めたと述べているが、「1928年」が四説の中でも特に重視されるのは、恐らくこの年に施蛰存が短篇小説「娟子」を1921年以降は新文学派の機関誌となっていた『小説月報』（1928年1月）に初めて発表したからであろう。

379 例えば、初期施蛰存小説で主要人物の系譜を構成する感傷的男性は、いわゆる「新文学へ転進」後の作品「娟子」などでも主人公となっている。詳細は拙稿「施蛰存の初期恋愛小説について」、『東方学』第122号（2011）を参照。

380 陳必祥編『通俗文学概論』（杭州大学出版社、1991、21頁）を参照。

381 李剛編『中国名人故居遊学館（上海巻）』（中国画報出版社、2005、277頁）を参照。原文：在新文学名家中，能與鴛鴦蝴蝶派旧文人等共处，又與閑雲野鶴式的名士異人密切往来的，恐怕只有施蛰存一人。

382 吳福輝『中国現代文学發展史』（北京大学出版社、2010、450頁）を参照。

383 「新形式的探求與旧形式的採用」、『聶紺弩全集』第3巻（武漢出版社、2004、293頁）を参照。

384 前掲『北山散文集』（一）、525頁を参照。

385 吳福輝は施蛰存が使用している文体を「文人白話」と名付け、古典白話の影響を受けながら成熟したもの

のであると指摘している。「前言」、『中国短篇小説精華：施蛰存短篇小説集』、湖南文芸出版社、1998、7頁。  
また、施蛰存がここで打ち出した「純中国式的白話文」は、蘇雪林が提唱した「標準白話」と似通っている。  
「先人の常套句を抜き出し、欧化の真似をせず、完全に民族性を表す」というのが蘇が提唱した標準白話である（1939）。『阿Q正伝』及魯迅創作的芸術、『蘇雪林文集』第3巻、安徽出版社、1996、289頁を参照。  
386『文学旬刊』（第27期、1922年2月1日）に掲載されている「民衆文学的討論」で打ち出されたもの。この議論に参加したのは朱自清、葉聖陶、俞平伯、許昂若らである。彼らは民衆の識字率の低さや、山歌、民謡の整理の必要性、世間に流通している文学読物の収集、分析などについて問題を提起した上で、実際に民間に入り、民衆のリアルな嗜好や需要を考察し、有効な材料を集めた後、さらに選択、修正を加えて純粋な文芸作品に変身させ、それを広く伝播させることを提案している。

387「關於『黄心大師』」、前掲『北山散文集』（二）、955頁を参照。

388 ペリー・リンク（Perry Link）は中国文学の連続性の問題について、鴛鴦蝴蝶派と五四作品をともに視野に入れることを提案している。（*Traditional-Style Popular Urban Fiction in the teens and twenties*、「論一、二十年代伝統様式的都市通俗小説」、賈植芳編『中国現代文学的主潮』復旦大学出版社、1990、142頁を参照。）

389「鴛」は施蛰存自身が比較的成功したと認めた作品で、都市の異化、人間の疎外感を農村から都市へ出稼ぎに来た銀行員小陸の視点によって描き出している。かつての恋人が農村から都市に出てきて同僚の愛人になったことに対し、小陸は思わず一種の喪失感を覚える。故郷への思いがあるが、過去の恋愛は決して取り戻せるものではなく、故郷のことも、恋人もすべて虚無になってしまう。作中で小陸が無意識の中で呟いた素直な自己の表出が、まさに彼の心理的不安の無意識の反映である。理想の幻滅のプロセスを味わい、微妙な心境の変化を経て仕方なく都市に呑み込まれてしまうことが推察される。「鴛」と同じく都市の異化をモチーフする最初期の作品「上海来的客人」（『江干集』に収録）は、隣人の女性が都市から来た男性に誘惑され、都市に連れられて行ったが、結局淪落の道しか待っていなかったことを描いている。「鴛」は初期の作品を下敷きとしてさらなる現実的な批判を含んだ発展的なものである。そこに現れている初恋の思い出、失意の気持ち、及び過ぎ去った青春、故郷を懐かしみつつの諦念などが、施蛰存小説の一つの帰着点である。

390 施蛰存があるインタビューに対し、外国作家たちが中国作家より優れる点は、伝統文学と西洋文学を融合させていることであると指摘している。張英「訪上海作家施蛰存、王安憶、格非、孫甘露」、『作家』第9期、1999を参照。施蛰存自身もそのような文学を目指し、努力してきたと思われる。

附記：本博士論文は主に2009年から2012年までに発表した以下の各論文を加筆修正した上で、序論と結論を加えたものである。

「文壇デビュー期の施蛰存——『新旧我無成見』を中心に」、『野草』第85期、34～64頁、2010年2月

「施蛰存の初期恋愛小説について」、『東方学』第122号、83～99頁、2011年7月

「施蛰存の社団活動について——蘭社から水沫社まで」、『日本中国学会第一回若手シンポジウム論文集』、233～247頁、2012年2月

「日本・中国におけるハムスン受容——施蛰存の受容を中心に」、『現代中国』第86号、2012年9月

---

## 参考文献

### <中国語>

#### 作品集、翻訳作品集：

- ・施青萍『江干——短篇小説集』維娜絲文学会発行、上海明星印刷公司印行、1923
- ・劉大傑訳『苦恋』中華書局、1929
- ・施蛰存訳『恋愛三昧』光華書局、1933
- ・施蛰存訳『婦心三部曲』上海言行出版社、1945
- ・魏紹昌、吳承恵編『鴛鴦蝴蝶派小説選』上海文芸出版社、1990
- ・范伯群編『鴛鴦蝴蝶——「礼拝六」派作品選』（上下二冊）人民出版社、1991
- ・施蛰存『十年創作集』華東師範大学出版社、1996
- ・劉凌編『北山楼詩』華東師範大学出版社、2000
- ・劉凌編『北山散文集』（一）、『北山散文集』（二）華東師範大学出版社、2001
- ・陳子善編『施蛰存訳文集：老古董俱樂部』広西師範大学出版社、2005
- ・『漢姆生文集』人民文学出版社、2009
- ・劉凌編『施蛰存全集』華東師範大学出版社、2011

#### 民国時期の刊行物：

- ・雑誌  
『小説月報』、『新潮』、『礼拝六』、『半月』、『星期』、『文学旬刊』、『小説世界』、『長青』、『虎林』、『最小』、『蘭友』、『癸亥』、『婦女旬刊』、『筆鐸』、『緑痕』、『緑玉』、『瓔珞』、『無軌列車』、『新文藝』、『草野』、『現代』
- ・新聞  
『申報』、『民国日報』、『時事新報』

#### 単行本：

##### 【文学史関係】

- ・王哲甫『中国新文学運動史』北平傑成印書局、1933
- ・王謠『中国新文学史稿』新文藝出版社、1953
- ・丁易『中国現代文学史略』作家出版社、1955
- ・夏志清『中国現代小説史』（伝記文学叢刊之四十九）伝記文学出版社 1979
- ・錢理群、温儒敏、吳福輝『中国現代文学三十年（修訂本）』北京大学出版社、1998
- ・楊義『中国現代小説史』1～3 卷、人民出版社、2005
- ・范伯群『中国現代通俗文学史（插图本）』北京大学出版社、2007
- ・吳福輝『中国現代文学發展史（插图本）』北京大学出版社、2010

##### 【流派・社団研究】

- ・魏紹昌編『鴛鴦蝴蝶派研究資料（史料部分）』上海文芸出版社、1962
- ・范伯群等編『鴛鴦蝴蝶派文学資料』（上、下）福建省人民出版社出版、1984
- ・施建偉『中国現代文学流派論』人民出版社、1986
- ・趙凌河『中国現代派文学引論』遼寧人民出版社、1990
- ・袁進『鴛鴦蝴蝶派』上海書店出版社、1994

- 吳福輝『都市漩流中的海派小說』湖南教育出版社、1995
- 施蛰存『沙上的足迹』遼寧教育出版社、1995
- 許道明『海派文學論』復旦大學出版社、1999
- 黃獻文『論新感覺派』武漢出版社、2000
- 趙孝萱『鴛鴦蝴蝶派新論』佛光人文社會學院、2002
- 朱壽桐『中國現代社團文學史』人民文學出版社、2004
- 金理『從蘭社到「現代」——以施蛰存·戴望舒·杜衡及劉呐鷗為核心的社團研究』東方出版中心、2006

### 【評伝・作家研究】

- 沈建中編『世紀老人的話：施蛰存卷』遼寧教育出版社、2001
- 王文彬『雨巷中走出的詩人——戴望舒伝論』商務印書館、2006
- 溫奉橋『現代性視野中的張恨水小說』中國海洋大學出版社、2006
- 楊迎平『永遠的現代——施蛰存論』光明日報出版社、2007
- 沈建中『遺留韻事——施蛰存遊踪』文匯出版社、2007
- 陳子善編『夏日最後一朵玫瑰——記施蛰存』上海書店出版社、2008
- 王國倫訳『漢姆生伝記』人民文學出版社、2011

### 【其他】

- 魯迅等著『創作的經驗』天馬書店、1933
- 茅盾『我走過的道路』三聯書店（香港）、1981
- 孔另境編『現代作家書簡』花城出版社、1982
- 曾小逸編『走向世界文學』、湖南人民出版社、1985。
- 周蕾『婦女與中國現代性——東西方之間閱讀記』麦田出版、1995
- 廖超慧『中國現代文學思潮論爭史』武漢出版社、1997
- 陳平原、夏曉虹編『二十世紀中國小說理論資料』（第1卷）北京出版社、1997
- 嚴家炎編『二十世紀中國小說理論資料』（第2卷）北京出版社、1997
- 吳福輝編『二十世紀中國小說理論資料』（第3卷）北京出版社、1997
- 陳平原『中國小說敘事模式的轉變』北京大學出版社、2003
- 沈建中編『施蛰存序跋』東南大學出版社、2003
- 王建輝『出版與近代文明』河南大學出版社、2006
- Albert Mordell 著、劉文榮訳『文學中的色情動機』文匯出版社、2006
- 鄭逸梅『紙帳銅瓶』江蘇文芸出版社、2006
- 史書美『現代的誘惑——書寫半殖民地中國的現代主義（1917-1937）』江蘇人民出版社、2007
- 何成洲『對話北歐經典』北京大學出版社、2009。

### 論文：

- 吳福輝「中國心理小說向現實主義的皈依——兼評『春陽』」、「『十月』第6期、1982
- 応国靖「論施蛰存的小說」、「『華東師範大學學報』第1期、1983
- 陳慧忠「施蛰存與顯尼志勒」、「『中國比較文學』第4期、1984
- 施建偉「現實主義還是現代主義？」、「『中國現代文學研究叢刊』第2期、1985

- ・嚴家炎「略談施蛰存的小説」、『中国現代文学研究叢刊』第3期、1985
- ・張東蓀、陳慧忠「施蛰存與馮尼志勒」、『中国比較文学』第4期、1987
- ・夏元文、俞秀玲「施蛰存與馮尼茨勒」、『揚州師院學報』第2期、1991。
- ・袁荻涌「魯迅與北歐文学」、『開封教育學院學報』第1期、1995
- ・湯哲生「她們怎樣變成祥林嫂」、『新文学史料』第3期、2009

## ＜日本語＞

### 単行本：

- ・三宅やす子『未亡人論』、文化生活研究会、1923
- ・福田清人『硯友社の文学運動』山海堂出版部、1933
- ・福島章『愛の幻想——対人病理の精神分析』中央公論社、1978。
- ・木村毅『時間と自己』中央公論社、1980。
- ・A・アドラー著、高尾利数訳『人生の意味の心理学』春秋社、1984
- ・藤井省三『ロシアの影——夏目漱石と魯迅』、平凡社選書、1985
- ・岩淵達治『シュニツラー』清水書院、1994
- ・狭間直樹編『一九二〇年代の中国』汲古書院、1995
- ・中里見敬『中国小説の物語論的研究』汲古書院、1996
- ・エレン・ケイ著、小野寺信、小野寺百合子訳『恋愛と結婚』、新評論、1997。
- ・施蛰存著、青野繁治訳『沙の上の足跡——ある中国モダニズム作家の回想』大阪外国語大学学術出版委員会、1999
- ・平岡敏夫『＜夕暮れ＞の文学史』おうふう、2004
- ・井上健『文豪の翻訳力——近現代日本の作家翻訳 谷崎潤一郎から村上春樹まで』ランダムハウスジャパン、2011
- ・藤井省三『中国語圏文学』東京大学出版会、2011

### 論文：

- ・立花哲雄「愛の幻想について——シュニツラーの『ベルタ・ガルラン夫人』を中心にし  
て」、『防衛医科大学校進学課程研究紀要』第9号、1986
- ・加藤寛蔵「シュニツラー文学の背景」、『北海道大学医療技術短期大学部紀要』第9号、  
1997
- ・斎藤昌人「シュニツラー“Frau Berta Garlan”に描かれる性」、『高知大学学術研究報告』  
第48巻、1999
- ・斎藤敏康「施蛰存とA.シュニツラー——『婦心三部曲』と『霧』、『春陽』、『野草』  
第66号、2000
- ・斎藤敏康「雑誌『半月』における施蛰存」『立命館経済学』第50巻第5号、2001年12月
- ・松崎裕人「外への希求とその困難——アルトゥア・シュニツラー『生の叫び』試論」、  
『多元的文化の論理』東北大学出版会、2005年5月
- ・斎藤昌人「シュニツラーが描く二人の女性——性はどのように語られるか」、『国際社  
会文化研究』第11巻、2010

---

付録資料:

新発見施蛰存初期作品目録 (1921～1925)

(未見) 翻訳「生育女子須知」、浙江『民報』副刊「婦女周刊」に掲載。

(未見) ドイツ烏髪公司の制作映画『斬龍遇仙記』についての映画評論「梅影軒偶憶録」、  
『時報』副刊「余興」に掲載。

1921

9. 13 短篇小説「廉価的麪包」『民国日報』副刊「覚悟」に発表。署名施太邱。

1922

4. 1 短篇小説「恢復名誉之夢」、『礼拝六』第155期に掲載。署名青萍。

5. 13 短篇小説「老画師」、『礼拝六』第161期に掲載。署名施青萍、松江第三  
中学。

6. 25 短篇小説「寂寞的街」、『星期』第17号に掲載。署名施青萍。

7. 24 「半月詞典」、『半月』第1巻第20号に掲載。

7. 25 「逃暑談片」(一) 午後蟬声、(二) 城頭小歩、(三) 田野招涼、『申報・  
自由談』に掲載。

7. 31 「逃暑談片」(四) 涼思繞塔、(五) 緑陰垂釣、『申報・自由談』に掲載。

8. 1 「逃暑談片」(六) 妄言妄聽発、(七) 売花声里、『申報・自由談』に掲載。

9. 6 「半月女兒詞」、『半月』第2巻第1号に掲載。

11. 26 評論「新婦女之敵」、『婦女旬刊』第90期に掲載。署名施蛰存。

1923

3. 2 短篇小説「伯叔之間」、『半月』第2巻第12号に掲載。署名施青萍。

3. 5 「観灯記」(上)、『申報・自由談』に掲載。

3. 6 「観灯記」(下)、『申報・自由談』に掲載。

3. 21 旧体詩「不忍詞」、『蘭友』第8期に掲載。署名青萍。

4. 11 「紅禅記」(一)「玉碎記 不忍詞本事之一」、『蘭友』第10期に掲載。署名青  
萍。

4. 16 散文「山歌綴俊」、『半月』第2巻第15号に掲載。署名施青萍。

5. 1 「紅禅記」(一)玉碎記「不忍詞本事之一」、『蘭友』第11期に掲載。署名青萍。

5. 8 「競園賞鵲記」、『申報・自由談』に掲載。

5. 18 「相足譚」、『申報・自由談』に掲載。

5. 26 「青萍談吐」、『虎林』第5期に掲載。署名施青萍。

6. 1 「紅禅記」(一)玉碎記「不忍詞本事之一(三統)」、『蘭友』第14期に掲載。  
署名青萍。

6. 11 「紅禅記」(二)執紼記「不忍詞本事之二」、『蘭友』第15期に掲載。署名  
施青萍。

6. 14 短篇小説「童妃紀」、『半月』第2巻第19号に掲載。署名施青萍。

6. 21 「紅禅記」(二)執紼記(二統)「不忍詞本事之二」、『蘭友』第16期に掲  
載。署名施青萍。

7. 1 「紅禅記」(二)執紼記(三統)「不忍詞本事之二」、『蘭友』第17期に掲



載。署名施青萍。

9. 5 「談莫泊桑的小說」、『最小』第 91 号の「關於小説之文」欄に掲載。署名施青萍。

9. 7 「新旧我無成見」、『最小』第 92 号の「關於小説之文」欄に掲載。署名施青萍。

9. 9 「聞名不如見面」、『最小』第 93 号に掲載。署名施青萍。

9. 11 「名人情書訳話」、『最小』第 94 号に掲載。署名施青萍。

9. 23 「此亦直訳乎」、『最小』第 100 号に掲載。署名施青萍。

10. 5 「西湖憶語」、『最小』第 106 号に掲載。署名施青萍。

10. 7 「西湖憶語」(二)、『最小』第 107 号に掲載。署名施青萍。

10. 13 「西湖憶語」(三)、『最小』第 110 号に掲載。署名施青萍。

10. 15 「西湖憶語」(四)、『最小』第 111 号に掲載。署名施青萍。

10. 17 「西湖憶語」(五)、『最小』第 112 号に掲載。署名施青萍。

10. 23 「上海大学的精神」、『民国日報』副刊「覚悟」に掲載。

10. 25 「山中瑣紀」(上)、『申報・自由談』に掲載。

10. 26 「山中瑣紀」(中)、『申報・自由談』に掲載。「浜江雜記」、『時報』に掲載。

10. 27 「山中瑣紀」(下)、『申報・自由談』に掲載。「浜江雜記」(続)、『時報』に掲載。

10. 30 「浜江雜記」(続)、『時報』に掲載。

11. 4 「我的名字和別署」、『最小』第 121 号に掲載。署名施青萍。

11. 6 「我的名字和別署」(続)、「西湖憶語」、『最小』第 122 号に掲載。署名施青萍。

11. 8 「紅嬋室漫記」、『半月』第 3 卷第 4 号に掲載。署名施青萍。

11. 20 「致馬鵲魂書」、『最小』第 129 号に掲載。署名施青萍。

12. 9 「朋友的書室」、『世界小報』第 297 号に掲載。

12. 10 「蘋華室詩見一周南・卷耳」、『時事新報』副刊「学灯」に掲載。

12. 13 「朋友的書室」(二)、『世界小報』第 301 号に掲載。

12. 31 「致姚民哀書」、『世界小報』第 319 号に掲載。

#### 1924

1. 5 「波斯詩人 Kabhl Gilran 的散文詩」、『民国日報』副刊「平民」第 187 期に掲載。署名施蟄存。

1. 6 短篇小説「聖誕華筵記」、『半月』第 3 卷第 8 号に掲載。署名施青萍。

1. 16 短篇小説「売芸者」、『工商学報』第 2 期に掲載。署名施青萍。

2. 5 短篇小説「綵勝紀」、『半月』第 3 卷第 10 号に掲載。署名施青萍。

2. 18 「紅嬋室漫記」、「広州民国日報」に掲載。署名施青萍。

3. 2 「新浪漫譚」、『世界小報』第 372 号に掲載。

3. 5 「紅嬋室漫記」、『半月』第 3 卷第 12 号に掲載。署名施青萍。「答香港 CCC 君」、「西湖憶語」、『最小』第 164 号に掲載。署名施青萍。

3. 8 「新浪漫譚」、『世界小報』第 378 号に掲載。

3. 12 「新浪漫譚」、『世界小報』第 382 号に掲載。

4. 4 「新浪漫譚」、『世界小報』第 395 号に掲載。

- 
4. 1 0 「新浪漫譚」、『世界小報』第 401 号に掲載。
6. 2 4 「紅禪室漫記」、「広州民国日報」に掲載。署名青萍。
6. 2 7 「紅禪室漫記」、「広州民国日報」に掲載。署名青萍。
7. 1 6 「半月小酒令」（補白）、『半月』第 3 卷第 21 号に掲載。
- 1 2. 2 6 「斬龍遇仙記」、『時報』に掲載。
- 1 2. 2 7 「斬龍遇仙記」（続）、『時報』に掲載。
- 1 2. 2 8 「斬龍遇仙記」（続）、『時報』に掲載。
- 1 2. 2 9 「斬龍遇仙記」（続）、『時報』に掲載。
- 1 2. 3 0 「斬龍遇仙記」（続）、『時報』に掲載。
- 1 2. 3 1 「斬龍遇仙記」（続）、『時報』に掲載。
- 1 9 2 5
3. 2 2 「施青萍致姚民哀書」、『世界小報』第 634 号に掲載。
4. 2 0 「雲間眉子施蟄存致金君珏先生書」、『世界小報』第 663 号に掲載。
4. 2 2 「雲間眉子施蟄存致王受生先生書」、『世界小報』第 665 号に掲載。
4. 2 3 「雲間眉子施蟄存致徐碧波先生書」、『世界小報』第 666 号に掲載。
4. 2 6 「雲間眉子施蟄存致姚民哀先生書」、『世界小報』第 669 号に掲載。
5. 7 短篇小説「棄家記」、『半月』第 3 卷第 4 号に掲載。署名施青萍。
- 5 「寂寞的街」が大東書局編集の『社会鏡』（第三版）に収録され出版された。
7. 2 8 「施蟄存致姚民哀書」、『世界小報』第 762 号に掲載。